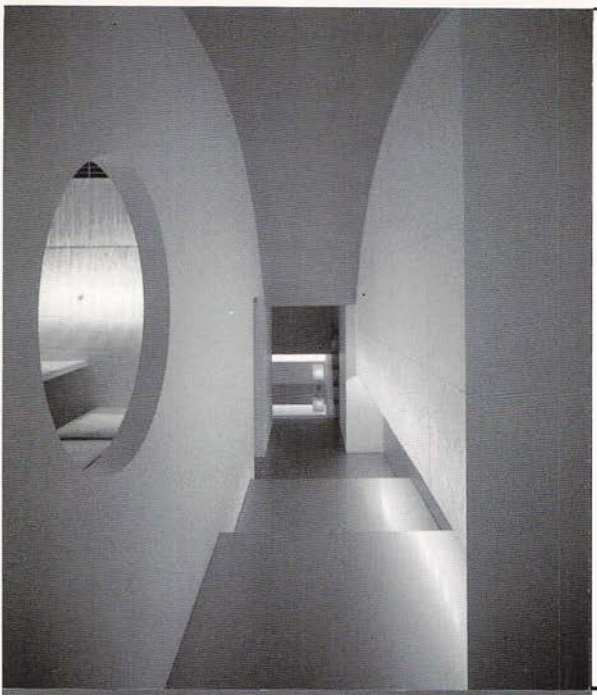
山ざくら

第28号　平成9年11月

関東氷上郷友会



設計・施工
㈱桂建築計画工房
会長 村上末吉

月刊商店建築提供

月刊商店建築表紙の一部

建築図書出版
㈱商店建築社
社長 村上末吉

山ぎろう

第28号

山ざる　第28号　目次

〈表紙〉常岡幹彦画・朝日に匂う（120号・山南町）
〈口絵写真〉①柏原八幡神社とヘールボップ彗星（撮影・谷口忠司）
②③歌道谷から見た保月城連山 ④川代渓谷（撮影・徳田八郎衛）

≪ごあいさつ≫
郷友の琴線にふれて……渡邊隆男　5／郷友会との長いつきあい……木村ったエ　7
郷友会の願い……常岡幹彦　8／丹波の土や木のにおい……坂上勝朗　8

平成八年度〝集いの会〟開く……10／会計報告……15

≪追悼録≫信念の人・足立三治さん……池田忍　18／上山顯さんを偲ぶ……坂本重雄　19
丹波を愛した細見綾子さん……宮野近　21

≪ふるさと随想≫
雨の日に晴の日に……大塚富久子　23／八十歳のクラス会……近藤勇　25
織田信親公のことども……藤本正也　26／ふる里にむかう想い……田中一美　28
生郷村と父母の想い出……大塚秀弌　30／九州と丹波のふるさと……坂口充子　31
私と丹波、ふみよ会のことなど……大垣忠男　33／母の実家への旅……大江範子　36
丹波の変貌と雑感……荻野和則　37／厄除さん……中野真理子　40
故郷へ「行く」と「帰る」……河野征美　41／「水分かれ橋」運河計画／……葵倉暁円　42

《柏原高校百周年・氷上高校五十周年を祝う》
柏高百周年式典を終えて……堀井隆水　44／柏高百周年式典　参観記……徳田八郎衛　46
「拓く」をテーマに創立五十周年……芦田拓雄　47

《近況・エッセイ》
スペイン・バルセロナにて……植田茂樹　49／富士登山……荻野義雄　51
私の近況……井田悦子　52／中国を訪れて……酒井重男　53
丹波皇居奉仕団の一員として……北村貞子　55／佐渡が島に渡る……生田清弘　57
〝時は春、日はあした……〟……矢尾鐵太郎　60／主は近し……池田達人　62
読書の中に出てきた「丹波」……本城英明　63／「丹波人ＮＯＷ」こぼれ話……上高子　65

《わが出発（たびだち）のとき》　劇団「わらび座」への道……清家久美子　68
《私の職場・私の仕事》常磐新線プロジェクト……谷口浩章　70
《ふるさと研究》
日本の分水界と水分れ……久保良雄　74／『青垣町誌』を読む……足立静雄　78
丹波黒井城の姫君たち……前田武彦　82
ふるさとの祭り（市島の十日恵比寿）……86
ふるさとの民話と伝説（馬頭観音）……88
《丹波通信》「ひかみ」市への合併運動……小田晋作　90
《ＢＯＯＫＳ》……92
《インフォメーション》展覧会……95／同窓生交歓……98／丹波の動き……101
協賛広告……105／編集後記……220

臼挽き歌

—山南町史より—

○ 今年や豊年穂に穂がさいて　道の小草に金がなる

○ 破れ草履も粗末にゃならぬ　お米育てた親じゃもの

○ わしは備前の岡山育ち　米のなる木はまだ知らぬ

○ 太田の伝平さん臼すり上手　朝から晩まで三石五斗ごいごい

○ 来いというならわしゃどこまでも　長い刀のさきまでも

○ 心からとてわが土地離れ　知らぬ他国で苦労する

○ 臼は大臼重たいけれど　様が門に立ちゃ　ちゅで回る

郷友の琴線にふれて

会長　渡邊隆男

芦田均さん、有田喜一さん、石橋治郎八さん、堀川萬次さん、西川政一さん、足立三治さん、松山幸逸さん、伴仲信次さんたち、まだ見ぬ十数名の大先輩が居並ぶ郷友会に、私がはじめて恐る恐る顔を出したのは、たしか昭和三十一年の春、二十七歳の頃のことでした。

丸の内の堀端、赤煉瓦ビルの上階の小部屋でした。ドアを入ったとたんにこりゃとんだ場違いだとUターンしかかると、よく来たねと呼び止めたのが私の叔父の渡邊金三さんでした。自己紹介をやれといわれる。「二玄社という出版社をはじめて三年になります。書道美術、東洋の精神美の出版に取り組んでいます。生まれは氷上郡沼貫村朝坂……」緊張のあまり真っ赤になったものです。だれかから声があった。「まだ若いんだからこれからやナ、頑張りなさい。」「ハイ！」

前総理・芦田さんの政局談話が始まる。「私がトルコに駐

会長あいさつ

在しておりました経験から、ここで確信を持って予言しておきましょう。今もってキナ臭い中近東の火種は、永久に消えることはないでしょう。なぜならば、あれは千年このかた、子々孫々、異宗教に根ざす、血で血を洗う怨念の宿命的な骨肉の争いだからです……」英国紳士の風貌にチョビ髭、あの歯切れよい口調までを、今も克明に覚えているのです。

あれから四十年、私は郷友会にはつとめて出席しました。

遠慮ない丹波弁の茶目っ気な老人が、ときめく日商岩井の大社長・西川さんだとあとでわかったり、堀川萬次さんからもらった名刺に〝日本一の性豪〟という肩書きが大書してあったり、学生時代から尊敬していた物理学者の小谷正雄さんや日本画の大御所・常岡文亀さんに親しくお目にかかれたりして、いやはや多士済々、丹波ちゅうのは大したお里なんだなと驚くばかりでした。そんな諸もろの先輩や仲間にめぐまれるうち、いつしか〝山家育ち、丹波山ざる〟のひが目が消えて、とめどもなく自信の湧く思いにかられるのでした。

仕事の利害も娑婆のしがらみもない、はらからのほのぼのとした交わり、同郷ゆえの親しみはまた格別のものでした。

松山幸逸さんから『山ざる』誌を手伝えといわれてから早くも二十五年が過ぎました。当時は二〇〇部で間に合ったのが今は一五〇〇部にもなり、寄稿も増えて充実の一途をたどりました。その間、さまざまな記事を通して郷友の〝琴線〟

にふれることができました。異口同音に、相通う心情があふれています。年を経るにつれて薄らぐ古里の記憶とは裏腹に、年とともにつのる故郷の性（さが）、望郷の念、誰にも潜むそんな琴線の心地よいハーモニーに浸ることのできる「山ざる」誌は、まさに郷友のオアシスなのでありましょう。

今は亡き松山幸逸さんも足立源治さんも、御み足がおぼつかなくなるまで「山ざる」誌のお世話に打ち込まれました。『山ざる』誌を頼む、これが郷友会のシンボルなんだから、と、いつか言い残された言葉が忘れられません。

前会長の村上末吉さんも伴仲さんのあとを受けて十年、この郷友会に尽力されて今日の基盤を築かれました。

昨年十一月、関東氷上郷友会の総会で、私が会長の指名を受けました。前会長の村上末吉さんや理事の皆さんに推されたのですが、今や千数百名にも達した会員と郷友会一〇〇年を越える伝統の重みを思うと、私は内心忸怩たるものがありました。とは申せこの会はひたすらに親睦のつどいであり、それ以外のなにものでもないのです。つまり役員はみなそのお世話役なのだと割り切って、会長という名の世話人をお受けした次第です。どうか皆様のご協力をお願い致します。

副会長の役は木村つた江さん、常岡幹彦さん、坂上勝朗さんにお願い致しました。「山ざる」誌は池田忍さんを中心に十数名の方々にご協力いただいております。会員名簿の管理

会長あいさつ

や通信発送事務、それに会合のお世話などは坂上勝朗さんが一手に受け持ってくださっております。また会の経理は谷口浩章さん、そのほか理事の皆さんもそれぞれに何かと、多忙な時間をやりくってご協力いただいております。この紙上をかりて心から御礼を申し上げます。

なお、この郷友会には年会費二〇〇〇円という定めがありますが、それはぜひご協力をという意図であって、必ずしも義務づけるものではありません。会員篤志家の会誌への広告協賛金や寄付金によって大きく支援されているのです。すべてが愛郷者のボランティア活動に支えられた会なのです。そのあたりもどうかご理解いただきたいと思います。

年に一度の郷友のつどいと、この「山ざる」誌とによって、郷友の輪をもっともっと広げたいと思います。まだ名簿にもれている方も多いはずです。また毎年のように関東や海外に志を立てて郷関を出る若い後輩たちも、残らずこの郷友会に参加してほしいのです。皆様お気づきの方がありましたら、ぜひとも事務局までお知らせください。本誌をお送りし、来年の会員名簿に加えたいと思います。

先輩も後輩も、老若男女みな垣根なしに交流できるこの会を、会員の皆様とともにいつまでも温め続けたいものです。

会員の皆様のますますのご健康とお幸せとを祈念して、会長就任のご挨拶と致します。

副会長あいさつ

郷友会との長いつきあい

副会長　木村　つた江

私がこの会に初めて出席いたしましたのは、昭和十一年娘ざかりの頃でした。故光山武雄様のお伴をして池袋の会場へ行った記憶があります。

それから終戦の翌年（昭和二十一年）新橋駅前の日本食堂で、猪なべを囲んでの集いでした。当日出席者は数十名、その中で女性は僅か数名で、何となく場違いの所に来たように思ったものです。そしてその後は、敗戦によるインフレ・食糧難、子育て、夫の事業の手助け等で、この会にも欠席がちでした。

昭和三十九年東京オリンピックが開催された年の春、私たち一家は杉並区から調布市に移住しました。間もなく三人の子供たちも社会人となり、夫の事業も軌道に乗り、私の心にもゆとりが出来てきました。そんな折に会誌『山ざる』第一号が発刊されました。それを機会に私は「何かいいことあるかしら（出会い）」と、自分なりに期待を抱いて出席するようになりました。そしていつの間にか三十年の歳月が過ぎ去っていたのです。

昨年、私は郷友会から傘寿のお祝いをして頂き改めて自分の年齢を認識したようなわけで恥ずかしい限りでございます。

この度私は、渡辺会長様はじめ、坂上、常岡両副会長様にご迷惑をかけないように心して努めさせて頂くつもりでおります。何のお役にも立てませんが「枯木も山の何とやら」でお許しを頂き、今後共どうぞよろしくお願い申し上げます。

郷友会の願い

副会長　常岡　幹彦

『山ざる』誌第一号の発行は昭和四十一年六月ですが、編集後記に「会員の実数は六百名を越す筈だが名簿は三百十七名にとどまった」とある。

第二号は三年後の四十五年十一月、第三号は四十七年一月の発行となっていますが、以後四十八年から毎年発行となり、今年で二十八号を数えるに至っ

ております。

私が郷友会に出席して理事をお受けした頃は石橋治郎八会長の時で、その後、足立三治、伴仲信次、村上末吉、渡邊隆男各会長さんとなり、その間、会員数も激増し運営等も隔世の感がありますが、『山ざる』第一号の「発刊に寄せて」に当時の石橋会長は「従来度々会員の集会を催して相互の親睦をはかってきたが、会員の消息とか、会員の社会活動の模様を郷土に伝える手だてが少ない感があり、従って郷土との連帯感を強めて郷友会創立の趣旨を徹底させるにはどうしても機関誌をもつ必要が生じた」と書かれているのを読むにつけ、会の伝統の重さと共に、今後の発展と充実を期するには私達と更に若い会員の情熱と活躍にかかっていると思います。

郷友会もそれぞれの時代とともに歩んで参りましたが、現在は郷里に柏原、氷上西、氷上と三つの高校があり、やがては氷上市に……との話も聞いております。郷友会創立の趣旨である会員の連帯感をさらに強めてゆきたいと思っておりますが、氷上西、氷上の両高校や郡外の高校を卒業された方、またその他独自の道を歩まれた方々等々、是非積極的にご参加いただき交流の幅をひろめてゆきたいと、同じタンバベンの山ざるの一員として心から願っておりますので、どうか気軽に参加して下さい。また、『山ざる』へのご寄稿も大歓迎でお待ちしております。

副会長あいさつ

丹波の土や木のにおい

副会長　坂上勝朗

私と本会の出会いは、ちょうど『山ざる』誌の歴史に重なります。友人に誘われて、総会におそるおそる出席してみると、果たせるかな、周りはどなたも功成り名遂げた偉大な先輩達ばかり。とんだ場違いのところへ出てきてしまったと後悔したのを、昨日のことのように憶えています。

それから数年は、仕事にも追われていたせいもあって、会のほうには出ないでいたのですが、とある日に『山ざる』創刊時に編集長をなさっていた松山幸逸さんが、わざわざ私の職場までお見えになり、『山ざる』を手伝えとの厳命。以後、会員名簿の整理、総会通知や『山ざる』の発送など、事務局まがいの仕事に携わることになりました。

これを通じて、多く郷友の方々との出会いを得、自分の育った丹波の地が、人や自然のいかに豊かな故郷（くに）であったかに気づかされたのでした。名簿の上だけのおつきあいの方々、年

一回の総会懇親会に集まって来られる先輩方の醸し出される雰囲気の中を漂っていると、丹波の土や木や水のにおいがして、とても気分がなごむのです。

いつまでも若いと思っていましたのに、私もとっくに還暦を過ぎてしまいました。これからの私の、この会での役割は、先輩や現会員の皆様に頂いたおかげを次の世代に引き継ぐことだと考えています。

どうか忌憚ないご意見をどしどしお寄せいただいて、百年の歴史を二百年にも三百年にも伸ばしていけるよう、ご支援をお願い申しあげます。

［郷友の集い］ご案内

同郷だから
だれとでも
気軽に語り合える
郷友の集い

ことしもぜひお出かけください。

◆と　き　平成9年11月24日（月・休日）
　　正午より
◆ところ　千代田区九段下・九段会館
◆会　費　6000円（当日受付にてお支払い下さい）
◆問合せ　関東氷上郷友会事務局
　　（☎03－3293－2961・坂上）

会場では、恒例の各種景品が当たる「お楽しみ抽選会」を行います。会員の方々からの景品のご寄進をお願い致します。

平成８年度〝集いの会〟開く

役員改選し新体制スタート

恒例の関東氷上郷友会〝集いの会〟は、平成八年十一月二十三日（勤労感謝の日）九段会館にて催され、総会・祝寿会・懇親会が行われた。参加者は総勢八十三名。

総会では、村上会長のあいさつのあと、議事に移り、任期満了による「役員改選の件」が審議され、満場一致で理事会原案通り可決された。

これにより、渡邊隆男氏（氷上町出身）を会長とする新体制の発足が決まった。

次に坂上勝朗理事より平成八年度会務報告、足立和巳理事より会計報告（創立百周年記念大会特別会計、平成八年度一般会計）、荻野武監事より監査報告があり、いずれも満場一致の承認を得て、滞りなく総会を閉会した。

続く祝寿会では、当年八十歳を迎えられた会員に会長より祝辞と花束を贈った。この年お祝いを申し上げたのは、木村つた江様、小山靖子様、近藤勇様、西垣きみ子様、吉住自由造様の五名であった。吉住自由造様より「これからが本当の人生」という旨の謝辞があり、会場からは意気軒昂な大先輩を称える暖かい拍手が湧いた。

懇親会に入っては、新会長渡邊隆男氏のあいさつ、来賓代表植田憲雄柏陵同窓会会長の祝辞のあと、前会長村上末吉氏の乾杯の音頭で、いよいよ交歓の宴の幕が切って落とされる。

今回は百周年記念大会の余韻もあってか、平常の集いの会

としては、久々の八十余名の参会を得て、会場は丹波弁の活気に溢れた。定番となったアトラクション、〝お楽しみ抽選会〟への景品寄贈も、例年を上回る数と質の充実が見られた。

午後三時三十分閉会。

新役員の陣容、当日の出席者及びお楽しみ抽選会景品寄贈者名は次の通りである。

◉平成九年度役員（敬称略）

会　　長　渡邊　隆男
副 会 長　木村つた江　常岡　幹彦　坂上　勝朗
顧　　問　梶原　　清　佐々木盛雄　村上　末吉
監　　事　足立　和巳　荻野　　武
常任理事　足立　謙悟　足立　静雄　池田　　忍
大野　善三　小田富士夫　木呂子恵美子
鶴田ゆき子　宮野　　近
理　　事　芦田　重秋　足立　勲平　足立　吉雄
岡　　吉明　岡林　逸男　小川　晴通
粕谷　　進　片岡クミ子　岸本　　勲
久保　良雄　坂本　重雄　高見嘉都司
高見　秀史　田中　　寛　谷口　浩章
千種　倫幸　千葉　淳子　徳田八郎衛
仲　　一聰　西川　宣孝　広瀬　安伸

細川　倫夫　細見　和明　本城　英明
前田　武彦　増井　攻　村上　昇
吉住自由造

◉平成八年度〝集いの会〟出席者（順不同・敬称略）

〈来　賓〉

植田　憲雄（柏陵同窓会会長）
芦田　拓雄（氷上高等学校校長）
堀井　隆水（柏原高等学校校長）

〈祝　寿〉

木村つた江　近藤　勇　吉住自由造

〈会　員〉

○青垣町（四名）
足立和巳　足立勲平　足立静雄　安原三智子

○市島町（九名）
荻野武　片岡クミ子　塩見みつゑ　渋谷要之助　高見秀史
鶴田ゆき子　藤田玲子　余田功　余田士郎

○柏原町（十八名）
池畑豪士郎　上田吉明　上山顕　小田晋作　小田富士夫
岡吉明　岡洋子　坂本重雄　高田美佐子　谷敬三　谷達雄
常岡幹彦　徳田八郎衛　前田和秀　松下文雄　宮野近

○春日町（一〇名）
井手梅野　木呂子恵美子　桑谷中洋　近藤勇夫　近藤田治
斎藤陽子　中野周子　前田武彦　村上末吉　森本益夫

○山南町（十三名）
池田忍　上田雄彦　梶原矢寸子　久保春雄　田中寛
千葉淳子　仲一聰　中居篤子　広瀬安伸　広瀬庸世
増井攻　依藤廣次　若森敏郎　渡辺貴美子

○氷上町（二十二名）
葦田冬子　芦田やよい　足立謙悟　足立順治　足立吉雄
稲次正年　井上巌　上高子　大地富美子　兼古昌明
岸本勲　小森康宏　坂上勝朗　谷口浩章　地井佐和子
長谷川尚　樋口ふみ子　細見利明　本城英明　山口和久
渡邊隆男

○黒田庄町（一名）
藤田正雄

◉お楽しみ抽選会景品寄贈者

足立　静雄　テレホンカード　一〇枚
足立　誠一　テレホンカード　一〇枚
中居　篤子　モカロール　一〇個
高見嘉都司　丹波漬　一〇個
池畑豪士郎　銘茶　二〇個
今井　雅之　ビール券　二〇枚

橋本　真二　箱入りピーナッツ　二個
久保　豊　オードブル皿五枚揃い　一個
近藤　哲夫　バスタオル　一個
フェイスタオル二枚入　一個
タオルケット　二個
堀井　隆川　FM・AMラジオ　三個
AMラジオ　三個
足立かをる　パンティーストッキング　一〇枚
足立　和巳　日高昆布　一〇個
坂本　重雄　メリー・チョコレート　六個
赤対　哲郎　乾電池単3・四個入　三〇セット
広瀬　安伸　充電式クリーナー　一個
木村つた江　著書『竹の秋』　七〇冊
錦松梅　五個
谷川　隆治　水切りホルダー　八〇個
上　高子　著書『子育てのあと　アメリカがあった』　三冊
近藤　勇夫　せんべい　三個
吉住自由造　薬用養命酒　五本
鶴田　宏　明治ミルクチョコレート　八〇枚
荻野　武　紳士用ソックス　一〇個
足立　勲平　テレホンカード　一〇枚
小田富士夫　お菓子「つくねまめ」　一〇個
梶原　清　中国茶　一二個
久保　春雄　ピーナッツ　五個
宮野　近　アロエ石けん　五個
胡蝶蘭シャンプー　五個
徳田八郎衛　著書『間にあった兵器』　三冊
木呂子恵美子　ちりめん小風呂敷　三枚
坂上　勝朗　ずわいがに　二個
高見　秀史　カリフォルニア・ワイン　四本
フランス・ワイン　二本
千葉　淳子　大納言小豆　一〇個
片岡クミ子　おかき　一〇個
関東氷上郷友会　平成八年産丹波黒豆　五個
同丹波山芋　五個

◉寄付者ご芳名

ご芳志まことに有り難うございました。厚く御礼申し上げます。広告協賛金と共に会の運営費や会誌の発行資金として活用させていただきます。

芦田　卓雄（氷上高校長）殿　一〇、〇〇〇円
植田憲雄殿（柏陵同窓会）殿　一〇、〇〇〇円
堀井隆水（柏原高校長）殿　一〇、〇〇〇円

山本　清士殿	八、〇〇〇円
足立　吉雄殿	五、〇〇〇円
井本　義一殿	五、〇〇〇円
岡田　充利殿	五、〇〇〇円
木呂子恵美子殿	五、〇〇〇円
近藤　勇殿	五、〇〇〇円
谷口　浩章殿	四、〇〇〇円
小寺　確郎殿	三、〇〇〇円
坂上　豊殿	三、〇〇〇円
高橋世志子殿	三、〇〇〇円
千種　倫幸殿	三、〇〇〇円
東郷　茂殿	三、〇〇〇円
波多　洋三殿	三、〇〇〇円
拝野　哲也殿	三、〇〇〇円
東田　実殿	三、〇〇〇円
藤田　千治殿	三、〇〇〇円
山口　和久殿	三、〇〇〇円
義積　保殿	三、〇〇〇円
久保　良雄殿	二、〇〇〇円
坂本　重雄殿	一、〇〇〇円
野村　節三殿	一、〇〇〇円
松永　富子殿	一、〇〇〇円

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますよう願い上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、〝丹波のきずな〟の強さを思います。

（山ざる編集部）

会　計　報　告　書

（平成８年７月１日～平成９年６月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・谷口　浩章
鶴田ゆき子

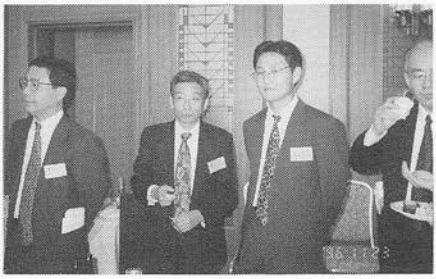
（単位：円）

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	1,646,622	現金 106,372 郵便貯金 561,791 定額貯金 800,000 振替貯金 200,950 普通預金 150,091	出版費	1,081,773	『山ざる』27号
			通信・印刷費	228,020	総会、役員会案内等
年会費収入	585,000	延 217名	総会費	463,417	総会関係の支払
総会費収入	462,000	77名	会議費	355,620	役員会等
役員会費収入	138,000	延 46名	支払手数料	15,193	振替手数料 12,390 送金手数料 2,803
編集会費収入	30,000	10名	消耗・備品費	60,539	
寄付金	105,000	延 25名	繰越金	1,562,741	郵便貯金 561,791 定額貯金 800,000 振替貯金 200,950
広告料収入	800,000	延 63名			
受取利息	681	普通預金 108 郵便貯金 573			
合計	3,767,303		合計	3,767,303	

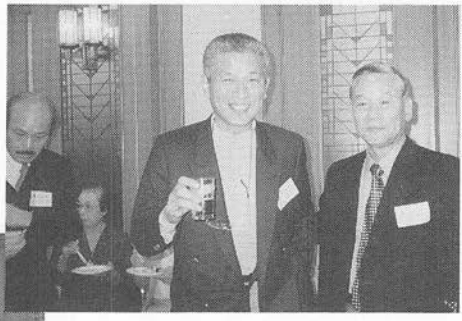
監査の結果、上記の通り相違ありません。

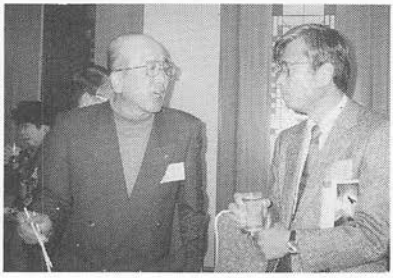
平成９年７月24日　　足立　和巳　　荻野　　武

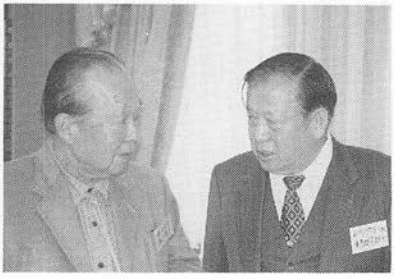
総会スナップ



総会スナップ







信念の人・足立三治さん

池田　忍（山南町）

「威厳」なる言葉はこの人のためにあるように思えた。背丈は高い方ではなかったが、一点のスキもない着こなしで背筋を伸ばし、正面を見据えて歩かれる姿には、近寄りがたい「威厳」が漂っていた。明治生まれの人の人生に抱く理想が「人格」の形成であり、完成であるとするなら、この人は生涯かけて、この理想に生きたのではないだろうか。

いま足立三治さんについて書こうとすると、ある情景が目に浮かぶ。郷友会の総会、三治さんは十年間、会長を務められ、勇退されたあとも欠かさず総会には出席され、パーティでの乾杯の音頭をとられた。コップを片手にマイクの前に立ち、厳しい顔で一言、二言、押しころした声で口上を述べたかと思うと、たちまち乾杯、せっかちなのか、シャイなのか、しかもコップを持つ手の上げ方は、「高らか」ではない、ほんの少し顔のあたりに持ち上げる程度、その動作は「歓喜」というよりも「祈り」のようであった。

「祈り」といえば、三治さんは信仰心の強い人であった。絶えず信念を持ち、努力の人であったが、「神仏のお加護」による感謝の気持を忘れない人であった。

私が、こんな近寄りがたい「威厳の人」とおそるおそる接触するようになったのは、三治さんが、傘寿を迎えられた記念に自叙伝を出版されたときからである。いま、その本（『私の歩んだ道』昭和六十二年刊）から、かいつまんで三治さんの「立志伝」を記しておこう。

足立三治さんは、明治四十年遠阪村（現青垣町）生まれ。二男坊であったが、尋常高等小学校卒業後も父親の元で家業に就かされ、ウツウツとしているとき、遠戚の人の口利きで、東京の「つるや洋装店」に就職することになり、父の反対を押し切って上京した。大正十三年のことである。

「つるや」は旧新井村出身の矢本平蔵氏が創設した本店、当時としては珍しいチェーン店を持ち、三治さんは麻布支店に配属された。持ち前の負けじ魂でたちまち頭角を

現わし、新店舗の店長に抜擢された。がそのとき病魔に冒され、二度と帰らぬと決意した故郷に病身を横たえた。病名は結核性腰椎カリエス、当時は不治の病であるが、信仰心を支えにした不屈の闘魂がその病魔にも打ち勝ち、再起を期して昭和八年再び上京する。

しかし、古巣はすでに後任者がおり、やむなく退職。行商の身となったが、鎌倉の避暑客めあてに当時流行のアッパッパ（簡単服）などを売り出したのが大当たりをとり、その資金を元手に川崎駅前に「つるや洋装店」を開業（昭和九年）する。

このあたりの早わざは「精神一到」の三治さんの面目躍如たるものがあるが、終戦による廃墟からの立ち上がりも早い。昭和二十一年「つるや産業株式会社」を創設し、戦前の小売商から婦人服のメーカーへと鮮やかな転進を図る。戦後の女性の社会進出とともに婦人服はプレタポルテへと向かい、時代の波に乗って社業は発展する。

一方では、ロータリークラブや商工会議所などのボランティア活動にも身を乗り出していく。特にロータリーでは無遅刻無欠勤の栄誉に輝き、昨年、米寿の祝いを会員により盛大に催され、壇上に上がった三治さんは、無上の喜びに浸っているようであった。めったに笑わぬ三治さんの「破顔一笑」が私の見た最後であった。平成八年十月ご逝去、享年八十九歳。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

上山　顯さんを偲ぶ

坂本　重雄（柏原町）

さる一月十日、柏陵（柏原高校）同窓会東京支部長を永年にわたって務められ、関東氷上郷友会の最長老格でもあられた上山顯氏（九十二歳）が逝去された。

現役の官僚から退職されてかなりの年月が経過しているにもかかわらず、告別式には多くの方々が参列され、生前の上山さんの人徳を偲ばせられた。

一九二七（昭二）年に内務省に入られ、第二次大戦後の占領体制下の混乱期に、厚生省保険局長、労働省職業安定局長の要職を歴任され、医療、失業、労災の各社会保険の制定、運用に大きく貢献された。官庁を退職されたあと、健康保険組合連合会の常務理事をはじめ、政府

関係の審査会、調査会、審議会などで活躍されている。保険局長就任の当時、柏原中学（旧制）一年生だった私は、植木孝之助校長から朝礼の挨拶のなかで、柏中卒業生の栄誉として上山さんの局長就任が伝えられたことを想い出している。

一九五〇年四月、退官のあと、上山さんは健保連合会の常務理事に就任され、勤務先に近い港区新坂町に自宅を新築し居住されることになる。一九六七年の秋、健保連の委嘱で医療保障研究会が月例会として開かれたとき、若手研究者の一人として私も出席していた。その席上、当時は健保連の参与であった上山さんに初めてお逢いできた。また同じく柏原町出身の江間時彦さん（当時、厚生省の医療保険部長）も同席され、郷里柏原の想い出話が語られ大変嬉しく思った。

ありし日の上山氏（右）と筆者

健保連が発足して間もない時期に、その常務理事に就任された上山さんは、若手職員を厳しく指導されたようである。当時、健保連の社会保障研究室では『社会保障年鑑』（第一号、一九五〇年版）の編集が開始された。その頃から編集担当者だった藤澤益夫氏（慶應大学名誉教授）は現在も続いている同年鑑の編集会議（最近では一九九七年版）の席上、上山先輩の厳格な仕事ぶりを語られ、私はその話を人一倍楽しく拝聴している。

一九七五年古稀記念として上山さんは『回想と覚書』（社会保険新報社刊）を出版され、さらに十数年後に、米寿記念として、『様々な出会い』（ホンゴー出版、一九九二年四月）を出版された。その「出版と米寿をお祝いする会」が関東氷上郷友会の主催により九段会館で開かれた。本書から多くの御教示を得、感銘を受けた私は、その書評をまとめ、『山ざる』24号に掲載させて頂いた。本書は三部構成で、Ⅰ読書や生活をめぐる随想、Ⅱ趣味と自称されるが専門家並みに造詣の深い「美術鑑賞」に関するもの、Ⅲ現役時代とその後の労働・社会保障に関する回想と記録がまとめられている。私の書評はⅢに限定して感想を述べている。

労働保険審査会会長（一九五六―六五年）の任期中の体験に基づいて集大成された『労働保険裁決例解説』（有斐閣、一九六七年）は、労災補償保険の業務上・外認定を中心に代表的な裁決例八四件と体系的に配列した研究成果である。労災事故への姿勢や対応が立派で説得力があり、この研究分野での貴重な労作である。このようなご苦労の多い仕事や多くの人間との出会いを真剣に受け止められる意欲的な生き方が『様々な出会い』に集約されている。

一九九五年秋の氷上郷友会でお逢いしたとき、鎮子夫人ご逝去の直後であったからか、寂しそうに感じられた。書斎所蔵の文献資料を見せて頂く案内を受けていたが、資料整理が遅れて約束が延びのびになり、ご自宅をお訪ねできず残念であった。愛妻が遺された短歌の歌集『金木犀』（ホンゴー出版、一九九六年一二月）の編集、「あとがき」執筆に最後の力を捧げられたと推察されます。

郷里の大先輩、上山顯さんのご冥福を心からお祈り致します。

（専修大学法学部教授）

丹波を愛した細見綾子さん

宮野　近（柏原町）

細見綾子さんは、繊細で対象把握の的確な句風で、戦後を代表する女流俳人。また、ぬかみそをかき廻しながら、芸術論を語れる天恵の資質をそなえた天衣無縫の作風……等々、多くの人が論評しています。当然、綾子俳句研究も盛んで俳誌「風」紙上でもシリーズで紹介されています。その文学的価値論については、その道の専門家にお任せしたい。

細見綾子さんは、終生、故郷丹波を讃え続けた人であると思います。「丹波には、いまなお古き良き時代の日本の風習が残っていて、脈々と生きづいています」とおっしゃった言葉が忘れられません。

青垣町の高座神社の句碑除幕式の挨拶で「私は生涯丹波の原型を背負って生きてきた。つばめを見ても丹波のつばめとどこか違う。空を見ても丹波の空の色とちょっと違うというように」……これは故郷丹波に対する最高の讃辞といえましょう。そこで次に、その想いを綴られた「灌仏会」という短文をご紹介します。

灌仏会

細見綾子

四月四日、月に一度の国立の句会に行った。よく晴れて大通りの並木の桜がほころび初めていた。

その日の兼題は、仏生会・れんぎょう・汐干狩であったが、もう四日あとは仏生会のこととて、なかなかいい句があった。

私の仏生会（灌仏会）の記憶は、もっぱら故郷丹波のもの、灌仏会はどんなに待ち遠しかったか。

子供達はこの日をお釈迦さんの日と呼んでいた。瑞雲寺という先祖代々の寺に詣で、甘茶を受ける。子供達は山裾の近道を行くのが常で、山裾には三椏の花が盛りで、黄色く明るい三椏の花は灌仏会にはつきものであった。

この日寺詣りをするのは、老人と子供達が大部分でお釈迦さんに甘茶を遠慮なくぶっかける。また自分達の持参の空き瓶にも頂戴してくる。お釈迦さんの前の甘茶桶は大きな木桶、甘茶の匂ひは、独得なもので寺中に充ちていた。

その日は何度か寺の庭で、おひねり餅が撒かれる。親指ほどにちぎった餅、若いお坊さんが高い足場に上って掛声もろとも手でつかんで高くほうり上げるのだった。その餅はお釈迦さんの「鼻くそ」とも言う。すばしこい子供達はかいくぐってこの鼻くそ餅を両手に拾ったが、私はどうもよう拾わなかった。餅を拾った者も拾わなかった者も皆んな仲よく元の山裾道を戻ってくる。のどが乾いて手に提げて来た瓶の甘茶をのんだ。瓶はほとんどサイダー瓶、その頃はサイダー瓶も稀少価値だった。私の母がよく洗ってこの日のために用意しておく。子供達は空き瓶を貰った足で甘茶寺へ行った。

甘茶を飲む時仰いだ空の青さ、これは卯月空というものであろう。うっすらとはんなりと、形容する言葉が見つからない青さ、外のものには見出せない青さであった。

灌仏会山に紫つつじかな　　綾子

細見綾子さん　明治四十年青垣町生まれ。柏原高女、日本女子大卒。俳誌「風」を夫の沢木欣一氏と主宰。昭和二十一年より約六百号を発刊。戦後の俳壇に大きな足跡を残した。勲四等瑞宝賞を受賞。俳人協会顧問。平成九年九十歳で没。

ふるさと随想

大藤理香「叢」
（青垣2001年日本画展　入選作）

雨の日に晴の日に

大塚　冨久子（山南町）

今も昔も、水不足になると何処でも大騒ぎになりますが、そんな後に待望の雨が降ったというような日、必ず思い出す丹波の言葉があります。

雨（あま）よろこび――長い日照りが続いた後の恵みの雨の日、雨よろこびの「言い継ぎ」が回ってきます。そしてこの日は、誰憚ることのない公然の休息日となります。当時はそういうおふれでも出ない限り、雨の日でも農作業を休むということはなかったのでしょう。

雨よろこびの知らせが回った後の、あの村中にたちこめたほっとした安堵感と喜び――それは今でも私の中につながっていて、からからに乾いた庭の草木に降りそそぐ雨を眺める度に、一人「雨よろこび、あまよろこび」と、口の中で飴をころがすように何度も呟かずにはいられません。そして、「今日は雨よろこびですからお休み下さい」とお隣に告げにかけ込みたいような衝動にかられてしまうのです。

同時に、うす紫に煙った丹波の山なみや藁葺の農家が点在する村の景色、半世紀も昔の隣近所の人々の暮らしが甦って

きます。一日の休みを、女の人たちはささやかなご馳走を作り、男の人たちも安らぎのある柔らかな声に戻り感謝の声を交わしていたことなど――。

逆に、「絶対に雨が降りませんように！」と熱望した日が、彼岸の中日「お日さん参り」の日でした。

ハレの日のご馳走である巻き寿司をお弁当に、近所の子供たちとグループを組んで近くの山に登ります（三、四人から、時には十数人まで、勿論人数が多いほど楽しい）。普段から裏山は格好の遊び場ではありましたが、この日は特別、いつもは登らない高い所まで行きます。

頂上近くのハゲ山で、桧葉をお尻に敷いて滑り下りたり、陣取り合戦をしたり、丸一日大きいの小さいの入り混じって遊んだ、あのあふれるような楽しさと解放感といったら、それに匹敵するものは、その後の人生を丁寧に探してもなかなか見つからないくらいです。

お彼岸の子供たちの行事については、本誌26号誌上で丸川氏（鴨庄村のにってんさんのお供）や能勢氏（柏原町のお日天さん迎え）も書いておられ、地域による微妙な違いを面白く思いました。

子供のことですから、お日様を拝むなどという神妙なことはいたしませんが、日がかげってきたりでもすれば、男の子達は岩山を石や棒で叩きながら、「にってんさん、かってんさん、照っとくれ、てっとくれ！」と大声をはりあげて、騒いだものでした。

同じ日、山裾の観音様の小さなお堂では、お年寄り達が、やはりお弁当持ちで集まり、一日四方山話をしてくつろいでいたのを思い出します。

私は小学校入学の頃、大阪から和田村に疎開して十数年を過ごしたのですが、その後両親もまた大阪に引き揚げてしまいましたので、以後丹波を訪ねることは全くなくなってしまいました。それゆえにでしょうか、丹波は私の心の中で年を経るにつれ、美しくなっていきます。

あの独特のもの柔らかな言葉遣いをいつも懐かしく思い出します。

若い頃、たまたま目にした源氏物語の断章の中に、「夜さり」という言葉を見つけたときの驚きは今も忘れられません。山奥の田舎言葉を軽んじていた気持ちが逆転したのは、その頃からだったでしょう。

さて、雨よろこびやお日さん参り、それに数々の古語が生きていた丹波の言葉や風習は、今どれほど残っていることでしょうか。

八十歳のクラス会

近藤　勇（市島町）

私は大正十二年四月、市島町鴨庄小学校に入学しました。当時の同級生は男女合わせて四十六名でした。昭和六年に高等小学校を卒業しましたが、昭和の激動期に翻弄され、青春時代を謳歌することもなく、戦時下で過ごしました。

戦後昭和二十二年から、今日まで私たちのクラス会は毎年開催され、今年で五十回を迎えました。

開かれる場所も、ある年は城崎温泉で、また、国領温泉、そして昭和六十年一月には東京で開催し、十五名が参加したこともありました。が殆どは地元の料理屋で開かれました。出席者が年々減少していくのは何とも淋しい限りです。しかし、八十歳になってもそれなりに元気な姿で集うクラス会は、旧鴨庄村でも、私たちだけではないかと自慢したい気持です。

今年は七月四日に、小学校前の料理屋（ヤマク）で開催しました。出席予定者は十五名でしたが、数名が体調を崩したとかで当日は十名になりました。

それにしても皆が気が合うというか、まとまりのよいクラスです。こんなに続けられたのも地元居住者が多く、十数人が二人組になって輪番で幹事を務めてくれたお蔭です。私はいつもしつらえられた席に出向くだけで申し訳ないと思っています。

いのち長き時代とはいえ、八十歳を過ぎて心身共に健康に暮らすことは、一日一日が努力の積み重ねだと思います。願わくはこのクラス会が、来年も、さ来年もと続いてくれることを切望して止まないものであります。

柏原藩最後の藩主

織田信親公らのことども

藤本正也（柏原町在住）

五月の初めであったか、宮野近君（筆者の中学での教え児）から、『山ざる』誌に柏原藩最後の藩主織田信親（のぶちか）公のことを書いてくれんかと電話。

生徒に教師は偉そうに常に接しているが、卒業し年を経ても、親しく接してくれる者には否応無しにその頼みにも応ずる。その一人として近君の頼みをつい引き受けてしまった。締切も近づき、どうにもならず筆をとった。

柏原藩最終の藩主信親公は、嘉永二年（一八四九）、備中（現岡山県）成羽交代寄合山崎主税さん二男として生まれ、慶応元年（一八六五）、十六歳で柏原織田家に養子としてこられた。

そして、明治維新前後の激動期に若い藩主として藩政を指導された。その間、儒者小島省斉（青垣町佐治出身）を重用し、文武を奨励し、藩論をまとめ、難関を突破してこられたのであった。

時に慶応三年（一八六七）幕府が政権を奉還し、朝廷は諸侯を徴した時は江戸勤番中であったが密かに京に上り、十二月八日入朝され、「織田家は徳川幕府の恩顧を忘れるものではないが、義として天子に抗せられない」と藩士等に尊皇の意を明らかにし、宮廷を守せられたという。藩主としての威勢とは言え弱冠十八歳の時のことであった。

やがて翌明治元年（一八六八）、在阪中の徳川慶喜をそそのかして佐幕派藩兵が京都に迫った。これに対し、薩・長藩をはじめ京阪の諸兵が武力討幕派として、慶喜を朝敵として迎撃した。鳥羽伏見の戦いである。戦は慶喜方が負けて、大阪から江戸へ逃げ帰った。一月三日の一日決戦で終わったが、勿論、柏原藩兵も天皇方に加わった。この戦いに愚生の祖父も加わったのであるが、十五歳であった。戦いの様子もさることながら、よく話していたのは馴れぬ陣中食（パン食）による兵士の下痢の多発、尻を押さえて排便の順を待つ笑えぬ苦しさであったと。

一月十日、天皇は公卿郷西園寺公望を山陰道鎮撫総督に任じ、山陰諸藩の帰順を迫った。柏原藩もその隊列に加わることを命ぜられ、信親公は執事（家老）津田要を長とする藩兵七十人を西園寺につけられた。

京を発し、十二日篠山、十三日柏原と歩を進め、通過する各藩の帰順の誓いを取りつけて進んだ。柏原では西楽寺を本陣とし、薩長の兵は多数、柏原藩兵も自家を目の前にしなが

ら、指定された町家に泊まったという。先述の祖父の兄二人もこの隊員に加わっていた。

去る五月頃のある日、午睡中に拙宅前の歴史資料館より電話、「一寸来て欲しい」と言う。仕方なく行くと、客あり「西園寺さんの山陰鎮撫の道程とその宿泊施設を探訪しているのだ」と言う久美浜（丹後半島北端の町）の佐治氏であった。どうやら旧藩士末の様子。今時ながら懐かしいものを感じての探訪と受け取った。西園寺は福知山から丹後半島を廻り（佐治氏の）久美浜にも寄って、豊岡、鳥取を経て、山陽に渡り行程全域を鎮撫して三月大阪に至った。

横道になるが、西園寺公望については、その秘書官であった松本剛吉氏が柏原の出生、しかも拙宅の近隣で、若年愚生の祖父を頼って東京に。祖父は官をやめ洋傘店を経営していたが、そこに逗留。祖父の留守中に傘を安価に売って叱責され、飛び出して、一軒おいて隣の寿司屋に転身したという。笑話であるが、その後、警察官となり、西園寺秘書となり、後に貴族院議員（勅選議員）となった人である。祖父帰郷後も常に文通していたが、祖父は拙筆を自任、年端もいかぬ小学生の愚生に代筆させていた。小学六年のときであったか、柏原に帰来され拙宅に立ち寄られ、「度々手紙をくれるのはこのボンか」と頭を撫でてもらったことを思い出す。その時、祖父は「貴方の揮毫が欲しい」と要請し、本人も承諾されたのだったが、一向に書いてよこされないので、祖父が催促の手紙（勿論小生の代筆）を送ったところ、「西園寺さんに頼んでいるが多忙で（当時首相だったか）まだ書いてもらえない」との返事が来た。祖父は「君のものが欲しいんだ」と言ってやったら早速に書いてよこされた。『知足者富』との横軸である。今も大切に保存している。惜しくも六十八歳で急逝されたと丹波人物志にあるが、当時祖父は七十五歳、早世を嘆いたことであった（子孫小田原在住）。

信親公の話が、とんだ横道にそれたが、一族は維新後、東京に移られ宮内庁に務められていた。ご子孫は信大、信和様と続き、当主は信孝氏で曾孫に当たられる。

信親公の先代信民公までの廟所は柏原にあり、町指定文化財としてお祀りしている。その他、織田信長をはじめ、信休公（柏原初代）以来十代の藩主を祀る建勲（けんくん）神社もあり、それらの保存管理は気を使うところである。

ふる里へむかう想い

田中一美（山南町）

サラリーマンの夫の転勤で関西から相模原に移り住んで二十六年、まさかこんなに永く関東に住むことになろうとは京都を発つ時は思ってもみませんでした。広島に二年、京都に二年と短いサイクルでの転勤の後でしたから、何年かすればまた移動するものと深くも考えずに引っ越してきたのでした。それが、小さいながら家まで建てて住み着いてしまったのです。

二人の子供たちにとって相模原はかけがえのないふる里になりましたし、私自身にとりましても相模原の暮らしが思いがけない展開をもたらしてくれました。誰ひとり知る人のいない土地での暮らしは、最初、心細くもあり不自由でもありましたが、反面、人の思惑を気にしないでやりたいことができる解放感は得難いものでした。

当時、相模原は辺境の地のようにいわれていましたが、その気になれば利用できる施設や催しに事欠くことはありませんでした。町田から新宿へは小田急で四十五分、横浜へはJRで三十分、自転車を走らせて行ける距離にデパートがあるという暮らしに、田舎育ちの私は夢中になっておりました。幼い子供を連れてでも、許される限り出かけていってはいろんな体験をいたしました。客観的にはどうということもないそうした体験の数々が、今の私には何よりの宝ものという気がいたします。恥ずかしいことも辛かったことも含めて……。

そんなわけで、長い年月、過去を振り返ることなく新しい展開ばかりに心奪われて過ごしてまいりました。そんな私のもとへいつ頃からか、『山ざる』誌が届くようになり、長く蓋をしてきた箱をそっと覗いてみる思いがしたものです。相変わらず雑事に追われる日々でしたが、その頃から相前後して、ふる里と関係のある出会いがいくつかありました。町田の高原書店（古書店）に勤めるようになって、上田三四二の作品を知ったのもその頃でした。『花衣』という短編集を読んで惹かれるものがあり、次々と作品を集めるうち三四二が歌人でもあり、評論家でもあり、柏原高校の大先輩であることがわかったのです。

また高原書店の古典の棚に由良琢郎先生の『うたの逢瀬——伊勢物語全歌詳説』を発見したときも、感激してすぐ買ってしまいました。由良先生が主宰なさっている短歌誌『礫』を送っていただくようになったのもその頃だったと思います。『礫』には在学中英語を教えていただいた荒木先生をはじめ、幾人かの懐かしいお名前がありました。

高校卒業三十周年の同窓会は欠席してしまいましたが、百周年の記念行事などを通して、私の思いがひと頃と比べものにならないくらいふる里に向かっていることは驚きます。

今年は五月の連休の頃、久々に谷川へもゆっくりと帰省することができました。

ふる里の堤防ゆきて土筆摘む
四方が山に抱かれしまち
いたどりを探して野山巡りたる
少女のころや草笛が鳴る

ふる里の家並みも田圃の風景もずいぶんと変わったようで、大きくは変わってはいないのですが、昔とは違う何とも不思議な気持ちがいたしました。空気が澄んでいて、景色が鮮明で、現実離れしたほど美しいせいもありますが、三十年余りの時間の経過が、私自身の変化が、ふる里の地に足がつかない不思議な感覚を与えたものと思います。若い頃、田舎の狭い世界が疎ましく、外へ飛び出すことばかり考えておりましたが、今は、自然によって癒されているふる里の暮らしの良さもよくわかります。

去年の年明け早々、舞鶴で一人暮らしをしていた姑が交通事故にあいました。しばらく相模原と舞鶴の病院を往ったり来たりして看病をしておりましたが、退院後、一人暮らしは難しくなって、去年の秋、相模原へ迎えました。八年間ほど勤めた古書店を辞めて、両下肢が不自由になった姑との暮らしをはじめています。がむしゃらに手を拡げてきたこれまでの暮らしを振り返ってみるいい機会かもしれません。丁度そんな折、『山ざる』の原稿の依頼を受け、とりとめのないことを書かせていただきました。

生郷村と父母の想い出

大塚秀弍（氷上町）

生郷村といって分かるのは四十代も半ば過ぎた方々でしょう。昭和三十年（一九五五）に町村合併によって、今の氷上町になりました。父・大塚秀次は、開業医で生郷村の最後の村長であり、氷上町誕生を推し進めた中心人物の一人でした。町村合併には二つの選択がありました。一つは柏原と一緒になる案、もう一つが今の氷上町でした。私は当時十五歳でしたが、父が、石生駅をもつ生郷村を生かすために後者を選ぶと主張していたことを鮮明に記憶しています。その選択が正しかったかどうかは、遠くに住む私には分かりません。ただ、数年に一度墓参に訪れる私は、私が生まれ十五年間育った市辺周辺が私の記憶にあるのどかな風景を一変させていることに一抹の寂しさを感じます。父は、その年、九月二十日に亡くなりました。母が亡くなってちょうど三か月後でした。

私は、柏原高校一年生で、野球部に属しレギュラーの二塁手でした。父の危篤を知らされたのは、秋の県大会（新人戦）で三田学園のグランドでの試合中でした。試合が終わりすっかり暗くなった石生駅に着いたとき、父の死を知らされました。本当は試合中にすでに死亡していたのですが、監督の大内先生が私の動揺を心配し、隠してくれていたことを後で知りました。私は、父がいつ亡くなってもおかしくない状態であることを知っていたのですが。

父は、私が小学校四年の時、喉頭癌の手術をし、音声が発声できなくなり、筆談で会話をする状態でした。そんな身体で村長選挙に出たため、当時、筆談の村長として話題にした新聞もあったように記憶しています。それから、五年後に再発し、手術もせず痛みに苦しみながら亡くなりました。その間、近所の方々には大変お世話になりました。

両親と三人で暮していた私は、両親の死で、その年の暮まで隣家にお世話になり、二学期が終ったところで、大阪府立豊中高校に転校し、義兄の家で高校卒業まで過ごしました。卒業後、東京に出て、早稲田大学に進みました。その間に、私の生れ、育った家も土地も義兄が処分してしまい、私が戻るべき故郷は完全になくなってしまいました。大学卒業後、二年半、東京でサラリーマンをしていましたが、二十五歳の時、埼玉の中学校の教員になりました。そこで、結婚し、妻の実家のある、群馬県館林市に住むようになりました。間もなく、それから三十年近くになります。

現在は、埼玉県加須市（東武伊勢崎線）の昭和中学校の校長として、約千名の生徒達を相手に平和に暮しています。今、

私が関西出身であることに気づく人はほとんどいませんが、熱烈な阪神タイガースファンであることに、その理由を問われるぐらいです。言葉が不自由な父に連れられ、何度か行った甲子園球場で見た、藤村、別当等、今でも昨日のように覚えています。

夏、佐治川の小魚の煮物、食べ放題だった秋の松茸、冬のボタン鍋や山鳥などの野鳥鍋のうまさ、これらは、妻や娘にいくら話しても本気にしてくれないのですが、私にとっては、生涯誇れる故郷の想い出です。

教員生活もあと三年で終りです。なんとかそれまで、健康に過し、退職後には、妻とふたりで、時間をかけて、十五年間私を育んでくれた、故郷を歩きたいと思っています。

九州と丹波のふるさと

坂口充子（氷上町）

五月連休に家族で主人の田舎（九州）に、その帰りに私だけ丹波に行って来ました。

柏原駅の駅舎はもとよりバスターミナルや売店などとても立派になり、駅前の広い道路の街路樹として植えられていたハナミズキがきれいに花を咲かせており、どこか知らないところに来たような気になりました。

丹波を出てから三十五年近く関西から関東に来て、かれこれ二十年になります。

昔、柏原高校への三年間の自転車通学をした道路（確か、十六ちょうといっていたと思います）は、当時はとても大きな道路に思え、事実氷上町から柏原までのメイン道路だったと思うのですが、すっかり様相が変わり郷土の発展として喜ぶべきことでしょうが、当時の面影が丹波に行くたびになくなっていくのがさみしくもあります。

そんな感傷的な気持の時に『山ざる』編集の方より寄稿の依頼を受け〝どうしてこの私が？？？〟……とびっくりしてすぐ辞退させていただこうと思いました。しかし、この五月連休の帰省（九州、丹波）ではいろいろ複雑な思いもありましたので、これもなにかのご縁かとつたない文章ではありますが、思いきってペンを取らせていただきました。

主人の転勤などで転居の数は七、八回、現在の住まいも社宅です。息子達には転校、転校でかわいそうな思いをさせましたが、その一方で未知の土地での新しい生活に対する期待、そして旅行気分もありました。いま住んでいる所も海あり山あり箱根も近く、気候も温暖な土地柄で毎日が観光気分のような生活です。

さて、五十路に入り、今まで他人ごとだと思っていた夫の定年まで一桁となり、定年後についてテレビ新聞等での報道に目が向くようになってまいりました。そしてその生活の場（定年後の住まい）についても……。今まで生活にそして仕事に追われ考える余裕すらなかったのですが、来年には下の息子も社会人になり家のローンや教育費のやりくりから解放され、主人と二人の今後の生活についてあれこれと思いを巡らせるようになりました。ところが最近、主人は定年後は九州に戻りたいと言いはじめ戸惑っているところです。

この五月の連休に主人の実家に帰省している間、主人は朝早く起きて、伸び放題になっていた庭や畑の草を一人でせっせと取ったり、庭木の枝葉を刈り込み、片づけたり燃やしたりなどの仕事をとても生き生きとやっていました（もともと家庭菜園や庭いじりが好き）。しかし社宅住まいのふだんは必要最小限の庭の草取り（しかも除草剤を使ったりして）しかしないのですが……。

その光景を見ていて、就職で郷里を離れ結婚して家族のために一生懸命働いてきて、やっと我が身を振り返る余裕ができ、田舎を恋しく思う、その気持ちは痛いほどわかるだけに主人と一緒に九州に戻るべきなのだろうかと思わずにいられませんでした。息子達もそれぞれの人生を歩み始め、親としての務めも終わろうとしているので、今度は私たち二人で郷里でのんびり過ごすのもいいかも……。そして息子達は転居の繰り返しでふるさとを持たずにきてしまいましたので、おそまきながら息子達にとってのふるさとづくりになっていくのもいいかなとも……。

九州と丹波では〝言葉、習慣〟に違いもあり、地図の上でも大きく異なりますが、主人の田舎は周囲を山で囲まれた盆地で、冬も丹波程度に時々雪も降り、どこか気候風土が似通ったところもあり、風景を見ていると丹波と錯覚を起こしそうなときがあり、それがせめてもの救いでもあります。

生まれ育った丹波、自宅があり、息子達の住む関東、そして九州と三つのふるさとを持つことになるかもしれませんが、心のふるさとはやはり〝丹波〟でしょう。

はっきりした答えはすぐには出ませんが、心の準備を含めてじっくり考えてみたいと思っている今日この頃です。

私と丹波、ふみよ会のことなど

大垣忠男（山南町）

Ⅰ　私と丹波

私が丹波を知ったのは、大東亜戦争末期の昭和十九年四月、中学二年生の時です。父が氷上郡和田村草部（現・山南町和田）の出身でしたので、そんな関係から当時、皆がよく言っていた「疎開組」の一員でした。翌二十年八月には終戦となりましたが、生まれ育った東京は空襲で焼け野原となり、終戦直後は食糧難、交通事情、その他いろんな条件や制約が重なって、すぐには東京へ帰れませんでした。結局、東京に戻ってきたのは、昭和二十二年三月、中学四年を修了した時点でした。

当時、父の故郷である和田村草部には、父の両親はすでに他界しており、父の二人の姉の一人はすでに他界、もう一人は遠く広島県呉市に嫁いでいて、頼れる親戚は誰もいないようでした。従って知人を頼って久下村の「踊り場」（土地の人がそんな風に呼んでいた地名）に、小さな納屋の一部屋を借りて私の母と幼い弟二人と妹一人の四人が暫くそこで暮らしました。

私は食糧難と住居事情により柏原中学校の寄宿舎にお世話になりました。五、六か月後、踊り場から一キロメートル程奥に入った「吹き矢」という所に、お婆さんが一人で住んで居る一軒屋の二間が借りられ、私も寄宿舎から帰り、久し振りに親子五人が一緒に暮らせるようになりました。が生活は、戦局と共に日に日に厳しくなり特に食糧難には苦しみました。発育盛りの幼い子供を抱えた母は、よそ者だっただけに、その苦労は大変だっただろうと思います。

戦時中は、我々中学の低学年生は出征兵士の農家への農作業に（田植え・草取り・稲刈り・脱穀・株切りなど）・薪炭増産の山行き（炭焼き・帰りには約四粁の道のりを炭一表背負って学校まで帰る）などに、三年生になってからは兵器造りの工場動員（柏原中学校に東洋ベアリングが疎開・航空機用のベアリングの生産のために旋盤・研磨・夜勤など）に、今では経験しようと思っても、到底不可能な貴重な体験をさせて貰いました。

終戦直後は、空腹を抱え、白米のご飯が食べたさに、専ら農家のお手伝いに、小学生の弟たちを引き連れてよく行ったものです。そんな苦しい時に親切にして下さった方々のご恩は、今もって忘れることは出来ません。特に近所の田中祥雅君（柏原中学校で一年下）のご家族の皆さんには、私の家族ぐるみ大変にご厄介になりました。そんなわけで祥雅君の結

婚式には、遠く九州の博多（当時は新幹線は無論のこと、特急や寝台列車もない時代でした）から、また御子息の結婚式には東京から丹波までお祝いに馳せ参じたものです。また、先方からも私の結婚式や、息子の結婚式には東京までわざわざお祝いに来て下さいました。こんな関係で今でも親戚以上のお付き合いをしています。

丹波には、この五十年の間に四・五回程帰りました。勿論、祥雅君の家にです。そんな時にも、私の親しい同級生、荒木逸郎（当時・柏原高校英語の先生）、田中庸介（山南町谷川で外科医院開業）、宮崎輝夫（当時・多可郡黒田庄町町長）の諸氏を招いて旧交を暖めるようにと色々とお気遣いを頂いたものです。丹波での三年間は、私の六十八年の人生から見れば、時間的にはほんの僅かな点としての存在かもしれませんが、疎開者の少年にとっては、人情の機微にも触れ波瀾万丈に生きた人生として忘れることはできません。

左から荒木逸郎君、私、田中庸介君、宮崎輝夫君

Ⅱ　私と『ふみよ会』（註：ふみよ会　柏原中学校：昭和二十三年卒・柏原高校：昭和二十四年卒のクラス会）

東京に帰ってからは、残り一年の旧制中学を卒業→旧制専門学校→就職→福岡→大阪→東京→名古屋→東京と転勤・最後に東京に戻って来たのは確か昭和五十三年だったと思います。社会人になってからは、東京や転勤先でも、柏原中学校の同級生とは殆ど再会することもありませんでした。谷川から一緒に通学した同じ疎開組の桑畑芳郎（芦屋市在住）、斉藤泰一（当時・岩手医大教授→川崎医大教授・現在倉敷市在住）両君に一、二度お会いしただけだったかと思います。私は柏原中学校を卒業しないで東京に帰っただけに、柏原の同級生とはもう縁がないものと殆ど諦めていました。

そんなある日、昭和六十一・二年頃だったと思います、西脇市の武田正美君から（どこで住所を調べたのかな？）、所用で上京するので、在京の同級生にも声をかけてあるので、という便りを受け取り新宿のセンチュリーホテルで何人かの方々と再会しました。

四十年振りでしたが、どこかに中学生の頃の面影があるもので名前を聞くとすぐに思い出しました。それが機縁で「ふみよ会」の存在を知ったわけです。私にとって柏原中学校での生活は戦中・戦後の波乱と苦難の三年間であっただけに、その思い出と懐かしさは一入でありました。

そんなわけで、早速『ふみよ会』の集まりや、旅行にも参加させて頂きました。特に箱根の日帰りのハイキングは、私にとって初めての親睦旅行であっただけに、その楽しかった思い出は今でも忘れることはありません。当時の幹事の方々がその時の感想を次のように述べていますので一寸紹介させて頂きます。

◎『ふみよ会』日帰り旅行を開催！（昭和六十二年）

去る五月十六日（土）に『ふみよ会』の行事として、新緑の箱根に日帰り旅行を実施。五月晴れの好天に恵まれ小田急湯本駅に集合したあと、旧鎌倉道の急坂を湯坂山から浅間山に向かって、昔の学生に返って健脚を競うハイキングとなりました。

丹波の山とチョット違う山道にあえぎながら新鮮な空気と鶯の声に励まされて、この企画がなければ一生ここには来ることはないだろうなどと汗を拭きつつ、山頂から素晴らしい箱根の山や小田原の海の眺望を満喫しました。下り坂に足下を確かめ千条の滝を経て小涌谷温泉に着き、三時間の散策を終えヤット昼食になりました。割烹旅館『千条』にてひと風呂浴びて疲れを癒し、喉をうるほし美味しい料理をつつきながら会員皆さんの近況や次の企画など、丹波弁も交えて賑やかに語り合いました。時の経つのも忘れて久し振りに健康的な楽しい一日を味わうことができ、次の再会を約して肩を叩きながら夕闇の箱根路を後にしました。

私は、これを機会に『ふみよ会』の行事には殆ど毎回楽しみに参加させて頂いています。因に、ふみよ会では、幹事の方々の記憶や記録によると、昭和六十二年頃より毎年一回、次の通り一泊旅行を実施して参りました。

一、仙石原「万岳楼」に泊まり、箱根大涌谷他を散策（昭和六十二年十月）
二、青梅「水香苑」に泊まり、奥多摩湖他を散策
三、藤沢「日本鋼管寮」に泊まり、鎌倉の古寺他を散策
四、大月「真木旅館」に泊まり、猿橋他を散策（平成元年十月）
五、桧原村「民宿」に泊まり、秋川渓谷他を散策（平成三年十一月）
六、伊香保温泉「観山荘」に泊まり、榛名湖・榛名山神社他を散策
七、石和温泉「簡保の宿」に泊まり、昇仙峡・武田神社他を散策（平成五年秋）

八、寄居「簡保の宿」に泊まり、秩父三峰神社他を散策（平成六年十一月）
九、強羅「三和銀行寮」に泊まり、箱根大涌谷・天山の湯他を散策（平成七年十一月）
十、青梅「簡保の宿」に泊まり、御岳山他を散策（平成八年）

これからも恒例となった行事に皆が健康で参加出来るのを楽しみにしています。

Ⅲ　私と氷上郷友会

私が在京の柏原中学校の友人と、お付き合いを始めたのが、そんなわけで、まだ十二、三年しか経っていません。勿論それまでは氷上郷友会の存在すら知りませんでした。私はその後何回か、ふみよ会の方々と一緒に郷友会に参加させて頂きましたが、そんな時に会場で、私の名札を見ながら、和田の方ですか、とか草部の方ですかと、何人かの人に訪ねられたことがありました。やはり同じ村の人は、何処で会っても懐かしく、親近感が湧くものと思います。

和田村草部は、前に触れたように私の父の出身地です。父は小学校を卒業すると間もなく故郷を後に、西脇・姫路を経て昭和二年か三年頃に上京したようです。父は昭和五十五年七十五歳で既に亡くなりましたが、最後まで氷上郷友会の存在を知らず仕舞いでした。父はよく昔を偲んで田舎の話を聞かせてくれましたが、ついぞ故郷の人に会ったという話を聞いたことがありませんでした。東京に郷里の友人や知人がいなかっただけに、もっと早くに関東氷上郷友会の存在を知っていたならば、父はどんなにか喜んだことであろうかと思うと残念でなりません。

私も、西脇の武田君からのメッセージが、もし寄せられていなかったら、或いは父と同じように柏原中学校の同級生や同郷の方々との出会いを持てなかったかも知れません。一寸したきっかけが、思いも掛けぬ方向に発展し、これからの残り少ない人生に楽しみを齎（もたら）せてくれましたことに感謝しています。

母の実家への旅

大江　範子（青垣町）

平成六年五月二十六日の午後一時すぎ、夫と私は柏原駅に降り立ちました。尼崎あたりからポツポツと降り出した雨は柏原に着いた時はドシャブリとなっておりました。雨の中の柏原駅前の様子は十年ぶりの私にとっては間違って降りたかな？　と思う程でした。

実はその時の旅は夫の退職後とか、冠婚葬祭、同窓会など目的のある旅ではありませんでした。平成二年十一月に心筋梗塞、明けて一月に心不全、五年に狭心症となって療養の中、「もう何処へも行かれない」と諦めかけておりました。しかし、養生しているうちに、（都内なら一人でゆっくり外出できます）体調の良さを感じ、主治医の「無理のない日程で、ご主人と同伴なら」と許可を得、旅立つことにしました。

目的がないと申しましたが、一つだけ「岡山県の金光まで参拝すること」、後は体調にまかせてということで、ならば帰りに祖父母の墓参ということになりましたが、母の実家に着いて翌日帰るまで、どこにも行かず墓参するパワーもなく家のご仏壇を拝礼し佐治をあとにしました。短い時間でしたが、懐かしい氷上の空気、風景を目に残して無事帰京しました。

私は、東京は品川生まれの蒲田育ち、蒲田小学校四年の時、疎開し、氷上郡での生活は五年余りでしたが、この疎開中の五年間はさまざまなことがありましたが、一番心に残る楽しい時期で今も思い出しては懐かしんでおります。入院中、友人のお見舞状の中に「佐治のきれいな空気を沢山吸い込んで育った身体。必ずよくなりますよ」と励まして下さった方がありました。有り難いことです。

今、住んでおります品川の自宅から歩いて（私のゆっくりとした足で）十二、三分の所に（旧東海道品川宿）私の生まれた所があり、今はビルになっておりますが、家並みは余り変わっておらず、懐かしく時折買い物などでまいります。生まれた所がふるさとというなら、私は出身地のふるさとにいると言えましょうか。私には沢山のふるさとともいえる町や思い出があり、いただいた生命を大切に生きていきたいと思っております。

丹波の変貌と雑感

荻野和則（市島町）

私が関西からこちらにはじめて引っ越してきたのは七年前である。なんどか東京方面には来ていたものの、まさか住むようになるとは夢にも思っていなかった。もっとも私の住まいは埼玉県飯能市のニュータウンにあり、東京の都会に来たという感じはいまだにない。妻も同じく市島町の出身であるので、家の中ではそれほど意識せずに言葉を使い、結果的に関西弁あるいは丹波弁になっているが、外に出ると標準語と使い分けている。したがって、外では気持ちをストレートに出すと関西弁になるので標準語に翻訳していることになる。

対人関係では、親しい人ほど、関西弁が出るようになってきている。

最近亡くなった司馬遼太郎曰く、方言はリアリティーがあり、標準語にはないというのはこのことであろうか。私の長男は、幼稚園に通う前までは親の言葉を使っていたが、集団生活になってから言葉が変わった。こちらに来て意外だったのは、比較的よく関西弁あるいはそのイントネーションを耳にすることである。かなりの数の人間が関西方面から来ていることになろう。もしも関西村あるいは東北村などができ、そこでは関西弁のみを公用語とすれば、私の子供も関西弁になり、ひいては関西文化がそのまま関東にも移植されるのではと夢ではあるが思う。今のままでは、どうしてもこちらに吸収されてしまい、残念ではあるが、やむをえないであろう。

さてここまでは、丹波のことはあまり触れてこなかった。最近、近所のスーパーの前で幟が立っていた。そこには「丹波産小豆、丹波産黒豆」とある。こんな近くで「丹波」が誇らしげにあるのを見て大変感激をした。テレビにも紹介されたある日本料理店の店主によれば、築地では丹波産の小豆や黒豆は評価が高いそうである。

私は比較的丹波には用事その他でよく帰っているほうである。最近の出来事では、氷上郡では二つめの大規模なショッピングセンター「夢タウン」ができたことであろう。氷上郡は典型的な車社会であるが、町の中心ではない郊外の田んぼの中に、駐車スペースを大きくとったもので、店の中にいると都会と変わらず、田舎にもこんなに人がいたのかと関心する次第であった。一つの商店の規模は年々拡大の傾向にある。昔は集落の中に一軒だけの小さな店で日常の買い物を済ませていたのが、道路事情が改善され、移動手段が徒歩から、車

に移行するとともに、小学校付近、町の中心部、隣町と、徐々に距離的には遠くの大きな店で買い物をするようになってきた。ただこの店の拡大化も氷上郡の商圏を考えると、この二つめの出店でいきつくところまできたのではと思われる。この過程で、小さな店はどんどん潰れて、私が小さい頃利用していたところもかなりなくなり、商店の集積化が進んでいる。興味深いことには、この二つのショッピングセンターはごく近くにあり、しかも成松、柏原、黒井からそう遠くない距離にある。つまり氷上郡の臍(へそ)にある。地名でいえば、柏原町の母坪、氷上町の稲継付近である。「立地論」というもののなかに、家が直線的にA地点からB地点まで分布するとき、二つの店はAB間の客を奪い合うことで、結局離れては存在せず、AB間の真ん中の同じ場所に立地するというものがあるが、まさしくそのとおりであり、この付近はますますその臍の模様を呈している。

表1は町別の人口の推移で、一九三四（昭和九）年の人口の統計データを偶然見つけ、最近と比較したものである。また表2は一九九四年の三つの産業に関する数値である。字数の関係で詳しくは触れないので、数字から読み取っていただければと思う。

さて最後に、市島町美和地区の写真を添えておく。季節は春、天気は小雨である。丹波と山とは切っても切り離せなく、特に山水画的風景は情緒があると思う。田舎も少しずつ近代化されているものの、丹波の景色の基本は、やはり田んぼ・山・集落であり、これは今後も変化しないであろう。

表1　町別の人口推移

	青垣町	市島町	柏原町	春日町	山南町	氷上町	計
1934	10,200	10,590	6,780	13,940	13,060	15,830	70,400
1980	8,253	10,059	8,260	13,154	14,265	18,991	72,982
1995	7,958	10,270	9,793	12,964	13,984	19,023	73,992

（出所:国勢調査報告、1934は旧町村を合計したもの）

表2　産業別構成

	青垣町	市島町	柏原町	春日町	山南町	氷上町	平均
農業粗生産額	15	22	11	20	11	17	16
製造品出荷額	92	204	440	284	268	281	269
卸・小売販売	52	68	315	130	96	165	140

（出所:県勢97より作成、すべて1人当たり、万円）

厄除さん

中野　真理子（旧姓宮野・柏原町）

柏原駅のホームに列車が入ると、先ず目についたのが、両側につるされた沢山の献燈であった。いきなり提燈の賑やかな歓迎を受け面食らった。

夜ともなると、麓から八幡山の頂上まで、御神燈に灯が燈り、九十九折りの参道を照らしていた。下からの眺めも美しかった。

大鳥居は、屋根と横木が新築され、威厳のある優美な姿であった。材料は、八幡山の境内にあった推定一千年と思われる御神木が選ばれたと聞く。

真夜中には、「青山祭壇の儀」が、古式ゆかしく厳かに行われた。神官の祈祷の他は、何一つ物音が聞こえず、人々は敬虔な気分になっているようだった。

折しも、厄除さんにつき物の小雪も舞っていた。

「三重の塔」も、べにがらを沢山使用して、新装されたと聞く。渋い紅色が雪景色の中で映えて、優美な姿だった。

その前にある「厄除け開運の鐘」も、老若男女によって撞かれていた。

秘儀が終わって御神酒ををいただく人、神矢、御札をいだく人、焚火で暖をとる人が見られた。

商店街や露店の賑わい、福引きや文化的なイベント等がにぎにぎしく例年通り行われていた。

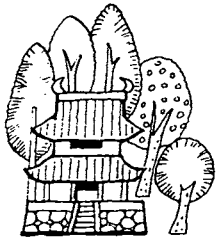
大欅世紀刻むや厄除祭

灯を消して神事ありけり厄除祭

厄除や夜半の神事に侍りぬて

厄除やしじまに流る神の笛

厄除祭福呼ぶ鐘の鳴り止まず



故郷へ「行く」と「帰る」

河野征美（市島町）

二十八年前の昭和四十四年四月四日、大阪に本社がある会社に入社して一ヶ月余りの研修の後、「横浜市鶴見区を担当してもらうので、東京へ行け」という辞令を受けた。その時は、本社も大阪にあり、私自身も兵庫県出身なので、すぐに関西に帰れるから「しばらく東京暮らしも良いか」という軽い気持ちで故郷をあとにした。それから、かれこれ三十年近く横浜で暮らす羽目となった。今では「住めば都」という言葉が解りかけてきた今日この頃である。

故郷を離れてみて、私が一番気掛りに思っていたことは四人も息子がいながら、父が郷里を離れることを嫌い、市島町の丹寿荘にお世話になっていたことだ。

私は末っ子であるため、他の兄弟より人一倍可愛がられて来ただけに、必要もなく「父親の見舞いだ」「何周年の同窓会だ」「法事だ」と言っては丹波によく帰ったものだが、家内や子供たちは「どうしてそんなに丹波ばかりに行くの」と言って不思議がるばかりで、小学・中学・高校時代を懐かしく想い出す私の気持ちなど今まで理解したことなどはない。私が「帰る」のと、家内・子供達が「行く」のとでは意味が違うのだということを最近では痛感させられている。

子供たちが成長していくに従って「おじいちゃんが小遣いをくれる」とか「空気がおいしいよ」とか言う「言葉の餌」も通じなくなり、家族で帰るより一人で帰ることが多くなった。

最近になって会社も五十歳を過ぎた社員に対しては出来るだけ出身地に帰すという気配りをするようになってきた。しかし今年の二月に明治四十三年生まれの父が他界してからは、この故郷を思う気持ちに変化が生じ、一層懐かしさが先立つようになってきた。東京で十年目を迎えた頃は人事異動のたびに「今度は関西かな」と期待していたが、関西から東京にくる人は多いが、東京に居る人は東北・北海道への移動が多く、むしろ寒さに弱い私は北の方への移動がなくてよかったと思うようになってきた。

今は私自身の部門の変化に伴い、しばしば大阪に出張するようになり、最近はその足で福知山線の丹波竹田駅に向かうことが自然と多くなってきた。

無人駅を降り、十分程歩いて、誰もいない育った家に寄る。柱に触り、兄弟喧嘩して、食事した居間に入るとあの頃を思い出し、懐かしさが込み上げ、感無量になる。しかし長年住んでいないために「蜘蛛の巣」と「特有の匂い」

には閉口した。

受話器を取り、竹馬の友に連絡をとろうとして名前を頭に浮かべたが、「それぞれ仕事をしているだろうな」と思い躊躇してしまう。然らば女性と考えたが名前が浮かばない。そうだ、今は考えられないが当時は男性と女性が列車で別々に通学させられた時代だったこと等までが思い出される。今でも古い家にはテレビも有り、暇をつぶすのに事を欠かないが、座っているといろいろなことが走馬灯のように思い出される。福知山線の谷川・柏原・石生・黒井・市島・丹波竹田駅と列車が止まるたびに、知っている人が乗り降りしないかとプラットホームに目をやりつつ、やはり、知っている人がいないので「年月の流れ」を感じる今日この頃である。

ほとほと困るのは我が由緒ある故郷の所在地を関東の人々に説明する時である。出身地の「兵庫県氷上郡（市島町）」とは「神戸の近くですか」「いやその北のほうです」「三田ですか」「いやもうちょっと北です」と言えば、ほとんどが「あ－丹波篠山ですね」と堰を切ったように言う。自棄になってもっと「上」と言うと豊岡まで一遍に行ってしまう。この頃は「福知山市の隣で兵庫県側の町です」と言えば、一回で理解してもらえる知恵を身につけたが、氷上郡という名は未だに、この東の都では全国区とは言えないらしい。

こうしてペンを取り、生まれ育った頃のことを思い出し書いていると、いつかはまた氷上郡の故郷に帰りたいと思うが、こうして東京・横浜に根を下ろしてしまうと、なかなか自分の思いどおりにはいかないものである。

「水分かれ橋」運河計画!?

桑谷　暁円（春日町）

社会人となって以来、全国各地に足を運んでみると、郷土丹波の地理的特色が浮き彫りになる。わが郷土兵庫県は北に日本海、南に瀬戸内海の二つの水際線をもつという類い稀なる地理的条件を有するのである。

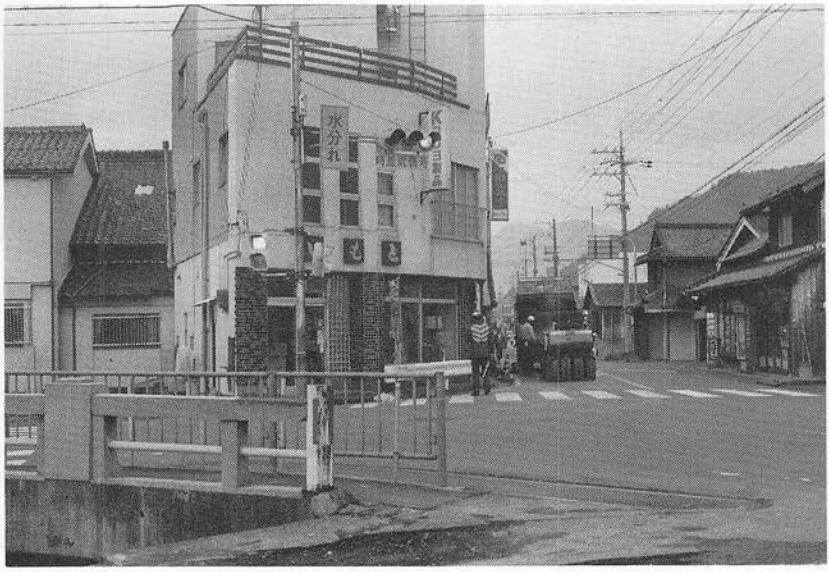
個々の県土は、前は海、後ろは山という謳い文句のとおり片流れ屋根型地形であって、これに比し、わが兵庫県の如く一県で寄せ棟（又は切り妻）型は非常に稀であって、この結果、県央部の降水は嫌が応でも最終目的地を決めねばならず、秀峰ならそれは紛れもなく分水嶺と呼ばれ、人々の感慨（山の彼方の空遠く）を誘うことであろう。

残念ながら郷土氷上郡に秀峰はなく、海抜たかだか百メートル位の丹波高地と呼ばれる平坦地に、これまた穏やかな小山が連なって小さい分水嶺が散在。少量の雨はこれらの間隙

を縫って緩やかに流れ、最後には加古川、由良川（京都府）の大河となり海に注ぐことになる。

ここまで述べれば、大方の郷友から「水分かれ橋」を忘れるな！　とお声がかかりそうである。勿論、忘れる訳にはいかない。地名でこのような使い方は希有であると思われる。JR西日本福知山線石生駅下りホームに白ペンキをごてごて塗りたくった上に、黒字で「日本一低い分水界」と名所「水分かれ橋」案内があるのをお気付きの向きはいらっしゃるであろうか？　郷土の特色を言い表して妙である。（嶺はないが、橋はある）「界とは地点を限定せず、その辺り一帯という」便利な日本語の用法。詳しく検証していないが、兵庫県東部福知山線沿いの南北水際線間は大よそ二〇〇キロメートル位と思われる。

財政構造改革、公共投資、高速道路建設見直しのご時世、馬鹿な話と笑われるのを覚悟の上で、障害となる高い山がないのを幸いに思い切って運河建設を提案したい。水分かれ橋が消滅するのが残念であるが、完工の暁には津軽海峡、関門海峡迂回の不便さが解消され、経済効果は測り知れぬと思うが如何なものであろうか？　本四が陸続きの時代、陸を切り開いて水続きの方向で検討の時代ではなかろうか？　地峡又は陸地の首根っこに当たる地点が候補地と思うがいかがであろうか？



水分橋側で下水道工事、流れは変わるか？（撮影：徳田八郎衛）

柏原高校百周年・氷上高校五十周年を祝う

柏高百周年式典を終えて

柏原高等学校長　堀　井　隆　水

天が柏高百周年を祝ってくれたかのような好天に恵まれ、去る四月二十六日、百周年記念式典を盛大裡に終えることができた。

当日、同窓会館のオープニングセレモニーに始まり、モニュメントの除幕、記念植樹を経て、午前十時より記念式典に入った。旧制柏原中学校、柏原高等女学校、柏原高等学校と百星霜を経た校史をたどるビデオの上映で雰囲気を醸し出し、記念式典を挙行した。職員・在校生千四百人、来賓等三百人、合わせて千七百人の臨席を得て体育館において厳粛に式典を行い、校歌、記念賛歌の満堂の唱和をもって終了した。

午後は、東京大学名誉教授岩槻邦男氏（高校5回卒）の講演会、ソプラノ歌手足立さつきさん（高校32回卒）の音楽会を催し、午後三時から柏稜会館竣工式および同窓会総会を行った。午後四時三十分から記念日を締めくくる記念祝賀パーティーを氷上郡民会館ホールにおいて開催し、三百有余の同窓生の参加を得て盛大に祝宴を開いた。

思えば七年有余の年月をかけ、百周年記念に向けて同窓会館の建設を最大事業に記念事業が推進され、二億九千万円という巨額の浄財を集めて柏稜会館が完成し、盛大に百周年を祝うことができたことは、伝統に輝く三万三千人の卒業生を擁する学校ゆえに成し遂げられたことであり、限りない誇りと敬意を表するものである。

新築成った柏稜会館は、校庭の百年を経る楠の大木とともに相映えて、毎日登下校する生徒を見守る母校愛のシンボルになると信じる。同窓生の皆様には、母校での交流の場として大いに活用していただきたいものである。

旧制柏原中学校、柏原高等女学校、柏原高等学校と変遷をたどりながらも、この校史を貫く精神は「松柏」である。「歳寒くして然る後に松柏の凋むるに後るるを知る」（論語）から採ったとされる、この松柏は、冬に入り自然の樹木の葉が枯れても松柏の青さだけは残っていることから、節操の気高さを説いたものである。それだけに、これからの二十一世紀の複雑な国際化社会にあっても、丹波を土壌に悠然と生き

ぬく個性豊かな柏高生が育ちゆくことを心から願うものである。

母校の百周年に校長としてめぐりあうことができた光栄を思い、一層「松柏」を心にがんばらねばならないと思っている。百周年記念式典に向け、遠く関東の地から物心両面にわたり多大のご支援ご協力を賜った関東氷上郷友会の皆様に深甚なる感謝の意を表するとともに、今後益々の柏高の発展を期して、ご支援ご厚情賜りますようお願いする次第である。

明るい日差しが降りそそぐ庭で談笑する筆者

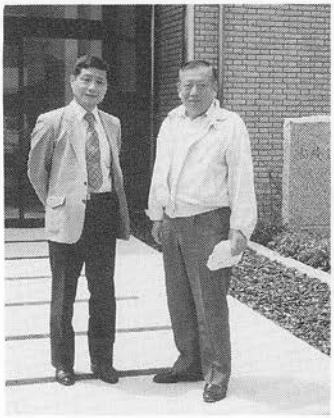
ご案内 ひ孫のような在校生に案内されて記念式場に向かう参会者

柏高百周年記念式典 参観記

編集部　徳田　八郎衛

一　新体育館での記念式典は千七百名の出席者でギッシリ。その内訳は来賓等二八八名、職員六五名（ほぼ同数の職員が場外で受付等に）、生徒約一三〇〇名、その他約五〇名。したがって同窓生の出席は各卒業年次ごとに二名程度に絞られ、これに元職員や「本当の来賓」が加わって来賓等二八八名を構成した次第。

二　同窓会館竣工式および同窓会総会には、関東氷上郷友会の渡辺会長や常岡副会長を含めて約三〇〇名が出席。その前に館内が一般公開された。一階には幾つかの小会議室と生徒の男女別合宿所。二階は約三〇〇名が入れる大会議室。講演会に適しており、式典直後のゴールデンウィークには早速、講演会かシンポジウムらしきものが開催されていた。



柏陵会・植田憲雄会長と筆者

三階は吹き抜けになっており、一部が和室である。なお「ポットン便所世代」には、使ったら罰が当たりそうな大理石のトイレもある。

三　氷上郡民会館ホールでの記念祝賀パーティへの参加者は四三〇名。三〇〇名の予定だったが当日の飛び込み参加が多くて受付役の職員は大忙し。会場も、今春卒業したばかりの一八歳から八八歳の大先輩までが立錐の余地なく埋め尽くし、一つのテーブルを三学年が共有する始末だが、七〇もの「学年」が集うのだから、これはやむを得ない。

ところが一時間も経つと同期生同士で予定の二次会場へ抜け出す姿がチラホラ、やがてゾロゾロ見られ始めた。そこで会場が空っぽにならぬうちにと急拠、旧制や新制の校歌や応援歌が斉唱され一見寮歌祭の雰囲気に様替わりする。

なお、小生の同期生には、祝賀パーティへ来ないで同期会へ直行した「不届き者」の方が多かったとか。縦割り社会といわれるが、やはり同窓会では縦よりも横の団結が優先するようだ。最後に、この大イベントに早朝から深夜までご奉仕頂いた職員の方々に深謝したい。堀井校長もその一人だが、「同窓生にして職員」は特に奮闘されているように思えた。

「拓く」をテーマに創立五十周年

氷上高等学校　校長　芦田拓雄

風の音に秋の訪れを感じる頃となりました。関東氷上郷友会の皆様には、何かと氷上高校へのご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、兵庫県立氷上高等学校は、本年をもって創立五十周年の佳節を迎えます。

顧みますと、本校は、終戦の傷跡のまだ癒えぬ昭和二十二年に、地元の方々の農業振興と将来の農業人の育成に向けての熱い思いが実り、財団法人兵東農蚕学校として呱々の声をあげました。以来、県立篠山農業高校氷上分校（昭和二十三年～）、県立氷上農業高校（昭和三十八年～）、県立氷上高校（昭和六十年～）と変遷を経ながらも、兵主の森に包まれて深く根を張り、丹波地域の専門高校としての地歩を確実に築いて参りました。また、その間に、九千人を超える多才にして個性豊かな卒業生を輩出し、地元はもとより全国各地で活躍されていることはご同慶の至りであります。

現在では、営農科・食品加工科・生活科の農業関連学科に商業科を加え、十八クラス、六百人の生徒が、十七ヘクタールもの自然味豊かな校地で、のびのびと学習に励んでおります。また、日々の学習では、校訓・「開拓者精神」を基底として、実習・実践を重視した「実学の精神」を学び、その精神の高揚の場として、二年次に全員が長野県・北海道において十日間の勤労体験実習を、現地の町村をあげてのご協力により実施して、既に四半世紀を迎えました。

更には、農業クラブ・商業クラブ、運動・文化クラブの活動も活発であり、とりわけ、女子バレーボール部の活躍により、「氷上」の名は全国に知れ渡り、誇りと活気に満ちた学園に成長いたしております。

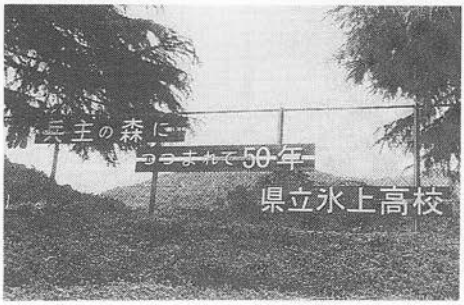
女子バレーボール部は、春日町在住（出身）の高見諭教諭（監督）の指導のもと、過去、七回の全国優勝を達成いたしております。本年度は、京都・舞鶴市で催された全国高校総体において、全日本のメンバー二名を擁する宮城・古川商業高校と互角に渡り合って惜敗し、優勝こそ逃しましたが、ベスト8まで進む活躍をしてくれました。三月の春高バレーと合わせて、ご声援・ご支援をいただきましたこと、改めて御礼申し上げます。

また、本年は、アメリカ・ワシントン州・オーバン市より、オーバン高校の在校生としては初めて、スチュアート・ラス

ムスン君を一学期間、留学生として受け入れ、七月三十一日に帰国いたしました。

最後に、本年十一月八日には、創立五十周年の佳節を記念し、本校を支えていただいた多くの方々をお招きして記念式典を催すことにいたしております。

その記念事業として、㈠校訓碑の建立、㈡記念誌の発刊、㈢記念賛歌の制作、㈣記念講演会の開催などを予定しております。同時に、生徒・教職員・保護者挙って、学校内外を花で飾る「花いっぱい」運動を繰り広げ、心のこもった式典にいたしたいと準備を急いでおります。



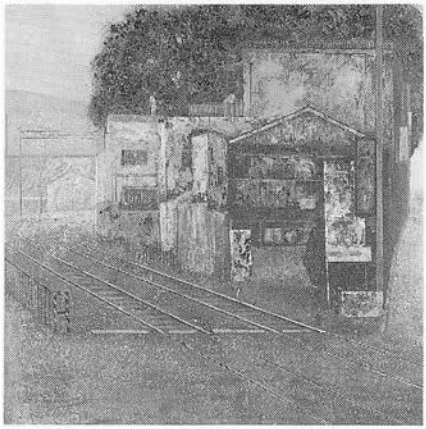
この節目に籍を置く喜びをかみしめ、この際、五十年の歴史を振り返ると共に、テーマを「拓く」とし、本校の来たるべき姿を模索していきたいと考えております。

遠く関東の地から「氷上」をお忘れなく、変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますことをお願いし、併せて皆様のご活躍・ご清祥を祈念申し上げます。

（平成九年八月吉日）

ようこそ、ラスムスン君。氷上高校へ初の留学生

近況・エッセイ



石田昌照「町の片隅」
（青垣2001年日本画展 佳作入選作）

スペイン・バルセロナにて

植田茂樹（柏原町）

九四年七月から、スペイン・バルセロナに出向・駐在しています。

バルセロナというと、九二年のオリンピック、建築家ガウディ設計の聖家族教会やピカソ・ミロといった芸術家の町を想像される方が多いと思います。一方でバルセロナは、日本の自動車や家電・情報機器メーカーが工場進出している工業都市でもあります。

私の駐在している自動車会社は、従業員六千人、日本人駐在員四十人で、年間十万台のRV車や商用車を生産・出荷しています。

バルセロナは、晴天が多く温暖で治安が良いため、非常に住み易い都市です。駐在員が選ぶ世界の住み易い都市ベスト10に必ず入ります。欧州の中で、最も日本食材が手に入り易い都市であるというのも、人気の理由でしょう。

そこで、皆様にバルセロナの日本人の食生活の一端をご紹介しましょう。

一般的に、肉、魚、野菜、果物類はスーパーで買うより、市内数箇所にある市場の方が、安くて新鮮な物が手に入ります。市場は小売と卸売を兼ねて、肉屋、魚屋、八百屋、卵屋等が数十軒入居しており、誰でも自由に買えます。

土曜の朝、女房を車に乗せて市場に買い出しに行くのが、駐在員の週末のお勤めです。

バルセロナで生活し始めた時、日本人はまず肉屋でショックを受けます。部位別に塊で売られている肉に加え、羊の頭、数種類の脳味噌、皮が剥かれた兎、子供達は怖がって肉屋に近づきませんでした。

それに比べ、魚屋に並ぶエビ・カニ・イカ・マグロ・カツオ・スズキ・ヒラメ・アンコウ・アジ・ウニ・貝類は圧巻です。スペイン人は生魚を食べますので、刺身用魚貝類が簡単に手に入るのは便利です。皆さんはスペイン人のウニの食べ方をご存じですか。ウニをパンに塗って前菜として食べます。私はウニ専門レストランに行く時、必ず醤油とワサビを持参します。パンには塗れません。

スペインの沖合では大型のマグロがとれ、四月から十月頃まで良質のトロが出回ります。ある市場にはマグロ専門店があり、スペイン人のおばさんが、日本人が通りかかる度に「トロ、トロ」と連呼しています。

スペイン人は米をいろんな料理に使い、その代表例が名物料理パエリヤです。数種類の米がどこでも容易に手に入り、郊外では日本米（あきたこまち）さえも栽培されています。八百屋の品数の多さは、日本の店の比ではありません。日本的な大根・ネギ・白菜・里芋も手に入ります。果物では、バレンシアオレンジだけでなく、日本的なミカンにリンゴの富士もあります。

秋には、柿やクリ、長十郎の梨だけでなく、マツタケが出回ります。バルセロナ近郊は松林が多く、マツタケが採れるのです。丹波のように厳重に管理されたマツタケ山でなく、自然に生え、勝手に採り放題の松林なので、一キロ二千円という魅力的な値段です。こちらのマツタケは、丹波産に比べ形が大振りで、少し苦みがありますが、香りは正真正銘マツタケです。

スペイン人は外食を非常に好みますので、町の中はあきれるほどレストランが多いのです。日本人にとって辛いのは、レストランの開店が夜九時ということです。夜九時は日本なら明け方で、日本からの観光客は、せっかくの豊富な食材を半分寝ながら食べておられます。我ら駐在員は、故郷で養われた舌と味でこの豊富な食材を堪能しています。

五百人以上の日本人が参加する年末恒例バルセロナ餅つき大会で、お雑煮は白味噌に限ると主張している私はやっぱり丹波人。

富士登山

荻野義雄（春日町）

富士山に登りはじめてからちょうど十年になります。富士登山の希望者を募集しているからと友人に誘われたのがきっかけでした。一度は登ってみたいものだとそのチャンスを伺っていた時だったので喜んで応募しました。

参加者は地元のおじさん、おばさんとその家族が多くを占め、ほとんどが初めて登る人でした。夜明け前に由比町の役場を発ち、富士宮口五合目に向かいます。富士スカイラインから登山道に入る頃になってようやく空が白み始めました。カーブを回りながら登っていくマイクロバスの窓から見上げていると、時折木々のすきまから富士の山肌が迫ってきます。奈良の大仏の顔を下から見上げているようで、圧倒されたような気持ちになったのを覚えています。

私がはじめて本物の富士山を見たのは大学卒業後、静岡に就職が決まって庵原郡富士川町に来たときです。当時の私には、静岡県は東京と名古屋の間にあるところという位の認識しかなく、赴任後の数年間よく出かけた伊豆半島や富士山周辺のことなどほとんど頭の中になかった状態でした。

富士川町に着いたときも、これから始まる生活のことに思いを巡らせ、まわりの景色などは全く目に入っていなかったようでした。翌日、朝日を感じて目を覚まし、何気なく部屋の北側の障子窓を開けた時のことです。そこに私が初めて見る本物の富士山が目に飛び込んできたのです。それも目のすぐ前に大きく。とにかくびっくりしました。もし近くに誰かがいたら大声で呼びたくなるような感激でした。部屋の真ん中まで下がると窓枠がちょうど額縁になった富士山の「写真」がそこにあり、しばらく呆然としていたような気がします。

それからしばらくは、よく富士山の周辺に出かけました。初めて車を持ったということもあって、富士宮に抜けたあと白糸の滝から富士五湖に向けてドライブしたものです。富士川町から見える富士山は宝永山が山腹の右の方にあり、測候所が山頂のギザギザの左の隅に光っています。同じ静岡県でも沼津の方から見ると宝永山が手前にきて何となく違う感じがします。山梨県側に向かうとまず大沢崩れが目に入ってきて冬場では車を進めるにつれて雪で白くなった部分がだんだん広くなっていき山の北側だということを知らせてくれます。めったに行かないけれど、正反対の河口湖側から見ると全く違う別の山を見ているような感じさえします。方向を変えれば見える形が変わるのはごく当たり前のことですが、どこから見てもサマになっているというあたりが富士山のすごいと

ころなのでしょう。

私は山登りや山歩きを特に好むというわけではありません。その気にさえなれば、気楽に登れる山は近くにたくさんあると思いますが、おむすびを持って出かけようという気持ちまでには至らないのです。でも、富士山だけは毎年登り続け今年で十年になりました。

「一度も登らないバカ、二度登るバカ」というようなことを聞いたことがありますが、確かに果てしなく続く砂と岩の坂道をひたすら登り続ける、鳥や花に出会うわけでもない、下に見えるのは雲ばかりというのではそれほど魅力的な山とはいえないのかも知れません。それでも毎年夏になると、今年はいつにしようかと考えはじめてしまいます。何故なのか。その理由を考えたことはあまりないのですが、強いてつきつめてみれば去年まで登ったのだからというほとんど意味のない使命感、あるいは意地のようなものなのかなあと思ったりもします。

理由はともかく登った後は今年も登れたという安心感が残ります。来年も夏になると登らなければという気持ちになりそうです。そして、だんだん年をとっていくにつれ、私にとっての富士登山はいつまで続けられるかという自分の体力を確かめるものさしのようなものになっていくような気がしています。

私の近況

井田悦子（市島町）

大阪JR高槻の駅で、ふと目にした、丹波がメチャ近くなったという広告である。なつかしく眺めていて、世の中便利になって、昔は一晩中夜汽車にゆられ、大阪駅でまた福知山線に乗り換え、小さな子供を連れてずいぶん遠いなあと思いながら、親に会いたい一心で苦労しながら帰ったものだった。

今四十三歳になる長男が小さい頃、夜汽車で乗り継いで行った丹波をどこか、遠い外国へでも来たと思ったのか、朝食に海苔を食べながら、「この海苔は日本の海苔と同じだね」と言った言葉が面白おかしく思い出される。

去年の暮れから私の弟が脳梗塞で倒れ、救急車で病院への知らせが入り、子供の頃から小児麻痺にかかり身障者のため、一人暮らしをしていて親族がいないため、隠居に近い身である私が看病に行くことになり、半年間、東京－大阪を往復して看病、三ヵ月で内科的な治療が終わり、リハビリ専門の高槻病院の理学診療科病院へ転院またしばらく高槻通いが続き、もともと大阪生まれの私は懐かしい所でしばらく生活ができ、幸い弟の方も段々と病状のほうも落ち着いてホッと

しているところです。また奇遇にも、副院長先生が柏原病院の院長先生とお友だちで、よく柏原に行くんですよとのお話でした。

まだ少々大阪ボケが直っていない頭で原稿を書きながら、山ざるの皆様にもしばらくご無沙汰をして失礼をしていますが、人も年を重ねると、あちこちの体の部品も疲れて今まで丈夫だった人も故障が起きるようで、主人も狭心症で入院、カテーテルでPTCAという治療を受け、無事退院、今は元気で近くの旅行にも行けるようになり、気をつけながら毎日を過ごしています。

病人続出でたいした話題もありませんが、またゆっくり皆様にお目にかかれる日を楽しみにしています。

中国を訪れて

酒井重男（柏原町）

昨年、一月から二月にかけ一ヶ月間、(財)海外貿易開発協会の要請で、河北省保定市のビスコース繊維を製造している民間会社に廃水処理の技術指導に行きました。中国はご存知のように環境悪化が著しく、その対策としてわが国と中国政府の間でグリーン・エイド・プランが策定され、現在、環境改善が進められ、今回はその事業の一つです。

保定市と会社の概要

保定市は北京市から南西の方向に車で約二時間の所にあります。途中、北京市から約三十分の所には、われわれの年代の者には忘れることのできない、支那事変の勃発の発端になった蘆溝橋があります。今回はこの橋を少し離れた高速道路の車の中から眺める程度でしたので、詳しくは分かりませんでしたが、眼鏡橋のような非常に美しい橋に見えました。

保定市は昔、総督府が置かれていた所で政治、経済の中心をなし、今も建物は残っています。また、先輩の話では支那事変の時は大激戦が行なわれた所とのことでした。会社は従業員約八千人で年間一万トンのビスコース繊維（人絹）を製造しております。日本では戦後間もなく製造された繊維ですが、現在は製造されていません。中国から年間約千トンが輸入されています。

ビスコース繊維は綿の繊維を原料として製造しますが、製造工程から黒液や亜鉛を含んだ廃水などが一日約三万トン排出されます。この廃水には多量の有機物、色素、重金属が含まれていますが、現在は簡単な凝集処理を行う程度で放流されています。

白洋淀の環境汚染

白洋淀は保定市から車で約一・五時間の所にある非常に大きい湖で、中国北部で唯一の水郷の景観を保ち、昔は北京市から近いことから皇帝たちの保養地として栄えた所です。ところが、近年は保定市近郊の工場から排出される廃水で汚染され、私も行ってみましたが、湖は真黒のヘドロが堆積していました。ヘドロの分析値を見ますと、日本でもカネミ油症事件を起したPCBや銅、鉛、亜鉛、カドミウムなどの重金属が多量含まれていました。

この湖の周辺の住民はこの湖の魚やアヒルを食用としており、日本の水俣病のような公害病が心配されます。最近になり、大学や国立の研究機関が水質やヘドロの分析を始めた程度で、まだ具体的な対策は何も講じられていないようです。

右から２人目・筆者

環境問題と経済

中国は環境問題において日本の二十～三十年前の状態であると聞いていましたが、まさにその通りで大気汚染のひどさは飛行機からでも明らかに認められます。中国において燃料は石炭が主で、しかも石炭の質が非常に悪い。火力発電所をはじめ各工場は排煙脱硫装置が完備されていないため、黒い煙をもうもうと上げて大気中に放出されています。近年、日本で問題になっている酸性雨も、このような状態が続けばますます酷くなることが予想されます。

中国は現在、社会主義経済から市場経済へ移行しつつある時期であるため、特に国有企業の場合経済的に非常に苦しいようです。国有企業全体の中の赤字企業の比率は、九六年十一月の時点で四三・七％と前年よりさらに拡大しており、環境設備まで余裕のない厳しい状態にあると思われます。

市民の生活

中国は市場経済への移行時期であるためか、社会制度にも種々問題があるように思われ、企業内においても種々の矛盾

があるように思われた。例えば、賃金問題においては同一労働、同一賃金制度のためか、仕事の内容の軽重よりも労働時間に重きをおいた賃金体系が採られているようです。したがって、極端な場合、仕事をしなくても会社にいれば賃金はもらえるという考え方である。まじめに仕事をしている人はごく一部の人達で、何もしていない人が非常に多いように見受けられた。

私の通訳の女性は大学卒の工学系の技術家で、数年前に日本の横浜国大に三年間留学していた人でした。彼女は会社で百人余りの部下をもち現場で活躍していますが、給料は工員と大きな差はないようでした。私が指導した数人の女性も大学卒の研究員でしたが、非常に優秀で男性よりもよく働いていました。会社退職後はある年数を勤めておれば一定の年金がもらえ、贅沢を望まなければ生活ができることも一因であるよう思われた。

市民の娯楽は非常に少なく、会社帰りの途中に飲み屋や喫茶店があるわけでなく、各家庭に直行することになります。唯一の娯楽はカラオケや太極拳のようで、夕方になると広場に集り太極拳を楽しんでいました。

丹波皇居奉仕団の一員として

北村貞子（柏原町）

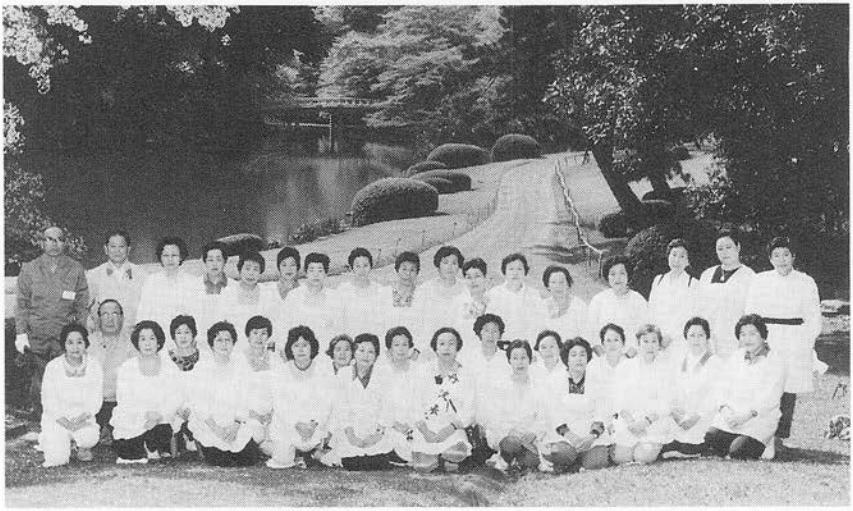
私にとって忘れ難い四日間でした。

平成九年四月七日～十日まで、新宿区の日本青年館に宿泊しながら、連日皇居の清掃奉仕に参加いたしました。

この奉仕団は、私の親友余田瑞保子さん（石生「大和旅館」経営）が、お母上静子様が六十歳の頃から八十歳になられるまで、何と三十八回にもわたって実行されたものを、十年たった今、お母様の遺志をついで復活されたものでした。この頃は宅急便もなく、大きな荷物をもって列車を乗り継ぎ、六十人ぐらいをまとめ都内に宿泊し実施されたご苦労は大変なものだったと思います。

今回私達は余田さんを団長に、三十六名の編成で、先ず桔梗門から入り窓明館に集合、北海道をはじめ青森、愛知、大阪、岡山などから参加者五百名と一緒に清掃作業をしました。作業を終えた第一印象は「とてつもなく広い」でした。皇居内の面積は約三十六万坪、日比谷公園の約七・五倍です。

何といっても圧巻は、天皇、皇后両陛下、紀宮殿下にお出逢いできたことです。天皇陛下が団長一人一人にお言葉をか



けられ、余田団長もお母様から引き継いで来たことなど話されると、皇后陛下が「お母様が亡くなられてお淋しくなりましたネ」とお言葉をかけられ、団長も目に涙があふれ言葉が出なかったようです。目の前での両陛下のなごやかなお姿を拝して感激の極みでした。隣の地区の男性の団長は、両陛下を前にして挨拶の言葉はすらすら出ているのですが、膝がガクガク、ズボンが揺れているのがわかるのです。私達の年代は皇室に対して特別な感慨を持っていることを実感いたしました。みんな緊張の一瞬でした。

三日目、東宮御所では皇太子殿下がお出向きになり（同妃殿下は体調悪く残念ながらお目にかかれず）、学生時代、丹波篠山を訪れ、ぼたん鍋を召し上がられたことや、松茸、栗、黒豆や山の芋のお話をされ、笑い声をともなう和やかな話が弾みました。

清掃作業の合い間には、一般には入れない宮殿中庭を見ることができましたが、そこには和歌山県産那智の白石が敷き込まれ、西南隅の白梅と東北隅の紅梅が早春には美しい花をつけるそうです。また南庭には芝生が敷き詰められ幾種類もの樹木の中に桜の花が満開でした。大道庭園には、見事な盆栽が百種類以上もあり、中には徳川時代のものもありました。それから紅葉山を経て御養蚕所、宮中三殿、賢所参集所の前を通り、それでも吹上御所は、はるかかなたという感じで、吹上御苑は武蔵野の面影を残す雑木林と野草の生い茂る所となっていました。これは自然のままを愛された、昭和天皇のご遺志によるものだそうです。皇居の方々では四季折々の花が咲き乱れることでしょう。

東御苑は今は一般公開されていますが、旧本丸の跡、松の廊下の跡、大奥の跡など聞かされ歴史の重さを感じました。

本丸入口あたりの他、四つの門を通り百人番所（本丸に入る時の最大の検問所）の建物は幕府時代のままだそうです。この辺の大きな石垣の石は、淡路島から船で運ばれたとか、本丸と二の丸をつなぐ坂道から海が手に取るように眺められたとか、海が近くにあったことが感じられました。

三日目の夕刻には谷洋一代議士のご案内で国会議事堂をつぶさに見学でき、最後の夜は横浜港でクルージングを楽しみ、同郷のお友達と再会できた思い出に残る日々でした。

余田団長の許には、また来年も実施を希望する声がたくさん寄せられているそうです。

佐渡島に渡る

生田清弘（柏原町）

佐渡はキバナカンゾウ（学名トビシマカンゾウ）が一面に咲き乱れる頃が美しいというので、今年の六月はじめ島に渡った。

佐渡といえば、佐渡おけさ、国際保護鳥「トキ」、金山、たらい舟などを連想し、また順徳上皇、日蓮、世阿弥のゆかりの地としてなかなか見どころの多い島だが、想像以上に大きくて二泊三日程度では、ほんの一端をのぞくに過ぎなかった。芸術に関することを断片的に書いてみる。

○

佐渡には四十を超える能舞台が島内の神社などに現存するという。まさに能の島である。その代表格である本間家の能舞台を見学した。普段は閉ざされているようで、夏には演能が行われ佐渡宝生流家元も帰島して演じるといわれる。本間家の能舞台は歴史の中で佐渡の能が生きてきた証ともいわれ、入口に掲げられた両津市教育委員会の説明板を読めば理解できる。それによると次のとおりである。

――本間家は過去にこの地に在った潟上城主ともいわれ、戦国時代に難を逃れた本間高秀対馬守の末裔秀信は寛永十八年（一六四一年）奈良で能楽を修め帰着、享保五年（一七一一年）佐渡奉行所より佐渡宝生の能太夫を命ぜられ、その後佐渡能楽の伝統を守り今日に至っている。

この能舞台は明治十八年十五代本間令桑の代に建立されたもので、神事能が盛んな頃島内に五十余の能舞台があり、今その名残りをとどめる中で本格的な能舞台として保存されている。

建物は木造瓦葺寄棟造りで禅宗とともにわが国に渡って来

た唐様建築の扇垂木手法が用いられ、音響効果をあげるため床下に瀬戸産の瓶を埋めてあるのも特色である。

明治維新で能楽は崩壊し、幕府の庇護を失った余波はこの舞台にも及び、鏡板、橋掛りなどの材質が極度に落ちているのも当時の歴史を語るものといえよう。

昭和四十六年両津市文化財に指定する。――

内部を見せてもらったが、大きな松の木が描かれた舞台の壁や床板、天井などの手入れも行き届き立派に保存されている印象だった。

○

かねて、佐渡には「無名異焼」という変わった名前の焼き物があることを知っていた。通りがかりに見つけた窯元に立ち寄り、この焼き物についていろいろ教えてもらった。無名異とは佐渡鉱山金銀坑中より産出する鉱土（酸化鉄）の一種で古来中国およびわが国において血止めの霊薬として珍重されていたという。これを用いた無名異焼は朱泥・紫泥・黒泥となり、その質は緻密で硬く、叩けば金属のように澄んだ音を発する。また原色は永久に変わらず、歳月を経るに従い光沢を増すという。説明によると、中風の予防にも効き目がありこの焼き物を愛用する人も多いとか。一般的には湯呑や急須などが多く、茶器、花器、酒器が販売されている。

無名異といえば青磁の三浦小平二さんが有名だ。今年の五月二十三日、文化財保護審議会は、十一人の方々を重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定するよう文相に答申した。この中で青磁、彩釉磁器、綴織、刺繍の四分野は、初めての認定であり、青磁の三浦さんや綴織の春日町出身の細見華岳（本名房雄）さんが含まれている。

三浦さんは、佐渡の朱泥土の素地に青磁上薬をかける独自の技法を開拓した業績とともに伝統技法をふまえながら現代感覚にあふれた作風が高く評価されている。

相川町にある「三浦小平二・小さな美術館」を訪れ、素晴らしい先生の作品を鑑賞するとともに、先生のデザインによる可愛らしい動物達の文様のある小物作品が並べられている店内を興味深く拝見した。そして「トキ」の図柄の湯呑を記念に買った。

三浦家の経歴を紹介すると、初代三浦常山は明治十一年に無名異を使って軟質だったものを改良して硬質の朱紫泥焼（無名異焼）を創始し、三代常山により佐渡の産業として広く内外に進出、初代小平は三代常山の子として父の業を受け継ぎ美術絵画の研究に進み、初代常山の本名である「小平次」に因み小平窯をはじめ個性的な作風を作った。

小平二さんは小平の長男である。先生の言葉を借りると、「青磁を始めて三十年、より高度な南宋官窯をめざし、失敗を重ねてきた、一九七六年にアフガニスタンに旅し、砂漠の

中の神秘的な湖バンディ・アミールに出会い、空と水が一体となった大自然を青磁で表現し、その中に人間や動物達を描く。青磁と絵画的、彫刻的表現が調和して、私のシンフォニーが作られる」と。

○

佐渡滞在中は八幡温泉の八幡館に泊まったが、ホテル前面には広い松林があり閑静なたたずまいで、大浴場からの松林や、七階スカイラウンジからの松林越しの真野湾の眺望も素晴らしい。昭和三十九年新潟国体のとき来島された天皇・皇后両陛下が宿泊された由緒あるホテルとか。近くに「佐渡博物館」があり、松林の中の「昭和天皇御散策の道」を通り抜けると博物館に出る。

この博物館は総括的に佐渡を知る上で最適であり、広く島の自然や人文に関する資料をはじめ旧石器から縄文、弥生時代の生活をしのばせる遺跡や出土品を総括的に紹介し、かつては遠流の島、金山の島だった佐渡の歴史にも接することができる。

また、この博物館内には佐渡出身の日本画の巨匠・土田麦僊の素描展示室がある。外国にはこのような名画家の素描館は珍しくないようだが、わが国ではあまりない。

素描を見ていると、最終的には最高の作品を作る画家の取り組みの過程がよくうかがわれ奥深い日本画の姿を読み取ることができるような気がした。それは単なる下書きではなく、切り張りをして見つめ直したり、線の流れを修正して、よりめざすものを追求するなど、画家の情熱が感じられ大変興味深く見て回るうちに時間の立つのも忘れてしまった。

ここには約五〇〇点の素描作品を収蔵し、常時展示して一般に公開している。主な作品は初期の「罰」、「春の歌」などの写生、「三人の舞妓」の草稿、代表作である「湯女」屏風の草稿、そしてヨーロッパで描いた「西欧婦人」の写生から「舞妓林泉」の素描などである。

○

浪曲「佐渡情話」のお光は小木（おぎ）から柏崎までたらい舟で通ったという。そのたらい舟に一度は乗ってみたくて乗ってはみたが、なかなか思うように進む代物ではない。折悪しく雨も降りだし、ここはプロのお姉さんに任せて早々と引き上げた。

小木港の岸壁に小さな二階建ての建物がある。これが「日本アマチュア習作美術館」だ。佐渡汽船の元のターミナルを小木町が譲り受け、ふるさと創生資金を使って改造し八年前にオープンした世界で最も海に近い美術館である。

ここに収蔵されている作品はすべて寄贈によるもので、著名人では海部俊樹元首相の「ばら」の油絵や、森繁久弥氏の墨絵「うなぎ」（この絵にはこう書いてある。――つかみどころのない奴だが腹を割いて焼いて見りゃちったあ味のある

男――）、住吉弘人氏（コスモ石油社長）の「ニューヨークの想出」の油絵などの作品が展示されていた。例外としてお金を出して買ったという作品が二点だけあるという。それらは、ウィンストン・チャーチル元英国首相の「円錐形のブイのある海景」と夏目漱石の「僧観月図」である。

また、アート・アイランド佐渡・ビエンナーレの上位入賞作品も展示、この企画は名実共にアマチュアの美術館にしたいとの意図から実施され、佐渡の風景や行事などをテーマにした作品を公募したものだ。なかなかユニークな親しみある美術館で、ますますの発展を祈りたい。

○

佐渡に流された順徳天皇、日蓮聖人や世阿弥らの物語を等身大のハイテクロボットが演じ、実際の情景をリアルに体験できるのが「佐渡歴史伝説館」である。総工費五億五千万円をかけ館内を改装し、佐渡の歴史と伝説を音や光の演出により動き、語り、舞うハイテクロボットの迫力ある演技は見ごたえがある。

伝説コーナーでは等身大のロボットによる語り部の老婆のガイドで、森鴎外の「山椒太夫」安寿、厨子王の母恋物語「安寿伝説」、木下順二の「夕鶴」の原話で鶴の恩返しを語った「夕鶴伝説」、猫が可憐な乙女に変身して飼い主を助ける「おけさ伝説」の昔話を楽しむことができる。

同館での見どころとして忘れてならないのは佐々木象堂記念館である。工芸家・象堂の名作の数々を展示、象堂芸術の真髄に接することができる。象堂さんは佐渡独特の鑞型鋳金の作家で人間国宝、なかでも鑞型鋳銅の「瑞鳥」は皇居新宮殿の棟飾りで有名である。瑞鳥は鳳凰と同じく縁起の良い鳥とされ、昭和天皇御在位六十年の記念切手のデザインにも用いられた。

○

佐渡にはまだまだ見どころが沢山あり、海産物やお酒もうまい。真野町にはミニ独立国「アルコール共和国」があり、売店には共和国内の各酒造の酒が並び試飲もできる。私達は副大統領に会うことができた。また出かけてみたいところである。

〝時は春、日はあした……〟

矢尾　鐵太郎（柏原町）

山道を登りながらこう考えた、という文章がふと浮かび、ああ、これは駄目なんだと思い直した。それにしても、春の盛り、花も若葉も美しく、すがすがしい風が通りぬける伊豆

長岡の源氏山を登りながら、文章を考えなくてはならないというのはいささか情けないことではあった。

そもそも文章を考えなければならぬ羽目になったのは、この『山ざる』の編集者のT君が何か書けと強要してきたことによるが、実はそれには伏線があって、今年の年賀状に、「一人で何個所にも登場するのは如何なものか」と書いて出したら、T君から編集者の苦労や、原稿を頼んでも期日までになかなか書いてもらえない悩みなどを聞かされた上で、「そんなに言うならお前も次の号にきっと書け」と引導を渡されてしまったものだ。

この伊豆長岡にはA氏の勤める会社の保養所があり、そこに泊まってテニスをしようということで、氷上出身のテニス愛好者八、九名が四月中旬の週末に集まることになった。私がその保養所に着いた時にはまだ誰も来ておらず、待っているのも能がない気がして、近くをぶらつこうと歩き出したらそこに源氏山があったというわけだ。

よく晴れた日であったから、山道は少し汗ばむ程で、顔に受ける風が心地よかった。いつの間にか文章のことはどこかに消えてしまっている。ああ春はいいなと思ったら、〝時は春、日はあした……〟という詩の切れ端が浮かんできた。これは確か学校で習ったものだ。しかしまあ、四十年以上も前に習ったことが、その途中に殆ど何もなくて、いきなりというか突然というか、この源氏山でふいと出てくるというのもおかしなものだ。〝揚げひばり名乗りいで……〟とか〝かたつむり枝に這い……〟とかの断片もでてきた。そうか、最後のほうは、〝すべて世はこともなし〟だったっけ。

この詩を習ったのは英語の時間だろうか、いや、きっと国語の時間のはずだ。柏原中学の時？　いや、柏原高校の一、二年の頃だろう。そこで、こんどは英語や国語の先生方の顔が浮かんできた。遠い昔のこととて、なかなか鮮明には出てこない。国語なら山鳥先生か、小谷先生だろうか。しかし、あの蒼白い顔と栄養不良（ごめんなさい）のような体型の山鳥先生と、〝時は春〟とはイメージがなかなか結びつかない。やはりあの頃若くて我々の憧れの対象であった小谷先生の方がぴったりするような気がする。きっとそうに違いない。

そこでまた、何の脈絡もなく、校庭で小谷先生と植田先生（当時は芦田先生だっけ？　我々はノリさんとしか言わなかったけれど……）がバトミントンをしていたのを思い出した。まだ二十代のノリさんは肩幅が広く、ちょっとした逆三角形の体型で、脚も長い方であったような印象をもっている。この二人がバトミントンをしている様子には、何やら青春とかロマンとかを感じさせる華やいだものがあり、うらやましいような気持ちで教室の窓から見ていたものだ。

とりとめもなく昔のことを思い出しているうちに、せいぜ

い五〇〇メートル位の坂道は終わり、頂上へ出た。伊豆半島一望とはいかないが、ぼーっと霞むような春の景色にはそれなりの情緒があった。年を取るにつれて、花や季節や、小川や空や、要するに自然がなにやらいとしいもののように思えてくるから不思議だ。しばらくぼんやりと周りを眺めていたが、そろそろ他の連中が着く頃か、惜しい気もするが戻るとするかと腰をあげた。

その夜の夕食は賑やかだった。いつもの常連に加えて、A氏のご家族も一緒だった。A氏の奥さんが私より一年下の、柏原の荒物屋の娘の旧姓Yさんであることを初めて知って驚いた。A氏とのなれそめが柏原高校の図書班だったというような話から、国文班だのESSだのにも話が及び、それぞれが皆若かった時代を、四十年以上も前の我々の青春のときを思い出して楽しい感傷にひたった。

「青春時代」という歌がある。作詞者の名前は覚えていないが、その中の歌詞の幾つかには大いに感心し、共感したことがある。「…青春時代の真ん中は道に迷っているばかり…」とか「…心に刺さすことばかり…」とかの文言は、本当に自分の青春時代を良く言い当てているように思えたものだ。それが今、何十年の年月を経て、当時を振り返ることになってみると、なんと懐かしく、当時の自分がなんとけなげに思えることか。

それぞれの感慨をそれぞれが感じながら、賑やかな談笑の時が過ぎていった。何年か後になってみれば、この時がまた青春のひとときのように思い返されるのかも……。

主は近し

池田達人（氷上町）

『主は近しの近しでございます』とTELが入った。あの宮野近さんであった。筆者は「世の中に、これほど良い名前を持った方がいたのか」……と思わされた。つけた方も立派、できることなら一度お会いしたかったのに……。

この言葉は、聖書ピリピ書四章五節からと思う。

〝いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。あなたがたの寛容な心ですべてに知らせなさい、主は近いのです〟

〝遠くて近きは男女の仲〟と言うが、この近きとは意味が少し違う。この近しは、キリストの降臨は近いので、いつも心の準備をしておきなさい、という意味です。この名をつけた親の思いがこもっているようですね。

さて名前の由来をもうひとつ（筆者の友人の稲田氏の話の

中から)。

今から三十年ほど前のことですが、稲田氏のお父上が、大阪の枚方市の市長であった。その頃よく、あの松下幸之助氏が稲田家を訪れていたそうです。

そして共に食事をしながら、人生、政治、宗教、商売について夜を徹して語っていたそうです。友人も少年時代から大人の話をそばで聞くのが日課で、それが市長の教育方針であったそうです。その話の中に、人間はお金(也)があればよい。やはりお金も必要だと語っていたそう。

そこで筆者は長男に、正直さとお金(也)を合わせもつようにと、願いをこめて直也とつけました。親の思いがこもっております……。

さて筆者は今、キリスト者として生きておりますが、今の世相を冷やかし、カルト宗教を憂い、人間はいかに生きるのがベストであるかと問いつつ、小さな機関誌を毎月一回発行しています。多くの投書が寄せられております(希望の方は、無料で送付しますのでお読み下されば幸いです)。

先日、かねてより尊敬し、山ざるの先輩でもある、岡本庄太郎牧師よりTELを戴き「一度遊びに来なさい」と暖かい言葉をたまわり、お盆に出かけてみようと思いました。きっと先生はどのように生きるのがベストかを教えて下さると思います。その語らいを筆者の機関誌で発表させて戴こうと思っております。

では会員の皆様のご多幸を祈りつつ。

〝われ山に向いて目をあぐ　わが助けは
いずこよりきたるや〟　(聖書詩編一二一章)

読書の中に出てきた「丹波」

本城英明(氷上町)

私のように年中、古書店を含む書店通いをしている人間には、次の二つの感動があります。一つは、目的の本を手にしようと思って書店を訪ね、その本を探し出した時です。特に古書店でその体験をしたときには、近ごろの言葉で言えば超幸わせな気分になります。

もう一つの感動を持つときは、世の中にそのような本が出版されているということを全く知らずにいたとき、ふらっと訪れた書店で書名を見て、「えっ、このような書名の本があったのだ」と思うときです。それと似たようなケースに「えっ、この行に、このようなことが載っている」と思うときがあります。そのようなときには、意外な歓びを感じます。

そうは言っても、今年の五月に神田の古書店で見つけた丹

波氷上郡史は、上巻・下巻で三万四千円也。私にとっては高価だったので、購入はしませんでした。

さて、今回は、私の読書の中に出てきた丹波を上げてみることを試みました。私にとって初めて知ったことでも、すでに御存知でさらにもっともっと詳しい方々も多いと思います。その点のお許しを前もってお願いしておきます。

①『東京再発見』　伊東孝著（岩波新書）

道路トンネルについて書いてある九十九ページに明治期のトンネル・リストが出ており、トンネルの長さ順に番号がふってあり、十二番目に鐘ケ坂隧道（兵庫県）の名が見られます。

②『いま、白球は生きる』　小泉志津男著（日本文化出版）

イトーヨーカドー女子バレーボール部の歴史を主として綴った本です。七十九ページから八十ページにかけて、氷上高校女子バレーボール部監督高見諭氏をごくごく簡単ではありますが、紹介してあります。この本の発行が一九八三年の関係で、高校名は氷上農業高校となっています。

③『明治の学舎（まなびや）』　中村哲夫、『サライ』編集部編（小学館）

書名通りに、全国の明治時代に建てられた学舎（まなびや）が紹介されています。兵庫県下では、旧今津小学校、三田学園旧校舎、豊岡高校達徳会館。そして、柏原高等学校記念館と柏原高等女学校の校舎として使用された大手会館が一〇五ページから一〇七ページにかけて出てきます。

④『兵庫丹波の山（上）』　慶左次盛一著（ナカニシヤ出版）

兵庫丹波の山（下）は多紀郡の山が書かれており、この（上）には、氷上郡の山がびっしりと書かれています。この本は、山の読み物としても傑作ですが、丹波の歴史についても詳述されており丹波の歴史書としても使いたくなります。

⑤『選抜高校野球大会35年史』　（毎日新聞社）

昭和三十九年四月一日発行のもので、私は新宿の古書店で購入しました。昭和三十六年、第三十三回大会に出場した柏原高校の活躍記録があります。

⑥『兵庫県教育史』　兵庫県教育会編（第一書房）

藩学、郷学、私塾、寺小屋編で第五編は丹波國になっており、その中に柏原藩の崇廣館、氷上郡に九つあった寺小屋についての記述があります。

⑦『県別性格診断』　（河出文庫）

四十七都道府県の県毎の性格特色を綴った内容で、兵庫県は壇上重光氏が担当しています。その中で氏は、一九〇ページ八行目から「全国のどこにも兵庫県人会はない（中略）昔の国を単位とした組織がつくられている」と述べ、関東氷上・多紀郡郷友会（丹波）の名を上げています。

「丹波人NOW」こぼれ話

上　高子（氷上町）

「私、柏原高校の同窓生で上　高子と申します。丹波新聞のライターをしていまして、在京でご活躍の方を紹介する記事を担当していますが、近日中にインタビューに応じていただけませんか」。見ず知らずの私が突然こんな電話をしても、「ああ、私でよければいいですよ」と即座に応じてくれる。普段は、知らない人からの電話なら冷たくあしらう東京人でも「同郷である」ということはこれほどの信頼に値することなのか。「柏原」とか「丹波」という言葉を耳にすると、たちまち田舎者のメンタリティに衣替えして、人を疑うことをやめてしまうのかもしれない。

今年四月から、この原稿を書いている時点までに七人の先輩たちのインタビュー記事が丹波新聞に掲載され、このたびその「こぼれ話」を書くことになった。トップバッターは東大名誉教授の岩槻邦男氏。今思い出しても冷や汗がでる。東大教授という肩書の人と個人的にお話しするのは初めてではないので、同じ人間だということはよく承知している。でも「植物」学者なんて、私の最も不得意の分野。四方を書物で囲まれた大学の研究室で一時間半あまり、テープレコーダーが教授の声を吸い込んでいくのを、ただただ聞きっぱなし。

家でテープを聞きなおすと、うわずった声で、「なるほど」とか「ああ、そうですか」などと相づちは打っているものの、自分のものとして話をこなしていない。教授の標準語に時々混じる丹波なまり、たとえば「よーせーへんのですわ」というところを、何回も聞きなおして「ねえ、これ懐かしい、丹波なまり」などと夫に言えば、「君のなまりにそっくりだよ」と言われてしまった。

一番印象に残っているのはO氏。その日帝国ホテルの会食に出るというので、ロビーで待ち合わせた。日比谷公園のベンチに腰掛けてインタビューを始める。あとでテープを聞くとカラスと小鳥の鳴き声で結構うるさいのだが、その時は全然気づかず、インタビューというより楽しそうに談笑している。「インタビュアーは質問するだけ」という丹波新聞の小田社長の忠告がチラッと頭をかすめたが、なんのその。

まず、経歴から話が始まり、「若いころ和田小学校で一年間だけ教師をしたんだけど、やんちゃな男の子がいてね、話をちっとも聞かないので、横面をひっぱたいたことがあった。あとで女の子が僕のとこへきて、あの子は耳が悪いんや、という。この歳になると昔のことがよく思い出されてね、あのことが気になってしょうがない」と告白が続いた。思い切っ

て突っ込んでみた。「もしその子の名前や所在がわかったら、どうなさいますか」「謝ります。会えなくても手紙を書きます」。これで記事の最後の文章は決まった。

記事が掲載されたその日の夜、O氏から電話があった。「今、あの子から電話があったんですよ。あれは自分にちがいないと。それに僕のことをちっとも恨んでないそうです」。思わず言った。「よかったですね、これでよく眠れますね」。それから後のことは、丹波新聞の社長日記で紹介されたのでここでは省く。

自分のことのように喜んだのには、わけがある。丁度その頃、私も昔のことでモヤモヤしていた。以前ある人の心を傷つけ、十年近く経ってそのことが急に思い出され自己嫌悪に陥っていた。O氏のことがあって、自分もその人にわび状を書くことにした。なぜ十年前あのようなことを言ったのか、その時の心理を自分に問う。正直に自分を見つめる。書き上げ、封をしたが、投函はしなかった。相手に届かなくても、自分の問題として、ことの半分は終わった、と思えたから。いつでも謝罪の手紙を書ける、そう思ったら気が楽になった。O氏のお蔭である。

インタビューする筆者

丹波新聞のインタビュー記事を引き受けるとき、郷里にいる親友にアドバイスをもらった。「都会に出た人が立身出世をしてすごい活躍をした、というばかりではおもしろくない。みんな故郷を捨てた人だから。残されたものの気持ちは複雑。故郷への思いときずなをインタビューして欲しい」。このアドバイスは深く心に残っている。私にとっても「ディアスポラ」（四散したユダヤ人・転じて・異郷にあるひとびと）のアイデンティティ（帰属意識）に興味があるし、その心情は共感がもてる。だから、インタビューでは欠かさずこれを聞いている。

私自身は、十八歳で上京してから毎年一回以上は帰郷し、独り住まいの母を慰めてきた。が、ある夏、タクシーの運転手さんから「お盆や正月には、ええ服着た都会の人がお土産

ようけ持って帰ってきてやけど、田舎は年寄りばっかり増えて、墓守や近所づきあいは残った若いもんにしわ寄せがきとるさかい、よい気はせーへんね」と聞かされた。

その時のうしろめたい気持ちは今も続いている。だから、このインタビュー記事をとおして、都会にいる者も決して田舎を捨てたわけではない、われわれも複雑な心情で暮らす「ディアスポラ」であることを、丹波の人々に伝えたい。

ところで、八人目に四十代の男性にインタビューを申し入れたが、やんわりと、初めて断わられた。「田舎とはほとんどつきあいがありませんから」。無理もない。四十代で仕事が無茶苦茶に忙しいころは、故郷のことを思うことも少ないだろう(私もそうだった)。

ところが、このところ丹波なまりの電話が急に増えた。そろそろ回帰願望の年頃なのだろうか、丹波が急速に近づいた気がする。原稿料は少なくても(小田社長、ゴメンナサイ)できるだけ長くこのインタビュー記事のライターを楽しませていただきたい。

八月末、JICAのパラグアイ支部に赴任された前田武彦氏(春日町)からは、来年夏の約束をもらった。それまでは何とか首がつながっていたいものだ。

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。なお、編集上以下のように分類しおります。

①**ふるさと随想**▶ふるさとに関するさまざまな思い出や感想など
②**近況・エッセイ**▶旅行や趣味／世相雑感／私の近況／文芸
③**インフォメーション**▶展覧会／各種催し／同窓会／本の紹介
④**こんなテーマの原稿も募集しています。**
▶ふるさと研究／ふるさとの祭り／ふるさとの民話と伝説
▶わが出発の時（ふるさとを離れる時）／私の仕事と職場
▶丹波を撮る（帰郷の際に撮ったスナップ・ふるさとで見付けた思い出の写真）

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピイをお送りください。

締 切 日：**原稿はいつでも受け付けております。**
次号の最終締切りは
平成10年8月20日です。
原稿枚数：400字詰4～5枚程度
送 付 先：〒104 東京都中央区
明石町2－16－206
㈱ホンゴー出版内
『山ざる』編集部
TEL 03－3248－6625
FAX 03－3248－6626

劇団「わらび座」への道

清家　久美子（青垣町）

秋田新幹線の停車駅角館駅と田沢湖のちょうど中間地点にある「たざわこ芸術村」は、夏休みの今、多くの家族連れや、若者・中年グループなどで連日にぎわっています。村内には大きな舞台とゆったりとした客席を持つわらび劇場（ここでは毎日、民話ミュージカルを上演）・温泉ゆぽぽ・宿泊施設「本館ゆぽぽ」（客室数三五〇）・森林工芸館（陶芸・木工・日本刺繍）・化石博物館・そしてブルワリーパブ（オリジナルの地ビールを生産）などが米どころ仙北平野の青々とした緑の中にしっかりと溶けこみ、訪れた人々の心を癒してくれます。ここの劇団「わらび座」が私の仕事場です。

故郷丹波青垣をあとに秋田行の寝台特急「日本海」に乗ったのは二十二年前の一九七五年四月十一日、わらび座の役者になるためで、私にとっては二度目の出発でした。

それまでの二年間、川西市の中学校で保健体育の教師をし、いずれはふるさとの子ども達を教えるのが夢だった私に、まさに晴天の霹靂・清水の舞台から飛び降りるような決断をさせたのはあまりにも眩しいわらび座の舞台――大地に根を張り、踊りうたいつがれてきた芸能を時代の目で見つめ、とらえ直し、人々と共感を分かち合っていく――に圧倒されたからでした。

一年生の時から担任してきた子ども達の卒業を見届けないで離れてしまっていいのだろうかと迷いながらも、一方でわらび座への下見、研究生になるためのテスト、校長への退職願提出と着々と準備をすすめ、あとはおそらく反対するであろう親の説得だけとなりました。

まず母にそれとなく打ち明け「ようわらび座の話をするから、たぶんそんなことやろうと思ってた。言い出したら聞かん子やから」とあきらめての承諾。残るは父。姉妹も含めての家族会議で案の定、父は激怒。「苦労して大学を出していよいよこれからやという時に何を考えとるんや!!」と頭ごなしです。妹や弟の「姉ちゃんの好きにさせてやったらええやんか」という思いがけずあたたかい弟妹愛（?）が父の「勝手にせえ」という言葉を引き出しました。実家は寺でしたから弟が後を継ぐことになっており、長女である私は一応弟を盛り立てる責任もあったのですが……。それ以来私は二人に頭が上がりません。

そしていよいよ出発の日がやってきました。大阪駅には両親、大学時代の同級生、後輩が見送ってくれました。列車がホームを離れたあと、私はこれから始まる未知の世界への若干の不安を打ち消そうと、ずいぶん気負って座席に着いたのですが、父も母も、大きなため息をつきながら、「あーあ、行ってしもた。ま、秋田に嫁にやると思えばええんやけど、何も秋田まで行かんでも。結婚の話はいっぱいあったのに……。杉本さん（私の後輩）、あんたは久美子みたいなことをしたらあきまへんで。親御さんが泣きまっせ」と釘を指していたそうです。

その一部始終を手紙に綴って送ってくれた彼女も結局、一年後に秋田行の新幹線にとび乗ってしまい、現在に至っています。ご両親に説得の手紙を書き送ったために、亡くなられたお父さんはずっと私のことを恨んでおられたとか。

今、私はその時の母親の年齢になりました。あのときの母親の本当の気持ちは……と思うと今でも胸が痛みます。現在は舞台を降り、アート・ボディ・コンディショニングという新しい分野の仕事をしています。わらび座の仕事もどんどん広がり、その中で思いがけず、教師をしていた時の教え子とも再会できました。二人ともわらび座の仕事に関わってくれていたのです。ついこの間も、スペインで通訳をしている子が夏休みを利用しての里帰りの折に秋田に立ち寄ってくれました。

今まで数え切れない人々との出会いの中でたくさんのことを学びました。人の生き方にこれというレールはない。何度もつまずいて、こけても、また歩き出せばいい。そういう道を選ばせてくれた両親に、本当に二人の娘に生まれて良かったと思っているこの頃です。

私にとっての故郷とは、父であり母そのものなのです。

常磐新線プロジェクト

谷口浩章（氷上町）

平成八年年始より常磐新線プロジェクト推進協議会事務局に出向しております。常磐新線についてご存じない方が多いでしょうから、近況紹介ということで常磐新線プロジェクトのPRをさせて戴きたいと思います。

常磐新線とは、東京、埼玉、千葉、茨城の一都三県を結ぶ全長約六十キロの新しい鉄道です。首都圏北東部地域の交通体系の整備、JR常磐線の混雑緩和、首都圏における宅地供給の促進、沿線地域における産業基盤の整備と業務核都市の形成を目的として、昭和六十年七月の運輸政策審議会の答申により建設が決まり、具体的には平成四年から事業がスタートしており、平成十七年度の開業を目指しております。

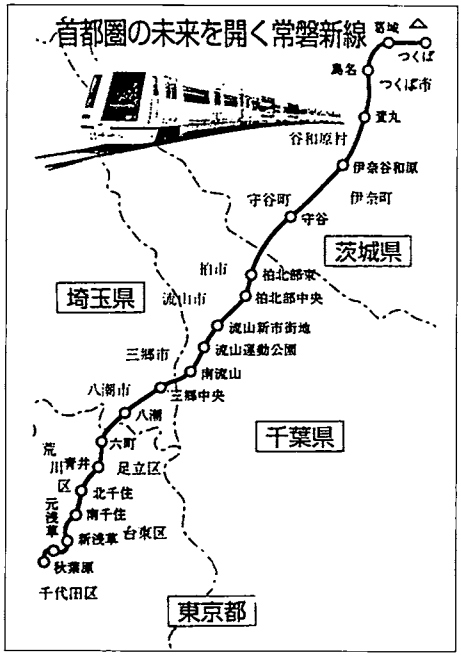
予定ルートは、東京の「電気とパソコンの街」秋葉原から浅草、北千住、青井、六町、埼玉県の八潮市、三郷市、千葉県の流山市、柏市を通り、茨城県の守谷、研究学園都市として有名な筑波までで、秋葉原ー筑波間を快速で四十五分（普通で一時間）で結びます。

鉄道の建設費は一兆五百億円で、うち約八割が国と沿線の地方公共団体による無利子貸付、約二割が一都三県を中心とした出資などで賄われることになっています。

鉄道建設――は、日本鉄道建設公団が担当し、完成後は、首都圏新都市鉄道株式会社（平成三年設立済み）が第一種鉄道事業者（JR東日本や東急電鉄等と同じ性格の会社）として常磐新線の鉄道事業（含関連事業）を行うこととなっております。

このプロジェクトの特徴は、まず規模の大きさです。約六十キロにのぼる現存の地下鉄などの延伸でない全くの新線であること、一都三県にまたがる鉄道であること等、大都市における鉄道計画としては、今後このような大規模のものは考えられないといわれています。また鉄道だけでなく沿線開発も含めた経済波及効果は二十兆円以上と試算されており、民活プロジェクトとして有名な関西国際空港、東京湾横断道路プロジェクトよりも大きいと言えましょう。

二つ目の特徴は、鉄道の整備だけではなく宅地開発も同時にやろうとしていることです。「大都市地域における宅地開発及び鉄道整備の一体的推進に関する特別措置法」（通称、一体化法）に基づいてスタートしたのが常磐新線プロジェクトで、具体的には一都三県、住宅都市



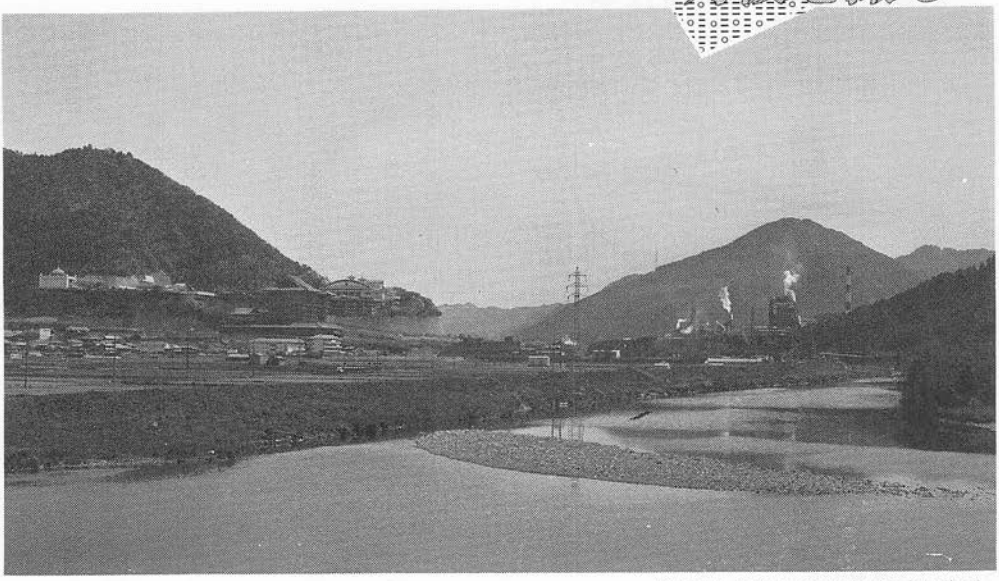
整備公団等などによる「一体型都市区画整理事業」により、道路・公園などの公共用地、住宅用地、公益施設用地、鉄道用地等を計画的に生み出し、鉄道の建設と住み心地のよい街づくりを同時に完成させることを目指しております。

「常磐新線プロジェクト推進協議会」は、平成四年から六年にかけて行われた、各業界を網羅した民間企業からなる「常磐新線プロジェクト研究会」メンバーを中心として、関連公共団体、地元推進団体、産業界各社を加えて平成六年六月に設立されました。会員数は、一都三県等十一団体、民間企業二百十四社の計二百二十五に加え、顧問として、鉄道、都市計画関係の学者先生、運輸省、建設省等の中央省庁、経団連、東京商工会議所等十三の団体、個人が名を連ねており、官民一体となって常磐新線プロジェクトの推進、支援を行うことを目的としております。現在、新線建設推進委員会、沿線開発推進委員会、広報委員会の三つの委員会を設置し、本プロジェクトを具体的に支援、推進するために、いろいろな課題についての調査・検討・提言・活動を行っております。

鉄道は、車等に比し公害の少ない、環境にやさしい交通手段であり、欧米では、近時その重要性が再認識されつつありますが、一方で、その膨大な建設コストから鉄道事業の採算性については厳しいものがあります（常磐新線も開業後約三十年で繰越欠損が消える計画）。常磐新線は既に東京、埼玉、茨城で工事が始まっていますが、何といっても息の長い大プロジェクトであり、関係者も多いだけに、計画通り出来るかどうか予断を許さないものがあります。

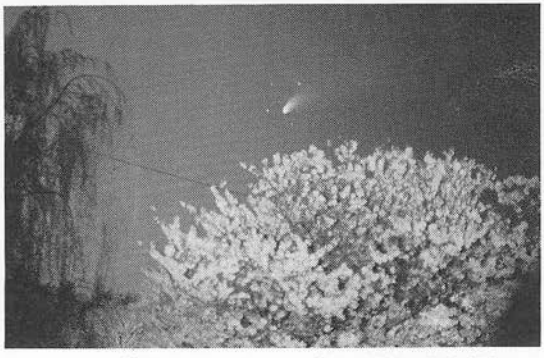
戦後五十年を経ていろんな制度、仕組みが問い直されております。過去にとらわれず、官と民がお互い知恵を出し合って常磐新線プロジェクトが計画通り実現するよう努力したいと思っております。

月波を撮る

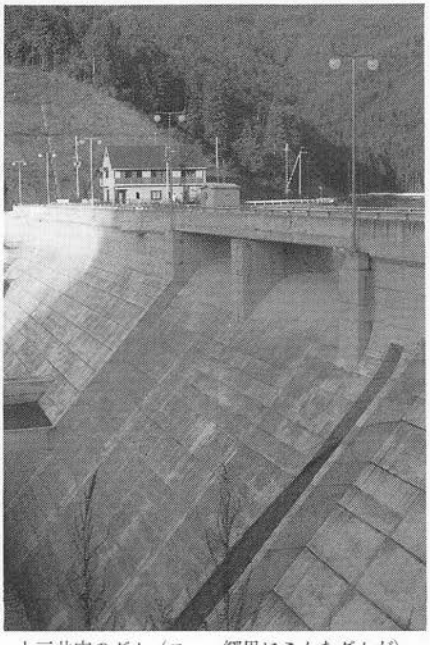


篠山川と佐治川の合流点（山南町井原）

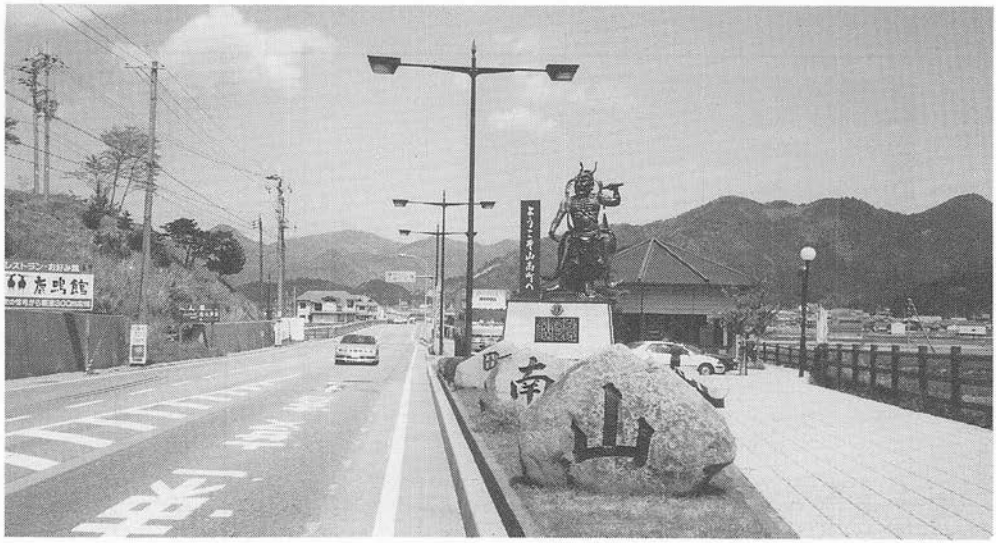
上滝の旧上久下村営の水力発電所跡



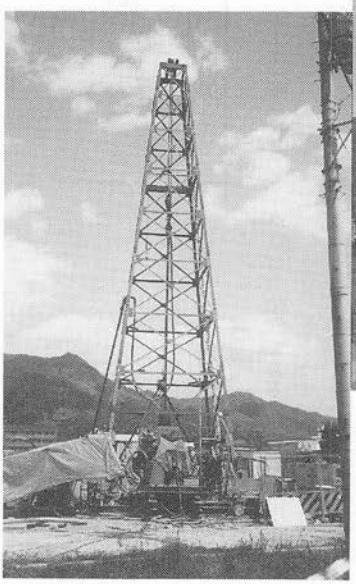
ヘールボップ彗星とライトアップの夜桜（山南町薬師堂前で、撮影：藤田勝彦）



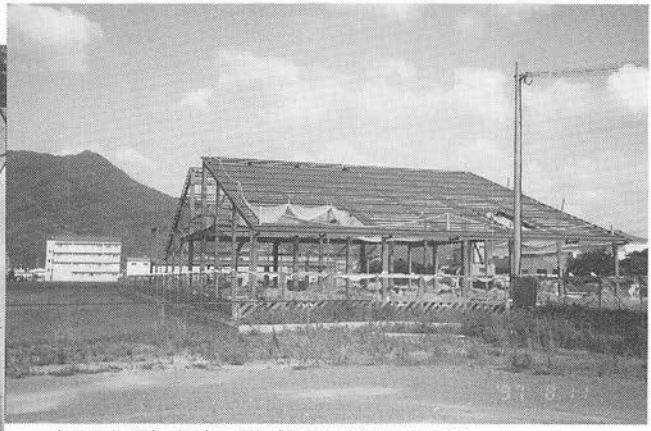
上三井庄のダム（エー、郷里にこんなダムが）



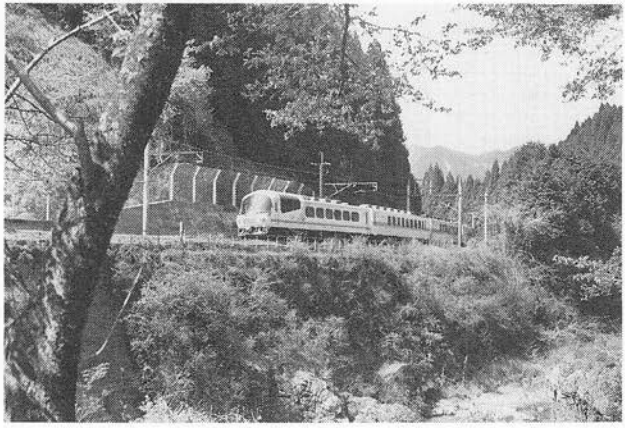
山南町（井原）の道の駅



出るかな温泉（9年5月）



来るかなお客（9年8月）柏原町田路バイパス沿い



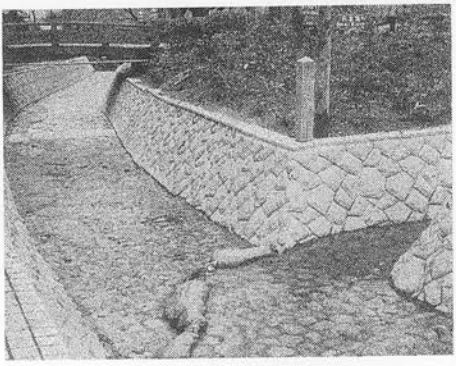
川代渓谷を行く上り列車（さらば故郷よ）

月波を撮る

撮影：徳田八郎衛

日本の分水界と水分れ

久保良雄（山南町）


石生の水分れ公園

◆石生の水分れ

わが兵庫県氷上郡の中で全国区的に知名度が最も高いものは何であるかと考えてみるとき、私は、石生にある水分れ（みわかれ）、すなわち、一番低い日本の分水界ではないかと思う。私が勤務する海上保安庁水路部は神戸に出先を持っている。そこに勤務した私の仲間たちの多くが、水分れを訪ねてきたという話を、その近くの出身と知っている私にしてくれる。しかし、それ以外には特段の話題はないのである。もっとも、海上保安庁水路部というところは海の地図である海図を作っている役所なので、そこには地理の好きな人種が比較的多く集まっているという事情はあるかも知れないのだが。

実は、私は氷上郡に住んでいた間、水分れの存在を知らなかった。当時は今ほど有名でなかったのだろうか、それともそのころの私の関心が狭い範囲に限られていたからだろうか。柏原高校のマラソンコースが正にその場所を通っていたはずで、高校時代に三度そこを走ったことになるが、そんなこととはつゆ知らずに走っていた。日本一低い分水界という意識をもってそこを訪れたのはつい十年ほど前の、ある帰郷の折である。

◆日本分水界

ここで、分水界の意味をはっきりさせておかなければならない。一般に分水界とは、そこに降った雨が隣り合う二つの川のどちらに流れ込むかを分ける境界線のことである。たとえば加古川と武庫川の分水界というものもある。しかし、本稿で言う分水界は、降った雨が太平洋（瀬戸内海を含む）に注ぐ川となるか、日本海に注ぐ川となるかによって決まる分水界のことで、本州を二分し、いわば本州の背骨に当たるものである。仮にそれを日本分水界と呼ぶことにする。こんな地理学用語はないし、本州だけしか考えないので少々正確さも欠くが、お許し願いたい。以下、それを単に分水界と言うこともある。ともかく、その分水界は青森県から山口県まで続く一本の線としてつながっている。そして、石生の水分れにおいて、それが最も低くなっているというのである。その標高は九十五メートルである。

ついでにさらに厳密に言うならば、その一番低い分水界というのは水分れ公園内の流れが二つに分かれているのが見られるところ（写真1）ではない。その西約一キロメートルの、石生駅の三百メー

トルほど南を東西に走る道路のあたりである。

これもよく聞かされる説明だが、もし海面の高さが何らかの原因で上昇し、日本沈没が起きたとして、一番最初に太平洋と日本海がつながり、本州が二つに分断される点がこの場所である。上の説明からわかるように、それは海面が今より九十五メートル高くなったときに起きる。

◆分水界の最高地点は?

このように、日本一低い分水界は石生にあり、そのことは全国的にかなり有名なのだが、それならば一番高いところはどこにあるのだろうか。富士山?とまず思うかも知れない。しかしそうではない。富士山は日本分水界上に位置しない。その証拠には、富士山の南側に降った雨が太平洋に注ぐのはもちろんのこと、北側に降った雨も、富士川、相模川などとなって最後はやはり太平洋に注ぐ。

ここで断っておくが、一番低いところと違い、分水界の一番高いところには地理的な意味はほとんどない。日本沈没の際に最後に沈む場所というわけではない。最後まで残るのはやはり富士山である。

しかしながら、一番低い分水界に縁のある人間としては、一番高いところについても知っておいて悪くはないだろう。ところが、そんなどうでもよい場所であるので、それがどこか書いてある本はなさそうである。ならば、自分で調べるしかない。

調べるといっても大したことをするわけではない。日本地図を眺めるだけである。以下に、ほんのわずかの苦労の末に私が調査した結果を報告するが、どうか日本地図を頭に思い描きながら読んでいただくようお願いする。地図を参照しながら読んでいただけるとなお有り難い。

◆分水界を辿る

(1) 八甲田山から谷川岳

北は八甲田山あたりから始まる。八甲田山を通過した分水界は南に下がってすぐ十和田湖にぶつかるが、その後どっちに向かうか。十和田湖から流れ出る水は太平洋に注ぐ。すなわち、分水界は十和田湖の西を通っている。

それから、やや東に折れて青森県・秋田県の境を少し走った後、秋田と岩手の県境とほぼ一致して南下する。続く宮城県と山形県の境では、分水界は県境と完全に一致している。蔵王山がここの分水界上にある。

ところが福島県では県のほとんど真ん中を通る。猪苗代湖の東に千メートル級の山々があり、分水界はそこを通る。猪苗代湖から発する水は阿賀野川に合流して日本海側に注いでいる。

次いで、福島県・栃木県、福島県・群馬県の県境上を進むが、一部、群馬県側に食い込んだところがある。そこには尾瀬がある。

それから、群馬県と新潟県の境については、分水界は最初から最後までそれと一致している。このあたり谷川岳(千九百六十三メートル)を含む峰々からなる。

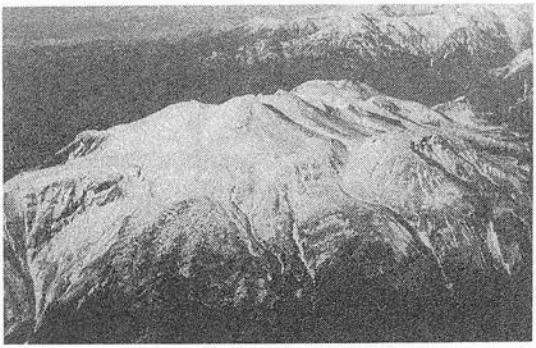
(2) 谷川岳から乗鞍岳

群馬県と長野県の境についても、ごく一部を除いて、最初から最後まで分水界と県境は一致する。碓氷峠を登り詰めて軽井沢への入口にあたる地点が、この途中にある。

それから、短い距離であるが埼玉県と

長野県の、次いで山梨県と長野県の県境沿いに走る。埼玉、山梨、長野の三県が出会うところは甲武信ヶ岳（こぶしがたけ、二千四百七十五メートル）である。

ほぼ山梨県と長野県の県境に沿ってやや西よりに進むうち、やがて分水界は八ヶ岳連峰の主峰、赤岳（二千八百九十九メートル）に達する。ここで、山梨・長野県境は八ヶ岳の縦走コースに沿って南に下がるが、分水界は逆に縦走コースを北に、長野県内を進む。



乗鞍岳――日本分水界の最高点

その後、西に折れ、諏訪湖のすぐ北を回り込むようにして西寄りに進み、長野県をほぼ南北に二分して、野麦峠の少し南で岐阜県との県境に至る。それから、長野・岐阜の県境に沿って少し北に進み、乗鞍岳（三千二百二十六メートル）に至る。そして、この乗鞍岳こそ日本分水界で一番高い地点なのである。

(3) 乗鞍岳から水分れ

長野・岐阜の県境に沿ってさらに北に行けば、穂高、槍と連なる北アルプス（飛騨山脈）となるのであるが、分水界は乗鞍岳から西に折れる。そして岐阜県の北部、高山のすぐ南を通って福井県との境に至る。このうち、西の方については美濃と飛騨との境界線に一致している。

その後は、岐阜・福井、福井・滋賀、福井・京都の県境と一致しながら西寄りに進む。そして、京都府の中に突き入り、園部と綾部の間を通って多紀郡の東端で兵庫県との県境に達する。

しばらく京都・兵庫の県境に沿って北西に進むが、折れ曲がって兵庫県に入り、多紀連山（多紀アルプス）、多紀郡と氷上郡の境界を進んだあと、氷上郡内に入り、そしてすぐに水分れを通過する。

(4) 水分れから下関

その後、氷上郡内を北上し、再び京都府との境界に沿って進み、今度は氷上郡と朝来郡の境に沿ってまた兵庫県の中を南西方向に進む。氷上郡の最高峰、粟鹿峰（九百六十二メートル）を通った後、朝来郡内を西に進み、生野を経て播磨と但馬の境界沿いに西に進み、鳥取県との県境に至り、県境沿いにさらに南西寄りに進む。

岡山県にぶつかるとその後は岡山県、鳥取県の境と完全に一致しながら広島県に突き当たるまで西に進む。

ところが、広島県と島根県の境については同じようには行かない。県境の六割から七割にわたって大きく広島県側に張り出すのだ。江川（ごうのかわ）という日本海に注ぐ川の流域が県境を越えて大きく広島県に広がっているためだ。

しかし、やがて広島・島根県境に戻り、そこを進むうち、山口県に突き当たる。それからしばらく島根・山口の県境沿いに、そして山口県の中を進んで、最後に下関に抜けるのである。

以上、日本分水界を端から端まで辿ってきた。その間には、名の通った地名も随分とあった。しかし、その中にあって、

わが氷上郡の水分れは特別な地位を占め、燦然と輝いているのである。そして、水分れと対をなすとも言える日本分水界の最高地点が乗鞍岳であることも判明した。

◆太平洋側と日本海側と

分水界は分水嶺というふうにも呼ばれる。私の中学の社会科ではそう習った。が、水が分かれるところは必ずしも嶺とは限らないので多分、分水界という方が正しいのだろう。現に水分れは嶺ではないし、上に見てきた分水界で嶺でないところはいくらもある。そういうところでは家や田畑があり人が生活していること石生と同じである。しかしながら、日本分水界は、たいていが山脈の尾根などで構成されている。分水界イコール分水嶺と考えてもそう間違いではなさそうである。

米大陸分水界に立つ筆者

一方、分水嶺という言葉には、日本列島を太平洋側と日本海側とに鮮明に分ける響きがある。日本列島のイメージをよく表現するという点ではこちらの方が勝れているように思う。そして、太平洋側と日本海側を分ける分水嶺の中でも代表的なところと言えば、谷川連峰や清水トンネルなどのある上越国境、つまり群馬県と新潟県の境が思い浮かぶのではないだろうか。

実は、私は昨年（平成八年）、東京から新潟に転勤となり、現在家族を東京に残し新潟市に単身赴任している。そのため、年に何回か上越国境を往復しているが、国境のトンネルを抜けるたび、山の両側の天候の対照的なことに深い感慨を禁じ得ない。こちらが晴れていればあちらは曇り、あちらが快晴ならばこちらは雪かどんよりといった具合である。

◆大陸の分水界

島あるいは大陸を二分する分水界は外国にもある。あるどころか、日本のそれよりもはるかに大きなスケールで存在する。中でも特に雄大なのは南北アメリカ大陸をアラスカから、ロッキー山脈、パナマ地峡、アンデス山脈を経て、チリの南端まで走っている大分水界である。一方の水は太平洋に、もう一方の水は大西洋に注ぐのだから、この点でもスケールが違う。

以前、米国を車で走ったとき、ロードマップにコンチネンタル・ディバイドというのが記載してある。すなわち米大陸分水界である。だから、そこを横切るときには注意して見ていた。標識が立っていたからそれとわかったのだが、その地点はまったくの真っ平らな場所であった。ハイウェイと鉄道線路が平行して走っている他には目に入るものといっては何もない、よくよく目を凝らせばやっと遙か遠くにうっすらと山が望まれるという、その地点の地形であった。

『青垣町誌』を読む

足立静雄（青垣町）

◆佐治郷から町村制へ

青垣地方は古くから佐治郷と呼ばれてきた。大化の改新で国、郡、里の制度が設けられ、奈良朝はじめの和銅六年に里を改めて郷とし、はじめて佐治郷の名が出ている。当時は国が六十七、郡が五百五十五、郷が四千十二、里は一万二千三十六。そして丹波の国は郡が六、郷七十二、里百九であった。

佐治郷は、延喜式（醍醐帝・九〇五）当時から宿駅として佐治の名が出ている。氷上郡誌にも「佐治郷の面積は郡中第一にして現今の芦田村、佐治村、神楽村、遠阪村の全部を含有せり」とあるように、はやくから一つの生活圏を形成していた。

大化の改新による律令国家の地方行政機構は、国に国衛、郡に郡衛を設けて、国司、郡司を置いたが、青垣地方の郡衛がどこに置かれ、郡司が誰であったかわかっていない。大化の改新の班田制度も長く続かず、貴族および寺院などの所領でもある荘園が土地制度の基礎をなすようになり、国司、郡司はみずから領主と称して土地を領有し、有力な農民もまた自ら土地を占有する名主となるなど、その頃の領主を知ることはできない。さらに武士勢力の台頭以後は、中央・地方を問わず物情騒然として、豪族がたがいに掠奪、闘争、対立を繰り返し、農民もまた、時には鋤、鍬をすてて、いわゆる地侍となって有力な誰かに属するよりほかない時代が続いた。

鎌倉時代より丹波の国守護や国司に任ぜられて、史上に名を出した人は多いが、それよりも直接的に青垣地方に勢力を張った足立氏、葦田氏の消息が、青垣地方に与えた影響は大きかった。

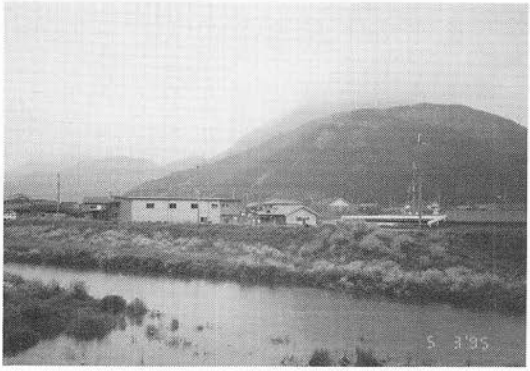
豊臣秀吉の天下統一が成ると、青垣地方は秀吉の領するところとなり、徳川時代に入ると氷上郷内は摩下領、藩領などが入り組んで行政区画は複雑混交した。明治元年（一八六八）王政復古、廃藩置県、明治二十一年町村制が実施された。こうして上代より行政的にも経済的にも、また精神的にも深いつながりをもって一体となっていた佐治郷を、行政的に一応裁断して同二十二年、佐治町、芦田村、神楽村、遠阪村の四町村となり、それぞれ独自の道を歩み続けてきた。

◆四町村の合併へ

終戦後、佐治、芦田、神楽、遠阪の四町村は、氷上郷の西北部に位置して郡山西北区と呼ばれ、地縁、人情、風俗などからみて、新しい街づくりのもっとも条件が整った地域と見られ、昭和二十九年一月二十七日、青垣町合併の瀬踏み的な連絡会議が佐治小学校で開かれた。町村合併は、時の問題となっていく。早かれ遅かれ自分たちの住む町、村にも何らかの働きかけがあることを予測し、住民にそれなりの未来図を画き、こうあってほしいという構想を持つ人が増えていた。また町村当局も合併は必至とみて、調査研究を進め、例えば「佐治町合併推進委員会」といった組織が各村にもつくられ、

住民に対して「合併をすればこういう利点があるが、また反面にはこんな不便もおこることが予測される。お互いにどう対処すれば良いか」と、問題を提起しながら住民の啓蒙に当たった。

氷上郡町村合併推進本部からは、全県的な合併の動きなどを知らせ、町村合併が時代の要請であることを訴えたパンフレットを幾度か発行したりした。氷上郡で最初に合併へこぎつけたのは春日、市島、青垣町で、外見からは快調に進行したように見られたけれども、産みの苦しみは大小の違いはあっても大きかった。ただ、生み出す者の心構えが大患を安産にしただけで、合併折衝が表面化してからは日が浅かったが、胎動の激しさは他町のそれと変わることはなかった。



青垣町の象徴である佐治川から大箕山を望む

青垣町域合併の各町の反応を確かめ合う第一回会議には関係町村の首長、議会、教育委員会関係者が集まり、氷上郡合併本部長である氷上地方事務局長等が助言者として加わった。以来年末までに五回の会議を開いた結果、合併の必要性が認められ、合併促進法に基づく合併推進協議会が昭和三十年一月五日に発足し、合併に向けて具体的な活動を開始した。

新町名の「青垣」はこの合併に際して全然予測されなかった町名であった。町名は町民から公募したが、応募数九百八件のうち、ただ一票だけの「青垣」が採用と決まった。新町の環境が四方に山をめぐらし、その美と幸につつまれた平和で文化の高い新生の町づくりを期待し、また象徴するものとして、合併推進協議会は種々協議の結果、選定した。

応募のなかでももっとも多かったのは「佐治」の二百三十四票で、歴史的にも知られ、新町の中心部となる佐治を、新町の名称に希望する佐治地区住民は相当あったが、他の三村の同調を得ることができず、裸で出直す新町の名にふさわしいとして「青垣」選定となった。

明治二十三年の村合併から六十五年を経て住民の愛着で築かれた歴史を閉じた佐治、芦田、神楽、遠阪の四町村はそれぞれ解町・村式を行い、昭和三十年四月一日を期して豊かな町づくりを目指し、ここに新生「青垣町」としてスタートを切った。

新青垣町は面積一千二平方キロメートル、人口一万一千三百五十九人、戸数二千二百二十四戸で、その八三％を山林で占める農村地帯ではあるが、主要地方道山東柏原線を基幹として阪神経済圏と北近畿を結ぶ要衝であり、自治体としての適正規模、内容を備えて将来の充実、飛躍が期待され、住民の希望と祝福を受けての門出であった。

昭和三十年四月に青垣町がスタートし

てからの十年間を新しい町の基礎づくり期とするなら四十年からは成長期、いわゆる育ちゆく青垣町時代とでも言えるではないか。それは前期の十年間は町村合併にともなう約束ごと＝合併協定＝によって、決められた路線を取り除きながら作っていかなければならない時期で、社会情勢も、経済的にはもちろん、住民のものの考え方にも変化の著しいときであった。続いて第二期ともいうべき町政が進められた。一応敷かれたレールではあったが、外的にはわが国の産業経済史の〝健康で明るい町づくりの意欲〟はそうした条件をよく克服し、足並みをそろえて独創的な建設譜を奏でたのであった。

昭和三十二年三月、町長は町議会に予算案とともに中学校統合案を提出した。統合案は佐治中学校へ吸収統合した場合には教育効果をあげるためには施設を充実しなければならないが、現在地には生徒数に対する必要な最小限の坪数があった。拡充しようにも国庫補助がもらえないなどの理由から、当時の柏原高校青垣分校敷地とグランド一帯の地域四、三六〇平方メートル（字をミズキという）を買収、新設統合中学校を建設しようとするものであったが、建設地をめぐって意見が対立し、前後四年におよび紛争を繰り返すことになった。

統合中学校はミズキに新設と決まり、議会に用地買収委員会ができて、所有者と折衝の結果、坪当たり一千円程度で買収見込みがついたものの、ミズキを不適格地とする反対意見が出たため町議会で経過報告と情勢分析をした。ところが神楽地区の議員が公式提案として、「ミズキを変更して校地を枚ケ端（現在の青垣中学校地）に変更する」ことを要望。その理由は①ミズキは土地が狭くて将来性に欠ける②ミズキでは新設統合中学校として国の補助認証の見通しがはっきりしない③一部で候補地にあがっている佐治石仏＝牛市場付近は、町の中心地点ではあるが、良田を潰し高地価が予想される④枚ケ端を採用されるなら買収費は地区が肩替わりしてもよいというものであり、その買収の可能性については検討済みで、総額三百六十万円が見込まれるという具体性を持ったものだった。

ミズキでの建設は再検討を余儀なくされ、議員協議会で意見調整を急ぐことになったが、神楽地区では育友会を中心に町へ段ケ端での新設要望書を提出し、遠阪、佐治地区へ同調を求めるなど積極的な働きかけを行ったことや、町の教育委員会から段ケ端を校地にすることが教育環境、将来性などを考慮すると優れていることを具申したことで校地は段ケ端に決定した。

この段ケ端に校地が決まったことに芦田地区民は憤激し、「町長の背信行為だ」と追及、また段ケ端反対の立場をとっていた佐治地区の一部でも芦田地区に呼応して町政は重大な危機に直面した。芦田地区選出の各公職者は辞表を提出し、町税は農業協同組合に預託、凍結した。このような情勢の中でミズキにしても段ケ端にしても、それを決めた手続きに問題があったではないか、という反省の意見が出てきたものの校地問題は二転、三転し、町長が引責辞表を提出するなど混乱が続いた。

しかし三十六年十月、中学校統合問題は解決した。すなわち、中学校統合問題は教育上重要な問題であるものの、町政

の全般から見たときは行政の一部分である。町の為政者はこの点に思いをいたして理論や面目にこだわって町政の将来に大きな災を残すことのないよう善処する。

このような考え方によって賛成派、反対派の双方が歩み寄り、理解ある話合いで円満な解決を図ることになり、段ケ端を校地として青垣中学校は三十六年十二月起工、三十九年四月まで足かけ四年かけて完工した。

◆無形文化財「丹波布」

次に民俗面から青垣町を見ると、青垣町桧倉にある高源寺は三丹一の紅葉の名所として知られ、秋の好季ともなれば遠近より観楓で賑わう同寺はこの地方一帯を領した山垣城主、足立遠政の孫遠谿禅師の開山である。遠谿は幼くして仏法に帰依し、齢十三歳の時、屋敷後ろの老松の下で座禅を組み、十九歳で出家した。徳治元年（今から六百五十年前）二十一歳の時、元の国杭州天目山まで渡って中峰普応国師に師事した。国師は遠来よりはるばる来航した遠谿の求道心に心打たれた。彼の優れた法器を賞嘆し、ねんごろに法を説き道を教えたので、求道一心の遠谿は遂に大法の蘊奥を究めることができた。その頃、故郷の母からの便りに、「毎夜山の岩穴から光明が射して観世音が現われたまい、この山に梵刹を建てよとの夢のお告げがあったので早々帰国して一寺を建立せよ」

とあった。奇しくも中峰国師もまた同じ夢を見たので、国師は早速遠谿を召して「三夢一如である、早く帰国するがよかろう」と諭したが、遠谿は国師と別れるに忍びず、元の延裕三年になって遂に帰国を決し、故郷に帰り瑞岩山高源寺を開基、時に正中二年のことであった。

さらに国の無形文化財の丹波布は往古から青垣地方で片手間として織られ、縞緯（しまぬき）、縞貫、またの名を佐治木綿と呼ばれていたものが染織工芸品として、その価値を見出され、「丹波布」と名付けられ、昭和三十三年三月、国の無形文化財として指定された。丹波布を形造っているのは素材、技術、意匠の三つであるが、これはどの織物でもそうであるが、その地方の天然資源に頼るしかないし、また独特の風土に影響されることが大きい。これは技術や意匠の蔭になっているが見逃してはいけない大切なことである。原糸は綿の手紡ぎで、紡績糸は一切用いない。さらに緯には少量のつまみ糸は絹糸で、すべて屑繭を使う。

こうしたつまみ糸を用いる例は全国でも極めて稀である。次に染色であるが、天然の草木染めで、化学染料は一切使用しない。色調は大別して茶と藍であるが、藍系統は、紺屋で淡いものは、かめのぞき、または白ころしから浅黄、織色、納戸、紺など数段階に染め分ける。茶は焦茶、赤茶なども数段階に染色して藍染糸と適当に配合して縞柄を好みに応じて機（はた）にかけてつくった。

最近はいろんな工芸品が文化財に指定されて、人目は晴々しいが、華美に流されて後退して行った例は多い。それよりも静かに見守っていくべきであるし、後継者を早急に考えるべきではなかろうか。幸い丹波布は保存協会があって、良き指導者の協力を得て熱心に技術向上と伝承のために努力しており、また多くの町民の中にも丹波布を保存しようという声が高まっている。

丹波黒井城の姫君たち

前田武彦（春日町）

郷里を出てもう四十年近くが過ぎようとしている。盆と正月には出来るだけ帰省するよう心がけ、車を駆って東名、名神、中国道をヒタ走る。吉川から北に折れ、丹波トンネルを抜け出ると、雨上がりの時には、まるで水墨画のような景色が眼前に展開する。春日インターに降りると、丹波黒井城跡の城山が迫ってくる。

私は、数年前に帰郷した時、郷土研究誌の「丹波史」に掲載された母の手による標記の文章を読んだ。

戦国の世、斉藤利光の子としてこの黒井の山間の盆地に生まれ出でた『お福』が、徳川三代将軍家光の乳母、春日局となったことは有名である。

同時期、もう一人黒井出身の女性、准后中和門院前子の母で、波多野総七の娘、法寿院の存在を知る人は少ないのではあるまいか。中和門院前子は後陽成天皇の女御で後水尾天皇の母となった人である。

丹波黒井で出生した〝お福〟は、東は江戸城の大奥にあって春日局となり、もう一人の女性法寿院は、西は京都の御所で国母となり、二人の女性は東西に屹立し権勢を振るったのである。

以下は、その丹波の姫君の話である。

＊　＊　＊

平成三年秋、春日町では「自然と文化」をメーンテーマとする、恒例の百日文化祭が開催されたが、その一環として、町文化ホールに於いて、東京大学史料編纂所助教授橋本政宣氏の、「近衛家と丹波」と題する歴史講演会が催された。お立場上、一般人には入手し難い資料を駆使してのまことに貴重なお話であった。

併せて、町歴史資料館では、京都陽明文庫に収蔵されている近衛家重代の夥しい名宝や古文書のうち、春日町にかかわりのあるものが貸し出され、展示されたのである。それらを見学して私の最も印象に残ったのは「朝聞道夕死可矣」と墨痕あざやかに大書された近衛前久筆の一幅であった。その書からは長袖に薄化粧したひ弱な公卿の姿とは全く異なる雄勁で、行動力に富む人物像がイメージされるのであった。近衛家と春日のかかわりはこの人が戦国争乱の世、黒井城の赤井氏を訪れたことから始まる。

黒井の町並みの北側には四方に尾を引いて、どっしりと城山が聳える。この山は建武の昔、赤松貞範が山城を築いたが、時移って戦国時代の終わりの一時期、奥丹波に覇を唱えた勇将、赤井直正が本拠の黒井城を構築したところである。その城山の南麓、黒井の町並みと周辺の豊かな田園を一望するところに、城主の一家が日常の生活を営む下館があった、現在は興禅寺の寺域となっている。その興禅寺は正面に濠を構え、濠の見事に積まれた高い石垣の上には白亜の塗塀が設けられ今も小城郭の趣がある。

濠に架けられた石橋を渡って山門をくぐれば、中は閑静な禅宗の寺院である。正面の本堂の左には泉水があり、その周辺の空き地には、赤井氏の勢い盛んなる頃、近衛前久が度々訪れ、また長期に滞

留した近衛屋敷があったとされる。尚、天正七年八月九日、黒井城が落城した時の寄手の大将明智光秀の重臣、斉藤利三が城代として、天正九年の終わりまでここに住み、天正七年秋、娘お福がここで誕生したとの伝承がある。お福とは、徳川家光の乳母として周知の春日局となった人である。

興禅寺から黒井小学校の前を横切り、山裾を西へ進むと、日本女子高校バレー界の強豪として盛名を馳せている県立氷上高校がある。その隣の森には近衛前久の嗣子として、近衛屋敷で誕生した信尹が産土神として崇敬した式内社兵主神社が鎮座し、又その隣の山裾には稲塚の小集落がある。興禅寺から稲塚までの距離は約一キロメートル程である。

ふしぎな縁によって、近衛前久と結ばれ、その嗣子信尹を生み、後に法寿院、または宝樹院と称された波多野総七の娘は、天文三年この里に生まれた。名前は不詳である。

永禄三年五月、上洛途上の今川義元を桶狭間に打ち取ってより、近隣諸国を切従え「天下布武」のスローガンのもとに、強引な戦略を押し進める織田信長の行動に危機感を抱いた諸国の大名や、大寺院、堂上方は反織田勢力の結集を図りつつあったが、五摂家の筆頭近衛前久は関白の身でありながら、その工策に係り、活動の途上、黒井城の赤井氏にも逗留するようになり、次第に直正とも意気が合うに至ったと思われる。そして永禄六年、前久はその妹を直正に託する。この姫は恐らく、以前、越前の朝倉義景に嫁し、子無きため不縁となった人であろう。赤井家では直正の父、時家とその孫忠家が姫を迎えるため、京都の近衛邸に伺候する。この年、前久二十八歳、直正三十五歳、姫は二十五歳前後であったと思われる。赤井家に輿入れした姫は大切にされ、まもなく女子が誕生し、後に男子も誕生する。

この頃、都は争乱の極にあった。前久のイトコにあたる十三代将軍足利義輝が、松永久秀、三好三人衆に弑せられたのである。

赤井氏は姻戚となったこともあって、都の戦乱を避け滞留する前久に屋敷を提供した。これは後に、近衛屋敷と呼ばれる。この地で前久は一人の女性と知り合いロマンスが芽生えた。この女性は、稲塚の豪士波多野総七の娘である。永禄八年十一月一日、赤井氏の手厚い庇護のもとに、近衛屋敷に於て、この女性を母として前久の嗣子信尹が誕生する。赤井の姫の誕生とあまり変わらない時期であろうと思われる。

亡ぼされた足利義輝の弟で一乗院の僧正だった義昭は還俗して将軍職の復活を図り、信長に協力を求めたが信長は応諾し、第十五代将軍としてこれを擁立した。然しイトコである義昭と仲違いした前久は、永禄十一年、都から出奔し、関白職を停止された。

怒った義昭は、前久の屋敷を取り壊し、将軍地蔵山城の再建の資料としたという。

「公卿輔任」には「元亀四年癸酉前左大臣従一位近衛藤前久三十八前関白。御在国（丹州）」と記されている。そして天正三年、漸く静謐を取り戻した都から、黒井城の下館内、近衛屋敷に滞留する前久の許に、三月二十八日、迎えのため島津家の家臣が派遣される。織田軍の丹波攻めが始まろうとしていた頃である。何故か前久は三ヶ月も後の六月二十八日、

ゆるゆると帰洛している。

同じくその年、後に後陽成帝の女御となる前久の娘、前子が誕生している。

天正十四年七月、次期の帝となるべき誠仁親王が急に薨去されたので、その父第一〇六代正親町帝は、誠仁親王の皇子である和仁親王に譲位され、和仁親王は十一月七日践祚し、第一〇七代後陽成帝となられる。そしてその年の暮の十二月十六日、藤原前子はこの帝の女御として慌ただしく入内する。数え十二歳であった。宮中の様々な儀式や行事の必要にせまられてのことであろう、帝はその時十六歳であった。

後々のお二人は五人の皇子と五人の皇女を儲けられる。その中の一人政仁親王は慶長十六年三月践祚して第一〇八代後水尾帝となられ、第四皇子は信尹の養嗣子となり信尋と名乗られる。国母となった女御前子の父前久と、兄の尊勢と信尹は准后の位を贈られる。名門中の名門近衛家に更なる栄爵をもたらしたわけである。女御ご自身も元和六年准后中和門院となられる。

准后（じゅんこう）又は准三宮（じゅんさんぐう）とは、昔皇族、宮妃、外戚、または名臣などを優遇するために設けられた資格、太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮に准じて年給を賜った人々である。（広辞林）

そして後水尾帝の皇子女四人までが次々と帝位に即かれる。第一〇九代明正、第一一〇代後光明、第一一一代後西、第一一二代霊元の帝たちである。

このうち明正は女帝で皇后徳川和子を母とされる。ものの本によれば、中和門院前子は父の名を近衛前久と書かれているが、母の名は書かれていない。これは母が名門の出身でなかったためであろう。

それでは、赤井直正と、近衛家出身の奥方との間に生まれた姫であるが、長じて大和の古市播磨守に嫁し、北野盤舟院とおちゃちゃが生まれる。おちゃちゃは、興福寺一乗院、落隨法山に嫁し、円満院、実相院が生まれるが、夫法山に先立たれ、母のイトコに当たる女御前子に仕える。そのうち三位局、大和殿と称され、後陽成帝の寵を得て道晃親王と二皇女を儲ける。即ち三位局大和殿は赤井直正の孫に当たるわけである。けれども名前は清原胤子（清原胤栄ノ女、母は近衛前久ノ女）となっている。昔の女性の名前や身分はいろいろと便宜がはかれるらしく正確には分かりにくい。

さてもう一人の黒井城にまつわる赤井系でない女性、斉藤利三の娘お福は春日局となり、江戸城大奥で並びない権勢を振るうことになる。

以上が冒頭の橋本氏のご講演を基に、丹波史、丹波戦国史を参考にしてまとめた黒井城にまつわる女性史のあらましである。

以前より私は、中和門院前子は兄信尹と同腹ではあるまいかとの疑問を持っていた。ためらった末、思い切って、さきの橋本氏に手紙を書きお尋ねしてみたのである。するとボールを打ち返したように早速、次のような要旨のご回答をお寄せ下さったのである。

「……中和門院（藤原前子）の御生母のこと、信尹の生母と同じ方と考えてよいと存じます。前久室は、家女房で武田氏女、信尹、前子は、この所生で寛永七年八月二十日に死去のことが「孝亮宿祢日次記」寛永七年八月二十三日条に見えて

います。九十七歳とありますので天文三年生となります。法寿院といい、別の本では宝樹院ともあります。信尹は永禄八年十一月一日生まれ、法寿院三十二歳の所生、前子は寛永七年七月三日五十六歳で死去につき、天正三年の出生、従って法寿院四十二歳の時の所生ということになります。

陽明文庫には「政所」宛の前久消息が沢山ありますが、この政所こそ、法寿院その人のことではないかと思っています。前久の伝記は近いうちに書きたいと思っています……」

とあった。橋本氏は、近衛前久の伝記を執筆なさる由なので、前久の魅力的な人物像と共に、注目する政所宛の前久消息の内容もいずれ明らかにされることであろう。ふるさとの者としては興味を以て待たれるところである。

四百数十年の昔、黒井城に住み、またそこで生まれたであろう女性達、法寿院とその娘前子、直正の娘と、孫娘おちゃちゃ、それに春日局ら五人は動乱から安定期への約半世紀のほぼ同時代を生き、それぞれ稀有の栄達を遂げたのである。姫君たちの花のかんばせは知るよしもないが。

中でも、東の春日局と西の法寿院はその最たるものであろう。春日局の三代将軍家光への献身はよく知られているけれども、法寿院もまた、当主前久の不在がちな近衛家の内政を整え、中和門院の強力な後ろ盾として、また、一門への配慮など、並々ならぬ献身があったものと推察される。

そして寛永七年七月三日、実の娘の中和門院前子が五十六歳で歿するや約一か月後の八月二十日、この世の重荷をおろしたように九十七歳の生涯を閉じる。然し乍らふるさとの人達は法寿院の生涯についても何も知らされていない。

今、城山の静かな山容を仰ぎながら、私は思うのである、黒井とは不思議な所である、尚不思議なのは人の運命を織りなす人と人との邂逅であると。

（平成五年一月）

あとがき

橋本政宜氏は、平成六年三月出版の、東京大学資料編纂所研究紀要第四号「関白近衛前久の京都出奔」において、前久の永禄年間より天正年間にかけての丹波での動静についても詳しく調査し、発表されております。

平成元年、黒井城跡を含む城山一帯は国の重要史跡に指定されました。これは郷土の有志達の調査によって、中世の山城の遺構がよく保存された城跡であることが判明したのがきっかけとなりました。

また天正七年八月九日は黒井城落成の日ですが、この日に因み一日遅れですが、昨年から八月十日が「お城まつり」の日と定められました。当夜は城山の頂上がひかえ目にライトアップされましたが、落城の日の有様を偲び懐古の情を誘われた人も多かったことでしょう。

織豊前期の短い期間、この城に住んだ赤井家や近衛家に係る女性たちと、その姫たちは落城ののち、それぞれきらめくような女性史を展開します。私はこの知られざる郷土の女性史を明らかにする人達が現れることを期待しております。

（前田球乃）

ふるさとの祭り

その2

市島の十日恵比寿

福知山線市島駅の西側の丘陵一帯は西山と呼ばれている。道理で近くには、郷土名酒の製造元「西山酒造」もあるし、西山という姓の家は多い。氷上郡内の著名な名字には、足立や芦田のように特定の地名と関係づけられるものが少なくないが、その多くは遠隔の地で、郡内の地名と連携するものは少ない。その中で、この地域の「西山さん」や春日町の「野村さん」は、職住接近ならぬ名住接近の珍しい例である。だが吉見村史では「円山」となっている。

その西山の高台に建つ恵比寿（夷）神社は、「市島の十日恵比寿」の名でよく知られ、昔から毎年一月十日の例祭には地元の旧吉見村はいうまでもなく、郡内の山東北区、すなわち旧前山村、竹田村、鴨の庄村、美和村さらには山東南区の一部である旧春日部村や大路村からも多くの参拝者が列をなしたという。なにしろ駅のすぐ裏手だから、黒井や柏原、そして福知山方面からの列車利用の参拝者にも事欠かない。

だから「露店が参道を埋め、その賑やかさは決して柏原の厄除祭に引けを取らなかった」と地元の古老が懐かしがるのも決して誇張ではあるまい。ただ念のために書き添えると、参道の幅も距離も柏原の八幡神社には比べ物にはならない。

そして車社会になった今も、前日の宵恵比寿から当日の本祭りにかけて、一刻たりとも参道や境内から参拝者の姿が欠けることはないという。成松や佐治にも恵比寿神社や恵比寿祭があり、「商売の神様」として人気を集めているが、参拝者の数ではこの市島恵比寿には敵わないようだ。

ところで、柏原の厄除神社も八幡神社の、いわばテナントだったが、この恵比寿神社（祭られているのは事代主神）も神明神社（祭られているのは天照大日霊命、アマテラスオオヒルメノミコト）のテナントだ。どちらも以前は市島駅のやや北方の、現在公民館が建っている辺りにあったという。阪鶴鉄道の建設に伴い、そこから現在の西山の丘に移ったのが明治三十一年とされている。

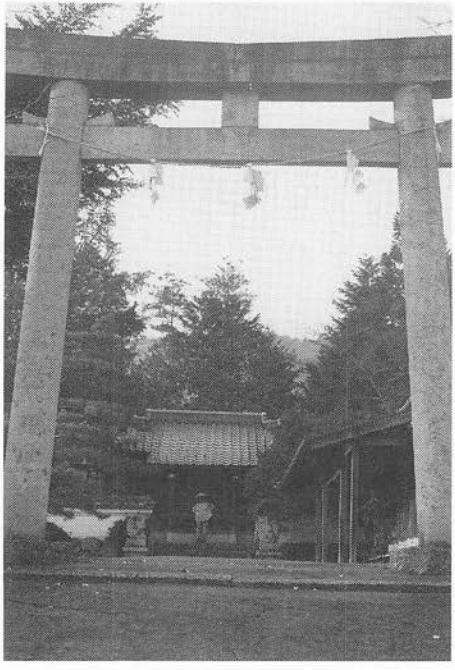
来年はその移転百周年だが、明治六年に作成された地元の地図では、その旧所在地は神社ではなく「神地」と記されているので、すでに眺望の良い現地へ移転していたのではないか、明治三十一年は、その大改造の年だったのではないかと推定する人もいる。

そう古い建物もない境内だが、石灯籠に刻まれた献納の年は文化元年（一八〇四年）である。おそらく旧境内か

ら移転されたのであろうが、こんな展望の良い高台へ移って、むしろよかったのではないか。なお主神は尚武の神様ではないが、社殿の左側には直径五〇センチに満たない、恐らく歩兵砲弾と思われる弾穀も奉納されている。

柏原町出身の小生が、この小さい神社を愛して止まないのは、福知山市の北方の、大江山で有名な大江町が誇るもう一つの民族的遺産、元伊勢神宮から豊受皇大神の御霊が伊勢へ向かう途中、この神社で一泊したという伝承があるからだ。しかし信頼できる文献に記載されていない口碑なので、教育委員会などが作成するパンフレットや書籍には触れられていない。

小生は、かつて当神社の麓でそれを記した掲示を見て大いに感激した記憶があるが、当地に住む旧友に問い合わせてもそんな掲示はどこにもないとのことである。



十日恵比寿の祭礼が行われる神明神社

だが、元伊勢神宮から奈良県方面へ向かう一日行程の宿泊地としては、市島周辺は実に適切である。大和朝廷の権威が丹波・丹後の豪族に及び、彼らの守護神であった元伊勢神宮（とは当時は呼ばれなかったであろうが……）の御霊さえ大和朝廷の下へ招聘もしくは拉致される時代である。御霊の宿泊地跡に神社が造成され、その主神が大和朝廷の守護神、天照大日霊命となるのも極めて自然な話である。

この市島町界隈は、古代の氷上郡では実に開けた地域だった。鴨神社にしても平安時代ではなく大和時代から朝廷とご縁があるし、仏教伝来後となると三ツ塚遺跡や神池寺という雄大な遺産もある。戦国丹波や織田の殿様だけでなく、神代の頃の丹波ももっと解明したいものである。〈徳田八郎衛〉

馬頭観音

「柏原の民話とうた」より

昔々、東奥は村雲の里と呼んでいて、豊かな村でした。しかし、うち続く戦のために村人達は、心の休まる日とてなく、おびえながら暮らしていました。そんなある日、この辺を治めていた殿様が、「わしの館も、いつ何時、敵に攻め立てられて焼き討ちに会うかもしれない。そうなったら、わしの家に先祖代々大切に祀っている観音さまが災難にあわれんともかぎらぬ。それでは勿体ないし大変じゃ。この際、お前達の村で祀ってはくれまいか」と木造りで金塗りの三十センチばかりの観音さまを持って来られました。

村人たちは、殿様のお頼みじゃというので、立派なお堂を建てて祀ることにしました。

何しろ金ぴかの観音さまです。お彼岸やお盆のお祭りには、近在から大勢の人がお参りして、大そうな賑わいでした。ある秋の日、いつもお参りする近所のおばあさんが来て、お堂の中を覗いてびっくりしました。日頃お堂の中で、ぴかぴかと金の光を出している観音さまのお姿が見えぬではありませんか。

村中は大騒ぎになりました。何しろお殿様から預かって、お祀りしている大切な観音さまです。村人たちは八方手を尽くして捜しましたが、どうしても見つかりません。

それから十日ほどたったある日、庄屋さんが村中をかけ回りながら、「おーい、あったぞー、観音さまが帰られたぞー」と叫びました。どれどれと村人たちは、庄屋さんのもとへかけ寄りました。庄屋さんは、観音さまの帰ってこられたわけを、こう話しました。

「昨晩おそく、うちの前でひそひそ話が聞こえるので出てみると、見知らぬ男と女の旅人が立っているので「何じゃ」と聞くと、おそるおそる持っているふろしき包みの中から、観音さまを取り出すではないか。びっくりするやらほっとするやらじゃったが、二人が泣きながら謝って話すには「悪いことは出来まへん、罰があたったんです。……私は、程遠くない村の小作人でっしゃが、今年はさっぱり出来が悪うて、この分では年を越すことも出来ません。思いあぐんで、日頃豊かな村じゃと聞いている村雲へいったら何かよいことがあるじゃろうと来てみたところ、いづこも同じ秋の空。それでも何とかせなあ

かんと思いながらとぼとぼ歩いていると、道ばたにお堂があって、中から後光がさしとりました。覗いてみると金ぴかの仏さま。悪いとは思いましたが、これこれと、仏さまを取り出し、逃げるようにして持って帰りました。ところが持って帰る道すがら、だんだん足が痛んできて、家にたどりついた時には、どうにもならずころげ込みました。「お前さん、どうしなはった」と女房が聞くので、これこれしかじかとありのままを話したところ、「お前さん、そりゃきっとこの仏さまの罰が当たったんでっせ。早う返しにいきなはれ」と言います。「早ういきなはれ」というたかて、だんだん痛うなるばかりで、転げ回る程苦しいんです。それからの数日は、うんうんうなりながら夢中でした。やっと今日、痛みが少し取れてきたので、女房にかかえられて、足を引きずりながら返しにきたんだす。ここまで来るとまた痛み出して、どうにもなりません。お宅へお願いして返してもらおうと、もじもじしとったんです」と言うんじゃ。

わしは早速、観音さまを受け取って、お堂へ帰ってもらった。すると、わしのうしろに先の二人づれが立っとるじゃないか。わしはびっくりして、「何じゃ、お前は歩けるじゃないかい」というと、「いや、今さっき、急に痛みがのうなって、こうしておわびに参りにきました」と言うんじゃ。これはきっと観音さまのご威光じゃと思ったな。悪いことは出来んて」と。

夫婦のお百姓は、何べんも頭を下げながら帰っていきました。庄屋さんは、「観音さまも帰られたことだし、許してやったのだが、この観音さまはきっと足の病に効く不思議な力をお持ちに違いない。これからは、もっと大事にお祀りせにゃならんぞよ」と言いました。こんなことがあってから、うわさは広まって、足の痛い人がたくさんお参りする馬頭観音さんとして有名になりました。今も東奥にまつられているのです。

（昭和五十九年発行『グループふるさと』の「柏原の民謡とうた」より転載）

〈木呂子恵美子〉

〈皆様にお願い〉

「ふるさとのこんな民話や伝説を知っている」という方が居られましたら、おたより頂きたいと思います。

「ひかみ」市への合併運動

小田晋作（柏原町）

ひかみ青年会議所（ひかみJC、古川直樹理事長）が中心になって、七月に「氷上郡六町合併連絡協議会」が発足しました。「ひかみ市」実現に向けて運動を展開する目的で、任意の組織ですが、各町に法定の協議会が設置されることをめざし講演会などを盛んに開いています。

私は立場上、運動体にどっぷり入ってしまうことは避けなければなりませんが、「今や市島だ、山南だ、と言っている時代ではない」と単純に思っており、一定の距離を置きながらJCの人たちから相談を受けたり、自ら講演させてもらっています。

隣の多紀郡では、すでに九九年春の四町合併をめざして、行政レベルでの合意が着々と進んでおり、氷上郡でもこれに触発されるところは大きいでしょう。

しかしながら私の見るところ、氷上ではまだ十年はかかるかも知れません。青山藩の篠山が歴史的にも地形的にも大きな求心力を持つ多紀に比べ、氷上では水系さえ日本海側と瀬戸内側に分かれ、歴史的にも分割統治され、各地域が良くも悪くも張り合ってきたからです。

JCが合併のメリットとして主張しているのは、職員数の抑制や公共施設の合理的な配置など財政が効率化され、それによって大規模事業が可能となって、地方分権の受け皿になり得る、ということです。

確かに、それはその通りと思いますが、この指摘が住民にはなかなかピンと感じられません。六つの町がそれぞれに立派なホール、図書館、グラウンドを備え、「このままでええやないか。合併したら中央部だけが良い目を見るだけや」という気持ちこそあれ、現在の財政難がやがて深刻な問題になるという危機感は希薄だからです。

はやり言葉となった「地方分権」も、まだまだ上滑り。本当に分権を進めるなら、税金そのものを国から自治体に奪い返す闘いをし、あくまで自分の責任で行政を進めるのが筋のはずですが、実際には「県や国に陳情して補助金をもらっている方が楽」というのが、丹波に限らず、全国市町村一般の偽らざる気持ちでありましょう。

ですから合併協議会に参加している町議らの数もごくわずか。七月の設立総会には確かに、町長や議長が顔を見せましたが、それっきり。多分、記念講演に来た国会議員や自治省のお役人への義理立てだったかと思われます。

丹波通信

「大池に石は投げ込まれた」（古川ＪＣ理事長）という「ひかみ市」への道はまだまだ険しそうですが、ここで気をつけなければならないのは最近、中央の方から合併を推進する声が強まっていることです。

九月に同協議会で講演した松本克夫・日本経済新聞編集委員（東京本社地方部）は、「地方分権には『地域の本来の自治を確立しよう』というのと、『行政効率化により中央政府をスリムに』というのと二つの流れがあり、橋本政権下では後者の方に傾きつつある。大都市から地方の町や村へ行っている金を取り戻すための手段として、市町村合併が使われる可能性もある」と警告しました。

7月12日に開かれた「六町合併連絡協議会」設立総会

昭和三十年の時のように全国一斉、有無を言わせず合併させるというようなことは繰り返されないまでも、「国の意向に沿った合併」というのでは面白くありません。

松本氏の言う〝前者〟の流れ、を定着させるには、やはり、地方分権にふさわしい自治体作りが必要です。そのためには、今の日常の行政がより透明になるよう、議会がその機能をしっかり果たすよう、住民が常にチェックすることを心掛けることが大切です。

協議会の活動が、ただ合併を至上目的とするのでなく、自治の足腰を鍛練するきっかけになれば、と思うのですが、これは見当はずれの期待かも知れません。

松本氏は「東京に、出身地の田舎と（縁が）切れてしまった人が増え、『（暮らしにくい）東京にこそもっと道路や地下鉄を作るべきだ』という声が強まっている。都会の田舎バッシングが始まった」とも指摘しました。

丹波と切れてはいない『山ざる』の読者の皆さんが〝岡目八目〟でもって、様々なネットを通じこの問題にアドバイスして頂くことを願ってやみません。

（丹波新聞社社長）

■会員が書いた本

社会保障のあり方を追究

坂本重雄著「社会保障改革―高齢社会の年金・医療・介護」

目前に迫った21世紀は、人口の一七％以上を六十五歳以上で占める「超高齢社会」が確実にやってくる。その備えはできているのか、個人的な努力だけではどうにもならない問題を含んでいるだけに、国家の行き届いた社会保障政策に期待するところ大であるが、この九月から医療費の患者負担が引き上げられたところなどをみると、財政難を理由に国民の自己負担を増やしていくことに、国の方針があるようにも見受けられる。

この本は医療・年金・福祉政策の専門書ではあるが、「社会保障改革」と表題にあるように、高齢化社会に向けた国の施策が財政負担増や経済効率の面から「負の論理」で進められていることに対し、高齢者や女性の労働力の活用などの雇用政策、高齢者が安心して住める住宅政策など総合的な観点と施策により、21世紀にむけた社会保障制度の改革と提言を行っている。

著者の坂本重雄さん（柏原町出身）は、三十二年間にわたり静岡大学で教鞭をとり、名誉教授に就任してのち、昨年定年退職し、現在は専修大学法学部教授として社会保障法の講義を行っている。労働法の専門家でもあり、この著書は、その両分野の研究成果として生まれたものであろう。

〈編集部〉

（A5判一八〇頁・本体二七〇〇円・勁草書房刊）

「異文化理解」をテーマに

上高子著「子育てのあとにアメリカがあった」

子育てが終わった後の長いセカンドライフをよく生きたい。常々そう願ってきた女性が「異文化理解」というライフテーマを見つけ、そこに自分の可能性を広げようとチャレンジした……これはその記録である。

著者（氷上町出身）は航空会社を四十五歳で退職後日本語教師となり、その傍ら留学生の世話をするボランティア活動を続け、異文化理解にかかわってきた。そして「もっと何かを」との思いが、五十歳になる一九九四年夏、アメリカで日本語を教えるプログラムへの参加になり、一年間単身でインディアナ州に滞在した。

この本には、その間異文化接触の現場に身を置いて体験し、考え、学んだ多くのことが、文化比較を切り口に歯切れの良い文章で活写されている。日本語や日本文化についてアメリカ人から次々に発せられる、日本人には当たり前なるが故の難問、ホームステイ先で出会った人たちとの率直な話し合い、日常の出来事の中に見るアメリカ人の反応や対処の仕方、そして著者がアメリカで出会い、本書でもっとも言いたかった異文化理解のキーワード「ハッピーミディアム」の考え方など、読む者を飽きさせない。日本においても異なる文化をもつ人々の存在がごく身近になりつつある昨今、示唆に富む一冊である。

さらに、著者の自己実現の願望を可能にした家族の理解と支援も見逃せない。

そもそもこのプログラムに参加することになるきっかけが、夫君の「行ってみたら」のひと言。滞米中、折にふれ家族と交わされる手紙からは、家族のさずなの深まり、妻として母としての思いが読み取れる。自分の世界を広げたいと願う妻、その思いを受けとめ支える夫、単なる滞米休験記ではない側面が本書にはある。

〈原田紀子〉

（一三〇〇円・主婦の友社刊）

不運にも屈せず踊りの道

西崎　祥「舞踊生活50周年記念アルバム・道」

そういえばデンキ屋さん、あったなー。柏原の裁判所通りの角っこに、わりと大きな店。昭和二十八年当時は、新発売の電気洗濯機が回っていたが、一年後の西崎（粕谷京子）さんの頃には早くもテレビが店頭に出ていたという。

幼少から踊りが好きで、十歳から稽古を始めたという西崎さんは、たまたまそのデンキ屋さんのテレビで、当時の舞踊界で異彩を放っていた西崎緑師匠の踊りを見る。「自分のめざす踊りはこれだ」と心に決め、大胆にもその師匠の門を叩くために上京するのだ。高名な舞踊家であり、容易なことでは入門は許されなかったが、著名な音楽家・山田耕作の紹介で道が開け、同時に山田家の「お手伝いさん」をしながら西崎流の踊りの修業に励むことになった。

その修業の苛酷なまでの厳しさは、本書を読んでいただくほかはないが、まる二年の修業にも耐えて、やがて内弟子になる約束の日を目前にして師匠・西崎緑が急逝する。この思わぬ不運の前に絶望の淵に立たされる彼女。「柏原に帰ってこい」という両親の命令にも背いて、踊りの道を自分の定めとして切り開いてゆく、その姿は気丈であり、感動的である。

本書は、こうした歩みを綴ったエッセイを後編にして、前編では、艶やかな舞い姿をカラーアルバムで構成し、五十周年記念にふさわしい出版となった。

〈編集部〉

（A4判七二頁・税込み三〇〇〇円）

ヒトと自然の秘められた歴史

岩槻邦男著『文明が育てた植物たち』

京大、ついで東大で植物学の教鞭をとり、今も環境保全のために世界を飛び回る著者が東大退官記念に昨年上梓したのは「シダ植物からの自然史」（東京大学出版）であった。しかし、これは専門書なので植物か林学の専攻者でないとチンプンカンである。著者は日本放送出版より『植物からの警告』という啓蒙書も著しているが、丹波の自然で育った会員諸氏にピッタリなのは今春上梓された本書であろう。

「人里の自然を守れ」という運動が盛んである。だが人里とても新石器時代以来のヒトが自分たちの好みで自然を変貌させてきた姿であって、決して原始自然ではない。それも不可逆的な流れだったから、いまさら原始自然へ戻せるわけはない。人類にできるのは、いま地球がどういう状態にあるのか、新石器時代以後の

人類が、どんな変貌を自然に強いてきたのかを正確に把握し、その知見に基づいて未来へ向けての自然との共存策を案出すべきである。

まずこう切り出した著者は、続いて生物多様性研究の重要性に言及する。人類は数え切れないほど多くの種を絶滅させてきたし、今も動物にも植物にも絶滅が危惧されるものが沢山ある。

一九九二年の環境サミットで「生物多様性条約」が採択されてからは、生物多様性の危機といえば絶滅ばかりが話題にされるが、逆にヒトの営み、すなわち文明が育ててきた生物もあるのではないか。むしろ、その中に新石器時代以来のヒトと自然の歴史が秘められているのではないか……。

こうして著者は、熱帯の森林危機、食糧危機、有性生殖しない生物と様々な話題と結びながら、明治時代に博物学と訳されたために誤解されてきたナチュラルヒストリー研究の重要性を最後に訴える。四〇年ほど前、「岩槻先輩、DNAをキーワードとする生命現象の解明が飛躍的に進みよる時に、こんな研究やっとってんですか」と無遠慮に尋ねた小生は、内心忸怩たる思いで読んだことを告白したい。

〈徳田八郎衛〉

（本体二四〇〇円・東京大学出版刊）

■郷土に関する本――

日本各地の分水界を紹介

掘淳一著「誰でも行ける意外な水源・不思議な分水――ドラマを秘めた川たち――」

氷上町石生の水分れ橋のPRに務めてきた者には、本書との出会いは大きな感動だった。著者は京都出身で、北大物理学科を卒業後、母校で教鞭をとりながら日本中を旅して著した地図や地形に関する教養書、解説書は数え切れない。その一つの「地図の楽しみ」（河出書房新社）は日本エッセイストクラブ賞を受賞している。

共著の「地図の風景――大阪・兵庫――」（そしえて）でも著者は旧大路村の奥の栗柄峠や篠山を探訪しているが、石生の水分れは共著者の分担となっていた。谷中分水地形にこだわるこの著者に、是非一度、石生という「峠らしくない峠」にご来駕賜りたいと願っていたら、昨年出版されたこの本で、すでに一九八四年に石生を訪ねたことが記してあった。

だが登場する故郷の名所、いや名分水は「日本海と瀬戸内海に分れる水――石生」だけではない。釧路から阿蘇に至る全国三十二の峠や川が紹介される中で、「日本海と瀬戸内海の水争い――栗柄峠と鼓峠」、「水がつながりかけている?――青垣峠」、「真っ平らでファジーな分水界――丹南町牛が瀬」と何と西丹波から四個所も取材の栄に浴しているのだ。

なお石生の水分れの好敵手?で美濃と飛騨の国境、蛭ケ野峠も登場するが、その分水は人工的な作為だと記されている。石生の自然な水分れに、乾杯！

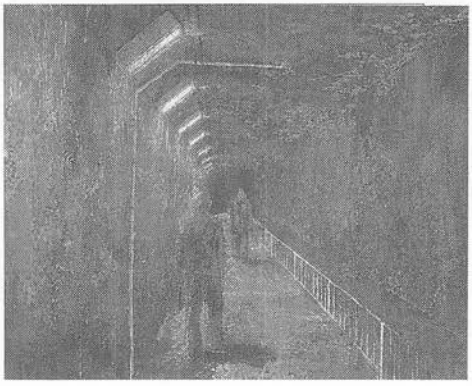
〈徳田八郎衛〉

（東京書籍・二五〇〇円）

展覧会

◉第十回青垣二〇〇一年日本画展

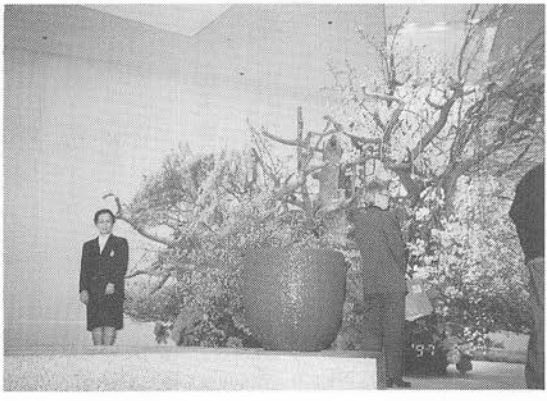
「21世紀に於ける日本画」という課題を掲げ、四十歳以下の画家に限ってのコンクール。大賞の岡部隆志の「地下道」〈写真〉。暗い夜の地下道をうつむき加減の人間が二人。後ろ向きの人間の背中に妙に不安感を感じさせる。塙峰夫の「祈りの街（ベナレス）」。比較的動きのある線描にインドの聖地を描く作者の心をみる。他に潘星道の「三体」。細川英邦の「TICKET TO THE MOON」。宮越葵の「甘藍」など。「諾々と受容されるのではなく、若者らしい率直な眼でしっかりと見据え、それに対しての疑問や反撥を感じさせるような作品を……」という審査員長の言葉は、この展覧会のみならず今の日本画壇に向かっての言葉と受け取れる。（96年12月2日～7日　有楽町・洋協アートホール）



◉第四回柴の会展「風の彩」

草月流六十年の経験をもつ志村慶子氏主催の（勝郎氏夫人）華道展である。

会場に入ると先ずむかえ花が目をひく。一階はイサム・ノグチ氏構成の回遊式による会場。最初は色彩をおさえ、線を主体にした作品群、次に階段を登るにしたがって黄色の花々でまとめ、最上段は右に各種の桜を配し、左は赤松の太い幹で受けてたおやかさと強さの両面を感じさせる見事な作品。イサム・ノグチ氏の構成した会場全体を「器」のつもりで……と話される志村氏。大きな空間に面、線、色が見事に構成されて、しかも現代と古典の融合

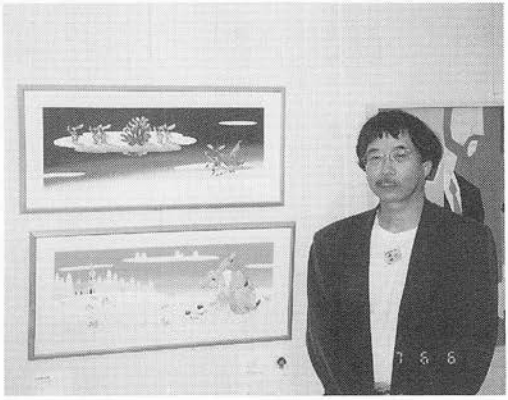


を感じたのは私の独断だろうか。会場を通して個人の作者名が一切ない。伺うと、百名近い社中の方々が、個人としてではなく全員の造型創作として発表されたとのこと。また、六階の会場もすべてグループによる製作であった。

花は木は生きている。呼吸をしている。それだけに素材選定から構想、そして使用される数倍もの材料が必要となり、その間の苦労がしのばれた。会場に流れるBGMはこの展覧会のために西村由紀江さんが作曲されたものという。（97年3月20日～22日、赤坂・草月会館）

◉第二回　31の種展

大久保宏昭氏（青垣町出身）出品のグループ展。案内状には「タネ」と読むか「しゅ」ととるか、ひょっとして「?!」そこは皆さんのご自由、というイラストレーターの集団である。大久保さんとは最近同窓会で会い名刺がわりの作品入りのはがきを見て宇宙的な感じに興味を持って会場に出かけた。会場は「タネ」か「しゅ」か、童話画家の世代をこえた展覧会。大久保さんは昭和十八年生まれ。日本児童出版美術家連盟会員、あの会々員、フリーイラストレーター。創作絵本、広告、雑誌イラスト、単行本のさし絵、テレビ絵本などを製作。「カタカナアイウエオ、ひらがなあいうえお」（偕成社）「母と子供のテレビ絵本」「きつね先生のふしぎ」（NHK）「できるまで図鑑」（アリス館）等の著作があるが、最近作は金の星社出版の「星座物語り」。宇宙に関して大変興味があるとのこと。「仕事は大変楽しいが絵本作家の文や詩を読んでその絵づくりとの狭間で行間を広げてゆくことの楽しさとむずかしさが同居します」……の言葉が耳にのこった。（97年6月5日～11日、新宿ギャラリー絵夢）



◉可部美智子陶展

郷友にはおなじみの陶彫展。可部さんの創作の原点は上野の博物館で見た中国出土品「俑」との出会い。悲しみ、悩みをかくして楚々として楽しそうに踊る「舞楽人」の姿に息を飲んだという（『山ざる』第27号より）。

会場中央に陶彫「七福神平和サミット97」が目をひく。中国、日本、印度

の七福神のルーツをしらべて「和」と「輪」をかけたアイデアが面白い。「万葉乙女」等のすがすがしくやさしい表情、小品だが「風にも負けず」等を見ていると「あの俑との出会いが、私にライフワークを授けて下さった」（傍点筆者）の言葉を思いおこす。

その他おちついた色彩の「灰釉長方皿」「織部長皿」の深い色。大作では「蒼釉角壷」、銅器を思わせる重厚な「蒼釉大盤」等。（97年7月22日～8月4日、東急本店工芸品売場）

◉展覧会予告

常岡幹彦日本画個展「玄に向かって'98」

会期――'98年7月14日(火)～20日(月)
7日間

会場――日本橋三越本店美術部、特選画廊

昨年八月から十月にかけてスイス山岳部を放浪。今回は全作品、スイスの山と谷と湖を横七メートルの大作二点を中心に発表。約二十点。

■お願い

展覧会開催の方（予告でも結構）、常岡まで案内状を早めにお送り下さい。出来る限りご紹介したいと思います。

■訃　報

平成九年八月三十一日までに事務局に届いた訃報は次の通り。心からご冥福をお祈り申し上げます。

源　富士乃殿　平成八年三月二日
谷垣　正雄殿　平成八年十月二十五日
足立　三治殿　平成八年十月二十九日
船越　祥郎殿　平成八年十月
上山　顕殿　平成九年一月八日
足立　貞雄殿　平成九年三月十七日
谷　達雄殿　平成九年七月二十三日
細見　綾子殿　平成九年九月

〈おわび〉

本誌27号本欄で鴻谷正博氏にはたいへん失礼致しました。深くお詫び申し上げます。

鴻谷正博氏は昭和二十四年青垣町出身。横浜市金沢区並木三－六－三－三〇四（☎〇四五－七八三－一〇一六）にお住まいで、神奈川県庁に勤務されております。

ディナークルーズを楽しむ

―柏高6回生の集い―

飯田光雄（青垣町）

柏高二十九年卒の関東在住者の同窓会『柏友会』を今年も六月一日に開催しました。

前日の雨がウソのように晴れわたった夕方、東京港の竹芝桟橋に集合し、夕景から夜景へと変わる美しい東京湾の景色を見ながらヴァンテアン号の個室を借り切りディナークルーズを楽しみました。

関西から竹村君も参加され、にぎやかに丹波弁でしゃべったり笑ったりアッという間に時間が過ぎてしまいました。

来年も全員が元気で会えることを楽しみに次回幹事を足立正美君、竹内光子さんにバトンタッチをして終了しました。柏高6回生の皆さん次回はぜひご参加下さい。

■第6回生同窓会　母校創立百周年を記念した第6回生同窓会が陽春の五月四日、JA柏原支店2階ホールで開かれ、約百人が参加した。パーティに先立ち貸切バスにより丹波の新名所めぐりをし、完成した同窓会館を見学した。

浜名湖に集う―柏高7回生―

鈴木智丈（山南町）
（旧姓 井谷・浜松市在住）

五月十七・八の両日、東西から二十余名が参加して同窓会を催した。「開放と交流」このタイトルは、今回の会場となった浜名湖の歴史であり、同窓会を象徴する言葉ともなった。――日本列島のほぼ中心。黒潮洗う太平洋から内陸へ、ちょうど手のひらを大きく広げたように一つの〝海〟が入り込んでいる湖。そこは、大小二十八の河川からの淡水と海の潮が入り混じり、せめぎ合う「汽水湖」だ。有史以来、水はその周りに人を住まわせ、水に似合った文化を生んだ。やがて来る二十一世紀に浜名湖圏と呼ぶべき姿があるとしたら、それはまた、この湖の水の性を映したものであるに違いない。外海と通じ、その風土にも似た「開放と交流」をもたらした明応七年の今切（いまぎれ）の出現から、来年で五百年を数える。――中日新聞「21世紀への遺産」より。

広々とした風土、水の幸に恵まれなかった〝山ざる〟たちの一大イベントでもあった。それだけに、湖上遊覧は最も楽しいひとときでもあった。お天気もよし、潮風の心地よさがいつまでも忘れられない。それぞれに、青春を想い、若さもよみがえらせて、楽しく語り合った。

この湖は、水の幸を求めて群がるトビ、カワウ、時にはオジロワシや白鳥までも渡ってくる。浜名湖産のうなぎはあまりにも有名。越冬つばめの〝ツバメの宿〟。夏のツバメのねぐら、渡り鳥のコアジサシのコロニー（保護されている）、はるか南から産卵のためにやってくるウミガメの砂浜。

「砂丘があるのは知らなかった」。湖口から東西数十キロ（どこまでも）に砂浜がつらなっている。

「砂丘では素足になり海までかけて行った……今回は、とても楽しい一日でし

た。参加したから出来たのだ！」。海水までたどり着けたのは数名にすぎず、わが同窓生には苛酷だったね。

「夢のようなひとときを過ごすことができました」。ハイ・レストランで食事を楽しみ、クラブで歌って踊って語り合った。

「初めての土地で、眺めも、何もかも最高の……好きになりました」など、多数の便りが届けられた。

湖の入口にある新居の関所を見学、唯一、残された関所の建物、東海道の難所、海上二時間の命がけの渡海だったという。湖の開口部は流れが早く、波立っている。その「今切の大橋」を渡る。この橋には照明がない。なぜ？

出入りする魚群に妨げとなるからだという。この海岸線を走る道路には、保護のための工夫がなされている。照明のため、産卵したカメが海に帰れなかったり、近づけなかったりする。砂浜に入る四駆にも規制が加えられている。

この豊かな湖にも〝老〟がせまり来る……。人間の生活の営みが汚染を広げている。今、湖水を護るさまざまな運動を行っている。来年の開放五百年に向けて、そして二〇〇四年の世界園芸博へと……。

湖と周辺の風土は、私の人生の大先生でもある。湖畔には先端技術の研究開発企業、頭脳センターがあり、県立音楽公園も計画されている。この豊かな自然の恵みを二十一世紀へと伝えてほしい。

交歓会では—おお母校—を合唱。明けて観光バスでは男女ペアになって着席。新幹線の上下ホームで手を振り合って住地に向かった。

出席を予定しながら出席できなかった友よ、二日目に参加できなかった君よ、残念だった。

ああ、ふるさとの友よ、恋人よ、幸せな交歓のひとときを感謝している。「開放と交流」の湖を忘れないでほしい。みんなありがとう。

柏陵同窓会東京支部だより

恒例の柏陵同窓会東京支部総会は、平成九年五月三十一日（土）、九段会館で行われた。

本部からは植田憲雄会長、田中洋行、永井壮一郎両副会長、高校からは堀井隆水校長が出席され、四月二十六日に挙行された創立百周年記念大会の報告と、募金への協力に対する謝辞を述べられた。

上山顕支部長が一月に逝去されて以来、空席となっている支部長と、改選期を迎えた役員改選の件が審議されたが、人選や改選方法については、早急に幹事会を招集して決定することになった。参加人員は七十名。

丹波の動き（'96・8～'97・7）―丹波新聞の見出しから―

■96年8月

1日○丹波地方の人口動態　県平均上回る死亡率　死因トップはガン

○県道追入―市島線の「多利バイパス」春日町内の六百メートルで供用開始

4日○丹波にもO157の影　生ものの売れ行き激減　キャンセル相次ぐキャンプ場

○県道沼―市島線の「谷上バイパス」開通

11日○北近畿豊岡自動車道の春日町野村―青垣町遠阪間二十四キロの早期完成を期待し着工記念祝賀会

○県道岩崎―市島線の前木戸（さしど）橋完成

18日○氷上町沼でひょうたんまつり開く地区での共通の話題づくりに作品展示や加工法の指導も

22日○一七・八日の篠山デカンショ祭に延べ十六万人の人出

○氷上高校で夏休み返上でぶどうの販売実習に汗流す

25日○夏休みで来館者急増　一日で四百人越える日も（市島町立図書館）

29日○山南町青田地区あげて「青田の炭焼き」を今に伝えようと窯つくる

■9月

○丹波地方の百歳以上は九人（男一人、女八人）最高年齢者は篠山町の石田豊治さん

5日○作家の末武綾子さんが「捨女さんへの旅」発行　母子関係の愛憎など田捨女の女性像描く

○市島町に新しいボランティアグループ「にんじんの会」発足　愛育班OBら十三人で結成

12日○柏原町商店街の空店舗対策として所有者に貸し出し希望の調査

15日○ふるさとの歌大切に「鴨庄小学校行進曲」が地域協力で復活し運動会で披露

22日○「旅愁」の作詞などで知られる犬童（いんどう）球溪の受難の旧制柏原中学校教師時代を柏原高校文化祭で生徒が上演

26日○「氷上郷内では昔も今も火打ち石がとれる」郡内のおとしよりの証言で物産図絵の謎解ける

■10月

3日○敬愛会大塚病院（氷上郷絹山）は療養型病棟など三棟建設で丹波最大規模の病院へ　老人痴呆にも対応

6日○多紀郡、氷上郡、福知山市の十五寺院が「丹波古刹霊場会」を結成し、十月一日に市島町白毫寺で〝開創法要〟

10日○丹波マツタケ好調な出荷　今世紀最後の大豊作か？

24日○谷洋一氏貫禄の当選　吉岡氏は無念の敗北

○山南町南中で地区内の中学生から七十歳代までのお年寄が地区有林でマツタケ狩り

27日○市島町が「戸籍業務」をシステム導入でOA化　出生、死亡届などスピード処理

31日○柏原町の磯尾隆司さんが裸婦像で日展十一回目の入選

■11月

3日○柏原町人口が十月三十日に一万人に人口密度は丹波でトップ

7日○市島町の新しい特産に「下仁田太ネギ」が初お目見え　転作作物として一・八ヘクタールで栽培

○青垣もみじマラソンで千九人が健脚競い秋の丹波路力走

10日○神池寺でスズムシ草を丹波で初めて確認　丹波自然友の会の女性会員が採集

17日○山南町で成果あげる「禁煙教室」受講者の半分が禁煙成功

21日○参院兵庫補選で芦尾長司が初当選大沢氏は都市部で健闘

○市島長の青木慧さん念願の「山猿塾」完成へ

24日○ゴルフボールの生産始めて半年「ダンロップ」の市島工場は開発から生産の拠点に

○県道青垣―柏原線の渋滞が大型店の進出で深刻化　本郷交差点付近の店主らが「タンパンベルクひかみ」に対し嘆願書提出

28日○丹波の森（柏原町）に「歓喜の歌」人生模様折り込み感動の渦　丹波初の「第九」演奏会

■12月

1日○氷上町常楽のデージー、首筋の寒さを解消する寝具「胡蝶の舞」を開発

5日○青垣町長に武田信一氏が初当選

○柏原高校の荒木謙教諭が自費出版した「忍と力を」が反響を呼び、加筆して大阪市の開放出版社から読み物として『破戒のモデル』―大江磯吉の生涯」を出版

8日○氷上郡教育委員会は「不登校対策会議」を設置「ゆとり」回復求める部活動の抜本的改革必要

12日○来春丹波地方の高校卒業予定の就職希望生徒のほぼ半数が地元就職で過去5年間で最高（柏原職安調べ）

○市島町前山小でおとしよりとしめなわや竹馬づくり

22日○丹波県民局は今年の県政十大ニュースに○157や集中豪雨など発表

26日○山南町奥野々の「村の図書館」が開館二年、ユニークな運営で子供達に人気

○氷上郡連合婦人会が、創立五十周年を迎え、「丹波の山と共に」と題する記念誌を出す

■97年1月

9日○氷上郡教委の同和問題の意識調査「結婚を祝福する」が半数強、「反対だが仕方がない」が三人に一人

12日○柏原八幡神社では来年二月の厄除け大祭に古代米を材料にした甘酒を振舞いたいと氏子が古代米の本格栽培

16日○二十歳の誓い新たに丹波各地で成人式新成人数は男九百十人、女八百十九人

23日○山南町久下小学校同窓生が厄払いにと母校に備品（エレクトーンとテレビ一台）贈る

○春日町社協は進修小学校に二頭の盲導犬を招いて、児童に福祉教育

26日○市島未来塾が都会の主婦らを募集し「ゆうきの里体験」の大豆編で、まずみそづくり

30日○丹波ひかみ観光連盟は「丹波氷上郡」観光PRのためホームページを開設

■2月

2日○春日町の七日市遺跡で弥生時代に階層格差が存在したことを証明する居住域と墓域発見

9日○氷上高校の生徒が青垣町と氷上町の老人ホームにプレゼント、「味噌と醤油をどうぞ」
13日○春日町長に前助役の滝本信好氏初当選
○青垣町主催の「全国公募青垣二〇〇一年日本画展」が十月十一日から同町で十二月一日から東京展が中央区銀座のギャラリーセンタービルで
16日○山南町岩屋で村の行事や歴史などを伝える村の新聞「いわや」を発行して二十年、元中学校教諭が編集
○氷上町立植野記念美術館が十一日に来館者二万人を突破
20日○柏原厄除け大祭が十七・八日に行われ、十二万人が参拝
○春日町黒井に「明治ナショナル春日工場」完成　照明器具界ナンバーワン工場を目ざす
23日○複線開業記念のミステリー列車が人気三月九日篠山口から出発

■3月

2日○川代公園に「吊り橋」山南町の新しい名所に
○青垣町老人給食サービスの十五周年無事故祝い　盛大に「よろこびの集い」
13日○JR福知山線新三田―篠山口間の複線開業、地域住民の悲願実る　活性化に大きな期待　篠山口駅で八日出発式
○「春日局の里健康マラソン大会」で八百四十二人が快走
16日○氷上郡教育委員会は幅広い教育活用に と各小、中学校でインターネットの整備を三か年計画で進める
20日○卒業の思い出にと氷上町絹山の北小学校六年生が加古川堤防に六十本の桜を植樹
23日○柏原町と山南町を結ぶ奥野タトンネル開通し記念式典（三月二十日）
○女子高生を使った児童福祉法違反などで津田組組員を逮捕　（柏原署）
30日○四月一日付で丹波地域の県職員移動を発表　丹波県民局次長に市島町出身の荒木捷文氏

■4月

3日○多気郡合併協議会が発足（篠山、亜紀、丹南、今田の四町）平成十一年四月の合併実現目ざして
6日○ゆとり先進企業二社の取り組み
ワールド電機、平和発条　労働法で週四十時間に
○命を大切に（ネットワーク・地球村）
美しい地球を子供へ　春日町で高木善之さんが講演会
13日○柏原で温泉の掘削進む　大阪の業者が進出（スーパー銭湯）秋頃オープンか
○後輩よ世界をめざせ（春日町出身）
小田勝美さん（新日鉄バレー副部長）が春日町スポーツ少年・少女を指導
17日○〝遊舟桜祭〟を満喫　青垣九ノ尾の里
○シベリア抑留者協会兵庫連が氷上町横田の平和記念碑前で合同慰霊祭
20日○脱水機で効率アップ　柏原町母坪の排水処理施設が稼働、十七日竣工式
24日○柏原高校創立百周年のシンボルとして「柏陵会館」完成、同窓生から三億円近い募金で

■5月

1日○丹波の森公苑が一周年、年間約20万人が利用　3日から記念イベント
8日○伊丹と丹波が「共演」丹波杜氏や伊丹酒の恩人、清兵衛を題材の芝居、夏に篠山の丹波田園交響ホールで上演
○市島、三ッ塚マラソン大会　十周年記念イベントに君原健二氏らを招いて各地より二千六百人参加

11日○柏原中で、創立五十周年記念式典
15日○大型店の進出が活発に。篠山口駅中心
ショッピングセンター等　出店計画
18日○環境ボランティアが発足　春日町女性
中心の自主グループ　月一日美化活動
22日○小川バイパス用地買収　総事業費百二
十億、道路河川等、66ヶ所で公共事業
○釈迦涅槃図を後世に　氷上町の高岩寺
寺宝を百年ぶりに修復
25日○古美術品どっさり　氷上町成松の老舗
旅館「葛野屋」改築後展示
29日○兵庫県副知事に芦田弘逸氏（青垣町出
身）丹波での期待は大きい

■6月

1日○若者層の被害増加、96年度丹波地方の
消費生活相談、マルチ商法などが横行
総段数は過去最高の四八〇件
○細見華岳さん人間国宝に　春日町出身
綴織（つづれおり）で初の認定
12日○不十分な保管状態、一万冊にのぼる貴
重な資料　篠山鳳嶋高校の青山文庫
○無農薬、無添加の味を　醤油づくりに
挑戦　ふるさと市島未来塾、都会の人
たちが麦刈り
15日○〝俳句の道〟に句碑を　今秋までに数
基建立へ　円通寺の里振興会が発足
19日○ショットガン直播の実演田、予想以上
の出来映え　発芽率も七割以上と好調
○赤米で村づくり、山南町岩屋の石龕寺
総門前の田んぼで、御田植祭
22日○青山会が青山歴史村を町に寄贈
大書院復元の記念に（篠山町）
○丹波布を後世に、青垣で技術伝承教室
○四十回記念で盛大に、氷上町老人大学
26日○「田舎体験紀行」を企画、春日町野瀬、
ふるさと躍進会が初の試み
○丹波から〝地発泡酒〟　西山酒造「美
也山波」（びやさんば）を蔵元直送
○大気汚染防止に配慮してごみ焼却施設
を新設（市島町）

■7月

3日○氷上町教委が復帰へ　各町議会で審議
スタート
6日○氷上町の細見さんが「国家大観」「鎌
倉遺文」等の歴史書や文献四千冊を、
町立図書館に寄贈
10日○「黒大豆戦国時代」を迎え篠山プラン
ドに危機感、安値の産地増え競争激化
13日○三万二千冊でスタート
氷上町立図書館19日オープンへ
○農業を守る対策を！（丹波の自然を美
しく）氷上町の足立正典さん
17日○氷上郡六町合併へ任意の連絡協発足
合併機運の盛り上がりをめざす
○青垣いきものふれあいの里の昆虫観察
川原探検　夏休み中特別企画いっぱい
20日○世界大会（スペイン）で4位に　パラ
グライダーの加藤豪さん（国内ランキ
ング一位）が青垣、岩屋山で猛練習
○全国公募の三百五十二点審査
青垣二〇〇一年日本画展　大賞は京都
の山尾圭介さん「自転車」
24日○バスケットボールの国際審判員に
柏原高校の岸田吉明教諭
○オートキャンプや釣りも春日町多利の
日ヶ奥渓谷にぎわう
27日○「自然署」で村おこし
地域特産物研究会を結成　青垣町、大
名草、浅草の物産展で販売
○野外施設の競合に、利用者数落ち込む
てこ入れ策は未定　今田町木津の県立
丹波林間学校
31日○住民総出で猪垣造り　春日町栢野作物
被害で大作戦展開

建築材料販売工事
建設大臣許可第1834号

中央建材工業株式会社

取締役副社長　荻　野　　武
（市島町出身）

本　　社　名古屋市千種区高見 1－6－1
電話　052（761）6181（代表）

東京支店　東京都大田区西蒲田 8 丁目 9 番10号
電話　03（3730）1281（代表）

大阪営業所　大阪市西区江戸堀 1－8－15
電話　06（443）6665

豊田営業所　愛知県西加茂郡三好町大字三始西田 3－4
電話　05613（4）3121

仙台出張所　仙台市青葉区高松 2－11－15
電話　022（273）5724

札幌出張所　札幌市中央区南一条西 7－12
電話　011（271）3961

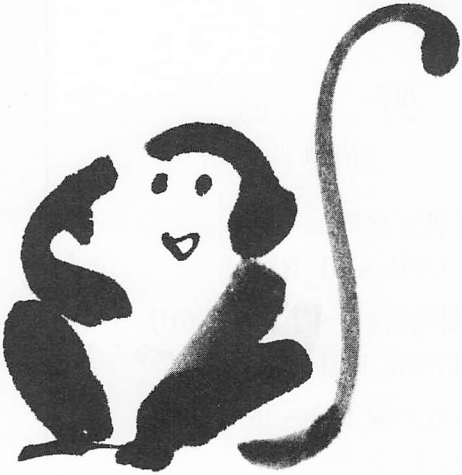
新潟出張所　新潟市米山 5－1－25
電話　0252（245）1705

松本出張所　松本市野溝木工 1－6－58
電話　0263（25）0351

広島出張所　広島市西区中広町 1－4－16
電話　082（291）3780

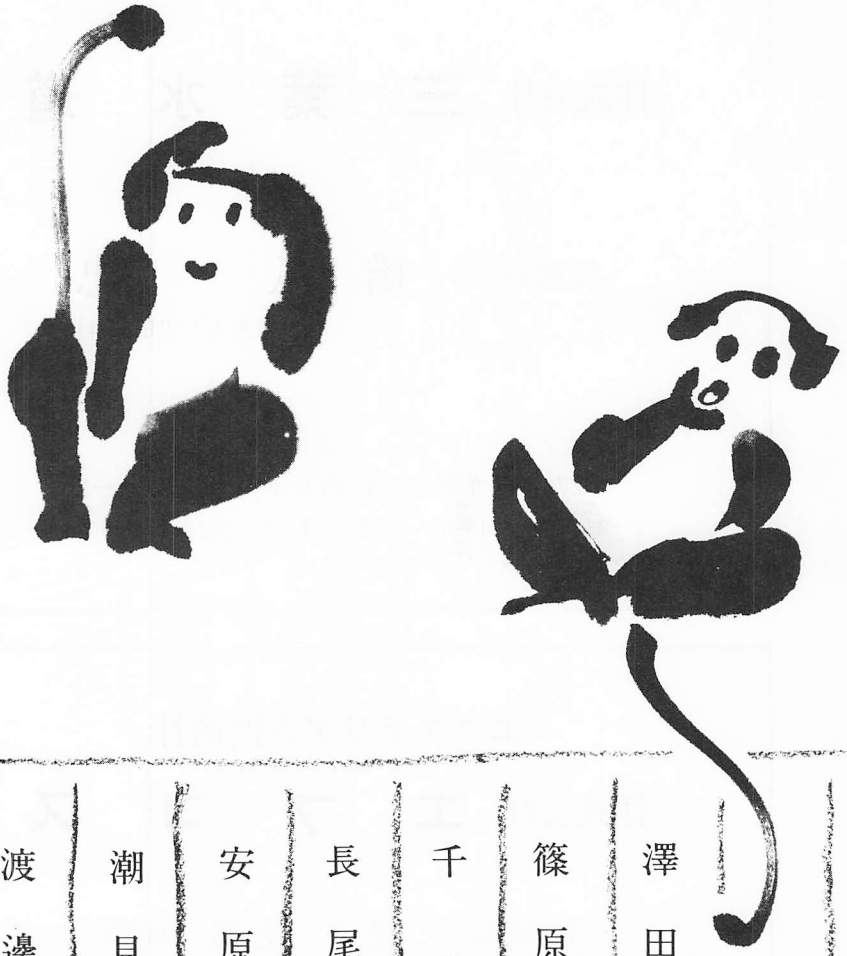
本誌発行にご協力有難うございました◆

猿友会



井田悦子
大石佐代子
小田明子
可部美智子
岸本昌子
喜田綾子
小糸イキ
笹倉郁子

◆本誌発行にご協力有難うございました



澤田みさを
篠原よね子
千葉淳子
長尾貴美代
安原三智子
潮見みつえ
渡邊貴美子

株式会社 **三　葉　水　道**

代表取締役　橋　爪　　忠
（氷上町黒田出身）

〒276　千葉県八千代市八千代台西 7－5－29
電 話　0474－84－7121　　FAX　0474－82－9626

エクステリア専門商社
株式会社 **エ　プ　コ　ス**

代表取締役　松 下　文 雄　（柏原町）
専務取締役　岡　　吉 明　（柏原町）
専務取締役　広 瀬　寿 和　（山南町）

〒351　埼玉県朝霞市膝折 3－7－5
TEL　(048) 466－1551（代表）

◆本誌発行にご協力有難うございました

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木　村　つ　た　江

東京都調布市東つつじヶ丘2－39－5
電話　03－3300－6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状　第2-319号
技術士（電気部門）登録証　第15810号
エネルギー管理士（電気）免状　第 2857号
エネルギー管理士（熱）　免状　第 5191号

若森技術士事務所

所長　若　森　敏　郎

〒302　茨城県取手市白山5－4－13
TEL・FAX 0297－72－0907

関東とふるさとをつなぐ“グローカル”な紙面

丹波新聞

代表取締役社長　小田晋作

人シリーズ好評連載中

丹波外で活躍する出身者の近況……丹波人NOW
丹波で話題を呼んだ人の活動……時の人
丹波内外のユニークな人の活動……ひとクローズアップ

1924年（大正13年）創刊
週2回（月・木）発行
購読料　1ヵ月　1,220円
（郵送料 200円）

◆購読・広告の御用命は
丹波新聞社
〒669-33 兵庫県氷上郡柏原町
Tel 0795(72)0530　Fax 0795(72)1956

三協運輸株式会社

取締役社長　岸本　勲
（氷上町出身）

本　　社　〒121 東京都足立区保木間1－1－3
TEL 03 (3860) 8112　FAX 03 (3860) 1631
埼玉支店　〒363 埼玉県桶川市大字坂田字畑谷1500－1
TEL 048 (728) 9380　FAX 048 (728) 9381
名古屋事業所　〒455 愛知県名古屋市港区木場1－4
TEL 052 (691) 8574　FAX 052 (691) 8447
倉　　庫　東京・埼玉・名古屋・仙台

◆本誌発行にご協力有難うございました

舞踊生活50周年記念

踊りの道は人の道―
カラーアルバムと
エッセーで綴る
西崎　祥
〈舞踊と人生〉

A 4判・カラー印刷／72頁
頒価 3000円（税込み／送料 310円）

お申し込みは
㈱ホンゴー出版　〒104 東京都中央区明石町2-16-206
☎03（3248）6625 郵便振替 00130－5－144071

書く・読む・調べる一役立つ歴史年表

記入式 同時代年表 '98年版

■自分史・社史・記念誌づくりにお役立てください。
A 5判・144頁／定価 1,500円（税込み）／平成9年12月20日書店発売

〈還暦記念〉に贈る

同時代シリーズ 昭和13年生まれ

■60歳からの〈充実人生〉に備え、生きがい情報を満載して贈る。
A 5判・280頁／上製本・ケース入り／定価 3,500円（送料・税込み）
平成9年1月1日発行／この本は書店販売は致しません。直接下記へ

株式会社ホンゴー出版
代表取締役　池田　忍
東京都中央区明石町 2-16-206
〒104 ☎03（3248）6625
郵便振替 00130－5－144071

本誌発行にご協力有難うございました◆

東京都ユニバーサルホッケー協会理事長
日本ユニバーサルホッケー協会常任理事
府中市教育委員会認定市民スポーツ指導員

足立和巳

〒183 東京都府中市栄町一―一五―二一七
電話 〇四二三―六四―七二二七
FAX 〇四二三―三六―〇五七六

足立かをる

足立勲平

〒251 藤沢市鵠沼藤ヶ谷一―七―四
電話 〇四六六―二二―六四六一

ミワ電気工事株式会社
代表取締役 足立謙悟

〒235 横浜市磯子区杉田五―二二―九
電話 〇四五―七七二―一二六一
FAX 〇四五―七七二―一二六四

足立静雄

株式会社 トレンタ
足立真一

〒211 川崎市中原区新丸子町七〇一
電話 〇四四―七二二―六三七一
自宅電話 〇四四―八五四―六三四〇

◆本誌発行にご協力有難うございました

足立誠一
〒248 鎌倉市鎌倉山四－八－一一五
電話 〇四六七－三一－三六〇〇

日本損害保険協会特級（一般）資格 第特一三五八六号
飯田保険事務所
飯田光雄
〒285 千葉県佐倉市白銀四－十四－五
電話 〇四三－四八五－〇五〇三
FAX 〇四三－四八五－〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶
株式会社 明日香園
代表取締役 池畑豪士郎
本社 東京都豊島区南池袋二－二六－五
電話 〇三－三九八〇－四七二二
直販店 西武百貨店池袋本店B1
電話 〇三－五九五二－五〇七六（直通）

生田清弘
〒157 東京都世田谷区成城一－七－七
電話 〇三－三四一五－一八九三

井本義一

上田脩
〒112 東京都文京区小石川五－一七－六

本誌発行にご協力有難うございました◆

大野善三
自宅 〒228 相模原市相模台七－二五－八
電話 〇四二七－四六－八七九〇

小田富士夫

梶原清
〒152 目黒区東が丘二－一三－二一八
アルカサーノ東が丘302
電話 〇三－三四一八－一二二五

株式会社 アイ・ケイ・アイ
代表取締役 岸田勇
〒103 東京都中央区日本橋人形町二－三四－一一
SEED日本橋3F
電話 〇三－三二一四九－五一六二

木呂子恵美子
〒204 東京都清瀬市中清戸二－七五〇－八
電話 〇四二四－九一－三〇三三

久保春雄
〒300 土浦市東崎町十三－二－六〇四
電話 〇二九八－二一－二九七八

◆本誌発行にご協力有難うございました

久保　豊

株式会社　アン
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷三－六－一－三
電話　〇三－三四七八－七四一一(代)

栗田　功

社団法人　日本ロボット工業会
理事
事務局長　小森　康宏
〒105　東京都港区芝公園三－五－八
機械振興会館213号
電話　〇三－三四三四－二九一九(代)

株式会社　近藤写真製版所
取締役社長　近藤　勇夫
〒162　東京都新宿区下宮比町二番一七号
電話　〇三－三二六〇－六二八一(代)

近藤　勇

〒272　市川市市川南三－一四－三九－一〇六
電話　〇四七三－二六－一九三七

坂上　勝朗

坂上　豊

坂本重雄
〒193 東京都八王子市大楽寺町三八七―二〇
電話 〇四二六―二六―七〇八六

佐々木盛雄
〒161 東京都新宿区中井二―十一―十八

合唱指揮者
笹倉　強
〒352 新座市栄四―五―二五
TEL・FAX〇四八―四七七―五六四〇

エディトリアル デザインワーク
鈴木事務所
アート・ディレクター 鈴木大助
〒162 東京都新宿区矢来町一〇五
石川ハイム2F
TEL・FAX〇三―五二二八―三五七四

勢川武彦
〒164 東京都中野区東中野二―一七―二〇
電話 〇三―三三六一―八六七六

◆本誌発行にご協力有難うございました

高見嘉都司
〒173 東京都板橋区能野町四〇番十一号
電話 〇三―三九五六―〇六〇〇

大菱印刷有限会社
田中寛
〒110 東京都台東区台東一―二七―五 大塚ビル
電話 〇三―三八三三―一五九五

常岡幹彦

鶴田宏

田英夫
〒100 東京都千代田区永田町二―一―一 参議院議員会館229号室
電話 〇三―三五八一―三一一一 内線五三二九

日本舞踊 西崎祥
端唄 根岸妙
〒224 横浜市都筑区大棚町五〇〇―八
電話 〇四五―五九一―六六五五

本誌発行にご協力有難うございました◆

新田浩迪
〒222 横浜市港北区師岡町四一八
グリーンヒル大倉山C－106
電話 〇四五－五四一－三四二九

野村豊
〒156 東京都世田谷区船橋七－四－一二
電話 〇三－三四八一－九九三〇

波多洋三
〒112 東京都文京区春日二－一七－二
電話 〇三－三八一一－二八六〇

青葉山 八王子 真照寺 青葉霊苑
住職 堀井隆川
〒193 東京都八王子市元八王子町三－二三九七
電話 〇四二六－六三－八四〇三

瑞豊産業株式会社（都営八王子霊園となり 墓地分譲案内中）
代表取締役社長 水船隆昌
〒102 東京都千代田区五番町六
グレイス五番町ビル7F
電話 〇三－三二二一－一七三五

東京都行政書士會八王子支部 副支部長
小口・宮野合同事務所 所長
行政書士 宮野近
事務所 〒192 八王子市元横山町二－一八－三宮野ビル
電話・FAX 〇四二六－二八－一三五三
自宅 〒192 八王子市打越町一一一三－三
電話 〇四二六－三五－四三八五

◆本誌発行にご協力有難うございました

ウエディングドレス専門創作卸
株式会社 シャルム商会
常務取締役
東京店店長 村上 昇
東京店 〒164 東京都中野区弥生三－五－三
電話 〇三－三三七四－〇二一五(代)
本社 〒604 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話 〇七五－二二二－〇二一五(代)

村上久夫
〒168 東京都杉並区高井戸東三－四－十二
電話 〇三－三三三二－七一三四

山口和久
〒196 東京都昭島市二－一〇－二七
電話 〇四二－五四四－八八六一

PHP文化フォーラム 埴生の宿
代表 吉住自由造
〒216 川崎市宮前区宮崎五－五－三五
電話 〇四四－八六六－三六二一

義積保
〒277 柏市豊四季七〇二－一一
電話 〇四七一－七四－〇三二五

渡邊隆男

編集後記

★自然科学系に目を転ずれば、われらの郷土に関する書籍は案外多い。政治や経済の時局物と違って刊行から数年を経ても値打は一向に減らないから、今後も少しずつ紹介していきます。だが祭りの研究は、ぜひ地元出身の会員が競ってご執筆下さい。次回は谷川・常勝寺の「鬼こそ」です。（徳田）

★今年の夏に丹波へ帰り、私が懐かしいなあと感じたのは、あの赤色とはだ色が主体に塗られた神姫バスを見たときでした。そういえば、社会見学や駅に出るときなど、あのバスにはずいぶんとお世話になりました。思い出という財産を大切に、これからも『山ざる』作りにがんばっていきたいと思っております。（本城）

★どこからともなく木犀の香りが漂っている。厳しかった夏がうそのように思えます。この花が咲く頃になると故郷での秋の取り入れを思い出す。新米、栗、柿、さつまいもなど食べ物がいっぱいあり、私の味覚も丹波で養われ、おいしい、まずいの基準となっている今では野菜果物も年中店頭で見ることができ旬の物もわからなくなってしまいました。デパートでの買い物にはつい丹波産のものに手が伸びています。山ざる、郷友会とこれもまた私にとっては一層の郷愁をおぼえます。まだ一度もご参加なさったことのない方は非お出かけ下さい。（片岡）

★明治はいよいよ遠くなった。郷友会会長を務められた足立三治さん、厚生省保険局長などを歴任され柏陵会東京支部長であった上山顕さん、女流俳人として大きな足跡を残された細見綾子さんらが相次ぎ他界された。いずれも九十歳前後のご高齢であり、天寿を全うされた最期であったが、平成時代まで四代を生きて、時代の移り変わりをじっくりと見てこられた。とりわけ平成になってからの人心の荒廃に、折り目正しい明治人はどんな感慨を抱かれていただろうか。

★昨今の農村風景は今昔の感に堪えないが、丹波新聞によると「商店街」もまた寂れる一方のようだ。この現象は都会でも同じだが、田舎の駅前の中心商店街が、人通りも薄れ閑散としている様は侘しい。大型スーパーが郊外にでき、車による買物客を奪われているのが主な原因のようだ。自然と共に触れあいの場である「商店街」も人間とって大切な生活環境である。何か方策はないものか。（池田）

山ざる　第28号

平成九年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄　池田　忍　木呂子恵美子
足立和巳　大野善三　小田富士夫
片岡クミ子　坂上勝朗　常岡幹彦
鶴田ゆき子　徳田八郎衛　本城英明
宮野　近　渡邊隆男

発行者　関東氷上郷友会会長　渡邊　隆男
〒102　東京都千代田区神田小川町一ノ二
DMSビル内・関東氷上郷友会・事務局
☎〇三（三二九三）二九六一
振替〇〇一一〇－三－一一二三一三〇

製作　株式会社二玄社
編集協力　株式会社ホンゴー出版

おもわず新しい

NEXTA

“包装文化を創造するネクスタグループ”

ネクスタ株式会社

本　　社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京支店	111	東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F	Tel 03-3861-2331
大阪支店	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
名古屋営業所	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
九州営業所	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ ラッピイ株式会社

本　　社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京工場	121	東京都足立区中央本町5-22-12	Tel 03-3849-6611
千葉工場	270-02	千葉県東葛飾郡関宿町台町2192	Tel 0471-96-1721
名古屋工場	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
関西工場	669-13	兵庫県三田市テクノパーク2-2	Tel 0795-68-5500
福井工場	919-04	福井県坂井郡春江町江留下相田63-66	Tel 0776-51-5886
福岡工場	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ パッケイ株式会社

本　　社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
栃木工場	349-13	栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938	Tel 0282-62-3321
兵庫工場	675-11	兵庫県加古郡稲美町蛸草1438-1	Tel 0794-95-0257

故宮博物院の名蹟

台北の故宮博物院は中国美術の精粋を擁する質・量ともに世界随一の美術館で、なかでも書画は歴代の名作のすべてを蒐集した観があります。その中から、後世に継承すべき代表的な作品を厳選し、台北の故宮博物院との合作で、完全複製を作りあげました。いずれも原蹟と寸分たがわぬ大きさはもとより、筆勢、墨色・彩色のぼかし、紙面、落款や印の朱のにじみまで驚くほど精密に再現しました。

故宮博物院の名蹟カタログ、進呈。

P51 郎世寧『白鷹図』 清時代

■軸／絹本・設色
■作品画面寸法＝121.7×64.0cm
■軸装寸法＝200.0×76.0cm
■定価＝（本体66,000円＋税）

二玄社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2
電話03-5395-0511 Fax. 03-5395-0515 代表取締役社長 渡邊隆男